

之を「周禮」大師の大師教六詩、瞽矇諷詩、等に參するに大略瞽矇が賦、誦、諷、を掌りしことを知るなり。諷詩の諷は朗讀なり、鄭注、諷誦詩、謂闕讀之、不依詠也、といへる是なり。誦は時として節つけてうたふことをさすものもあり、周禮大司樂の諷誦言語、といひ禮記文王世子の春誦の類是なり。しかし是は今論する所のものに非ず。

第二節 箴諫を誦せし實例

瞽は古代に於て天道を知るものとして又樂人として尊ばれたり、瞽は詩又は箴諫を誦したり。其の實例ありや。これは其の初に於て瞽が之をなせしならんも後に至りては必しも瞽に限らず、視力ある者と雖も之をなすに至りしが如し。箴諫には詩もあり、詩に非るものも之あり。殷の武丁が傳説をして朝夕規諫せしめたりといふは詩に非るものを誦せしめし例なり。そは楚の大夫白公子張の物語る所に見ゆ。曰く

得傳説以來、升以爲公、而使朝夕規諫曰、「若金、用女作礪、若津水、用女作舟、若天旱、用女作霖雨、啓乃心、沃朕心、若藥不瞑眩、厥疾不瘳、若跣不視地、厥足用傷、」若武丁之神明也、猶自謂未父（治）故使朝夕規諫曰、云々、齊桓晉文、皆非嗣

也、還軫諸侯、不敢淫逸、近臣諫、遠臣諉、與人誦以自誥也、「韋昭注、與、衆也、誦、誦善敗也、誥、告也、」楚語、

「左傳」に載する所の虞箴の如きものは、例によりて推せば宜しく瞽矇の誦する所の列にあるべし。

晉の魏絳が言に曰く

昔周辛甲之爲大史也、命百官、官箴主闕、於虞人之箴曰、

芒芒禹迹	畫爲九州	經啓九道	民有寢廟
獸有茂草	各有攸處	德用不擾	在帝夷羿
冒于原獸	忘其國恤	而思其塵牡	武不可重
用不恢于夏家	獸臣司原	敢告僕夫	(左傳襄四年)

と。是必ず瞽矇の誦せしものならむ。

又晉語四に齊の姜氏の言中に引けるものに

瞽史之記曰、「韋昭注、瞽史知天道者」唐叔之世、將如商數、とあり、又同卷に晉の董因の引けるに

騷賦の生成を論ず

晉史記曰、嗣續其祖、如穀之滋、

といへり。此等の文辭は必ず晉の誦せし所のものなるを推知するなり。

衛の武公が「懿」の戒を誦せしめしといふは詩を誦せしめたるの例なり。

【参考】左史倚相の言、昔衛武公年數九十有五矣、猶箴儆於國、曰、云々、倚几有誦訓之諫、臨事有晉史之道、宴居有師工之誦、史不失盡、矇不失誦、以訓御之、於是乎、作懲戒、以自儆也、〔韋昭注、懿、詩大雅抑之篇也、懲讀曰抑、〕楚語上、

抑詩第三章、女雖淇樂、〔朱子曰、女、武公使人誦詩而命己之詞也、後凡言女言爾言小子者、放此、〕

天子諸侯に限らず、諸侯は其の太子のためにも詩を誦せしめたり。楚の莊王（西六一三―五九一）が士程なるものをして太子箴に傳たらしめしときの例あり。事は申叔時の言に見ゆ。曰く

教之詩、而爲之道、廣顯德、以耀明其志、若是不從、動而不悛、則文詠物以行之、〔韋昭注、文、文詞也、詠、風也、謂、以文詞風託事物以動行之也、〕且夫誦詩以輔相之、威儀以先、後之云々楚語上

と。

詩大雅「桑柔」に

聽言則對、誦言如醉、〔鄭箋、貪惡之人、見道德之言、則應答之、見誦詩書之言、則冥臥如醉、〕

とあり。此の誦言、鄭氏は「詩書の言を誦す」といへるが恐くは詩書に限らず廣く箴諫となるべき言を誦することならん。

第三節 詩の誦

次に詩の誦につきて述ぶべし。

詩は音樂的節奏を以てしたる、場合と、單に朗誦せらる、場合とあり。余は現在の「詩經」の詩篇が音樂的にうたはるゝに至りしは寧ろ後の事にして、單に朗誦することが古例ならんと思ふ。

風雅頌の頌も後世の意義は容を以て之を解するも其の古義は誦を以てするに非るか。余の此の想像を助くるものは「周禮」大卜の

大卜掌三兆之灋、（中略）其經兆之體、皆百有二十、其頌皆千有二百、

騷賦の生成を論ず

又、

占人、以八筮占八頌、

に對し鄭注に頌、謂繇也、杜預の解左傳閔二年に繇、卦兆之占辭孫氏詒讓の周禮正義に案、ト繇之文、皆爲韻語、與詩相類、故亦謂之頌、といへり。

繇の例は晉語四に司空季子の言に

其繇曰、元亨利貞、勿用有攸往、利建侯、

といひ、又、其繇曰、利建侯行師、(今周易豫卦の卦辭にみゆ)とあるものはなり、左傳閔二年に

又筮之、遇大有之乾、曰、同復于父、敬如君所、(杜注、筮者之辭也、)

とありて後文に

成風聞成季之繇、乃事之、

とあり、同復二句は即ち繇辭なるべし。

繇の例は更に多し、左に記す、

例二、

初晉獻公、欲以驪姬爲夫人、卜之、不吉、筮之、吉、公曰、從筮、卜人曰、筮短龜長、不如

從長、且其繇曰、(杜注、繇、卜兆辭、)

專之渝、(杜注、渝、變也、)攘公之瑜、(注、攘、除也、瑜、美也、)一薰一蕕、十年尚猶

有臭、(正義、筮卦之辭、亦名爲繇、但此是卜人之言、知是卜兆辭也、卜人舉此辭、以止公、

則兆頌舊有此辭、非卜人始爲之也、)(左傳僖公四年)

例三、

初晉獻公、筮嫁伯姬於秦、遇歸妹之睽、史蘇占之、曰、不吉、其繇曰、

士刳羊亦無嬴也、女承筐亦無貺也、

西鄰責言不可償也、歸妹之睽、猶無相也、

震之離、亦離之震、爲雷爲火、爲羸敗姬、

車說其輻、火焚其旗、不利行師、敗于宗丘、

歸妹睽孤、寇張之弧、姪其從姑、

六年其逋逃、歸其國而棄其家、(左傳僖十五年)

〔案〕今周易歸妹卦上六爻辭曰、女承筐无實、士刳羊、无血、无攸利、

例四、

騷賦の生成を論ず

齊の崔武子なるもの棠姜を娶らんとて之を筮したるとき陳文子曰く

且其繇曰、困于石、據于蒺藜、入于其宮、不見其妻、凶、(左傳襄二十五年)

とあり、是は今の周易困卦の六三の爻辭に見ゆ、

例五、

「墨子」の耕柱篇にも左例あり

兆之由曰

逢逢白雲、

一南一北、

一西一東、

九鼎既成、

遷于三國、(墨子、耕柱篇)

余は歌謠の謠と兆頌の繇と何等の關係あるに非るやをおもふ。歌謠の謠も詠歌せず朗讀的にこなへしによりかく名づけしならん。

列子 周穆王篇

に、西王母爲王謠、「張注、徒歌曰謠、詩名白雲」同 仲尼篇に堯乃微服、游於康

衢、聞兒童謠曰、立我蒸民、莫匪爾極、不識不知、順帝之則、鄭語の鄭の史伯の言中に見えたる

有童謠曰、桀弧箕服、實亡周國、此等の謠なるものは古繇の遺風ならざるか。

左傳、僖五年、晉の卜偃が晉侯に答へたる言中の童謠に曰く

丙子之辰

龍尾伏辰

均服振振

取虢之旂

鶉之賁賁

天策焯焯

火中成軍

虢公其奔

これは童謠の大に整備せるものなり。

「説文」には繇、由、ありて繇なし。

鄙見を以てすれば繇

周禮釋文、直又反、周易釋文、直救反、

「繇、匡謬正俗作繇 音調皆作 繇」は誦せられたるを以て「周禮」には之を頌といふなり。孫氏の説の如く詩と類するが故に頌といふには非るべし。

頌詩も亦た誦せられたるが故に頌の名あり。衛の北宮文子の言に

文王之功、天下誦而歌舞之、(左傳襄三十一年)

此は頌詩の誦せられしことを語るものとみて可ならん。周語上に見ゆる周文公之頌曰といふ言も風雅頌の頌をいふに非ずして諷諭の誦を意味するものなれども知るべからず。蓋し諷諭の義前にして頌徳の意後に起る。頌の一音は誦なり。孟子萬章下の頌其詩、讀其書、の頌は誦することをいふ。劉熙の「釋名」釋典義の

稱頌成功、謂之頌、

も後義にはあれども稱頌とは誦することをいへるものならん。

周禮六詩の鄭注に

歌賦の生成を論ず

頌之言、誦也、容也、誦今之德、廣以美之、

毛詩周頌の釋文に

頌者、誦也、容也、歌誦盛德、序太平之形容、以此至美告於神明、

と見ゆ、「頌は誦なり容なり」とは頌に二音あるを示すなり、故に一は誦を以てとき又た容を以てとく。簡單なる字音が複雑なる字音の省略なりとせばショウの音はヨウより古かるべきはずなり。故に余は頌詩は稱誦せられたるによりて先づ頌ショウと稱呼せられたりと考ふ。然るに周に於ては頌詩に歌舞を伴ひ、舞容を具ふるに至り、而して頌に容字の音あるにより（何の時にヨウの音を生じたるやは不明）之を容として解釋すること始まれり。頌の字、籀文に頌とあるといへば容の義もなか／＼に古きが如し、而かも誦の義は更に古からんと考ふ。頌の字に對して、容の解釋を取るとしても推理上よりすれば

舞容——徳容——太平之容——成功

の如き順序を経るわけなり。轉じて褒美の義をふくみ、或は字音を假りて寛容の義にも用ふ。説文に頌、兒也、といひ貌、頌儀也、といへるは容の義を取るなり。又籀文を載せて頌をあぐ、漢書儒林傳の徐生善爲頌、及び唐生褚生……頌禮甚嚴の頌は容の義なり。史記魯仲連傳の從頌は從

容なり。漢書刑法志の頌繫之は寛容なり。

詩序の

頌者、美盛徳之形容、以其成功、告於神明者也、

とあるは頌詩の實質をどくものとしては必しも不可なし。たとへば周頌の「維清」は象舞に奏し用兵刺伐の狀をなすといへり、舞容は即ち或人の徳容を寫すものに外ならざれば徳容にても不可なき如くなるも、頌字の解としては徳容よりも先づ舞容としてみざる可らざるなり。而して此の舞容と雖も恐くは誦より以後に起りしことと考ふるなり。

之を詩篇の實例に徴せん、

大雅の「靈臺」に

於論鼓鐘、於樂辟雍、鼓逢逢、矇瞍奏公、

とあり、周頌の「有瞽」に

有瞽有瞽、在周之庭、設業設虡、崇牙樹羽、應田縣鼓、鞀磬祝圉、既備乃奏、簫管備舉、

とあり、鄭箋並に矇矇の樂聲をなすこととして説きたるも、果して樂聲のみに止まるや否。たゞ余は尙未だ矇が頌詩中に詩を誦したりとの例を擧げ得ざるを憾む。

騷賦の生成を論ず

次に頌詩の誦せられたるの一證と見るべきは頌中の句法の不規則なる形の往々存すること是なり。

例、

文王之德之純」

駿惠我文王」(周頌、維天之命)

肇禋 迄用有成 維周之禎 (維清)

無封靡于爾邦 維王其崇之 念茲戎功 繼序其皇之 (烈文)

昊天有成命 二后受之 成王不敢康 夙夜基命宥密 於維熙單厥心 肆其靖之 (昊天有成命)

日就月將 學有緝熙于光明 (敬之)

儀式刑文王之典 日靖四方 (我將)

等、句形の齊整ならざるを見るは、誦に於ては必しも句形一致を要せざるによるものならざるか。或は反對に周頌は必ず樂歌として用ひられしものなり、樂曲に伴はしむる必要より句に長短あるなりと言はんか。是も亦一説なり。然らば二南小雅、の樂として用ひられたる篇には何故に周頌のごとき不規則なる句法多からざるや。余は周頌は假りに之を措くとするも商頌の如き必ず

誦して傳へられしものならんご考ふ。

雅詩が誦せられたることは確證あり。

詩經の詩篇には作者が詩歌の文辭を作りし場合を示すものあり。その作られたる文辭が歌誦せらるゝことを示すものあり。「巷伯」の第七章に

寺人孟子、作爲此詩、〔鄭箋、作、起也〕 凡百君子、敬而聽之、

とあるは「巷伯」の篇を爲りし者が寺人孟子なることを示すものなり。「卷阿」の第一章に

豈弟君子、來游來歌、以矢其音、〔毛傳、矢、陳也、鄭箋、陳出其聲音、〕

同十章に

矢詩不多、維以遂歌、〔毛傳、不多、多也、明王使公卿獻詩、以陳其志、遂爲工師之歌焉、

鄭箋、我陳作此詩、不復多也、欲令遂爲樂歌、王日聽之、〕

とあるは歌詩を作れる者の君子なるをいふなり。之を歌ふものは工人なるべし。「桑柔」の雖曰匪予、既作爾歌、「何人斯」の作此好歌、「四月」の君子作歌、も皆作者が歌の文辭を作ることはいふなり。

誦を作るといへる例は「節南山」第十章に

騷賦の生成を論ず

家父作誦、以究王調、〔鄭箋、大夫家父作此詩、而爲王誦之、以窮極王之政所以致多訟之本意〕

とあるにて見るべし。此篇は家父が之を誦すべからしむるために作りたりといふなり。家父は誦すべき文辭たる此の詩篇を作りしものにして、自ら誦するといふ事をなすものには非ず。〔崧高〕第八章の

吉甫作誦、其詩甚碩、其風肆好、以贈申伯、〔毛傳、吉甫、尹吉甫也、作是工師之誦也、肆、長也、贈、增也、鄭箋、碩、大也、吉甫爲此誦也、言其詩之意甚美大、風切申伯、風切の解は余の取らざる所〕又使之長行善道〔此解も亦取らず〕、以此贈申伯者、送之令以爲樂、

とあるは誦と詩と對立せしめあるを以て其義甚明白なり。尹吉甫は此の詩篇を爲りたり。そは誦となすものなり。工師をして之を誦せしむるに其の誦の風〔風聲、風調といはんがごとし〕遂に善し。故に之を申伯に贈るといふなり。更に蒸民第八章に

吉甫作誦、穆如清風、〔鄭箋、吉甫作此工歌之誦、其調和人之性、如清風長養萬物然、〕〔長養の説余之を取らず〕

とあるも吉甫が誦せらるべき詩の文辭を作り、而して工人の誦聲の狀が穆として清風の吹き拂ふごとくなるをいふなり。之によりて詩篇が如何に朗誦せられしかを想見すべし。

第四節 工誦及工誦以外の誦

〔管子〕(管仲、西前六四五卒)牧民篇に「國頌」あり。蓋し其の文辭は學徒をして誦せしめしものならん。牧民篇中の國頌以外の諸文、形勢篇も誦せしものかと考ふるもそは明かならず、少くも「國頌」は誦せしものなることはその名によりて推すべし。

管子の例、

凡有地牧民者、務在四時、守在倉廩、

倉廩實、則知禮節、 衣食足、則知榮辱、

上服度、則六親固、 四維張、則君令行、

.....

不明鬼神、則陋民不悟、 不祇山川、則威令不聞、

不敬宗廟、則民乃上校、 不恭祖舊、則孝悌不備、

廢賦の生成を論ず

四維不張、則國乃滅亡、(管子牧民篇國頌)

右の文にては倉廩八句は三言連誦、不明十句は四言連誦の(假りに余の命名)の體あることを示す。

【参考】

陶陶孟夏兮、草木蒼蒼、

傷懷永哀兮、汨徂南土、

胸兮杳杳、孔靜幽默、

纏結紆軫兮、離愁而長鞠、(九章の懷沙)

又

邑犬群吠兮、吠所怪也、

誹疑疑傑兮、固庸惡也、(懷沙)

管子に於て更に考ふべきことは命・令・憲等を「布く」といふことある是なり。この命、令、憲の類を「布く」といふは誦せしものに非るか

是は尙書の敷奏(舜典)、敷納(益稷)、詩「烝民」の明命使賦。「賦政於外。」等の例によりてしかく考ふるなり。「管子」に正月之朔百吏在朝、君乃出令布憲於國、とあり。又「周禮」にも大宰、正月之吉、始和、布治于邦國都鄙、乃縣治象之灋于象魏、使萬民觀治象、挾日而斂之、など、見ゆ。又古書に古代の令を引くものあり、「夏令曰云云」のごときは是なり、令を敷くにあたりては余は必ず之を朗讀せしものと信ず。

又誄は人の死せしとき其人生前の徳を累ねのぶる辭をいふ。徳を累ねのぶるとは如何様にする

ものなるか、實狀解しがたきが如きも幸に春秋時代の誄は往往その辭尙存す。その最も參考に資するに足るものは魯の大夫展禽(柳下惠)の死せしときその妻のなせる誄なり。その辭左の如し。

柳下既死、門人將誄之、妻曰、將誄夫子之徳耶、則二三子不如妾知之也、

乃誄曰

夫子之不伐兮 夫子之不竭兮

夫子之信誠、而與人無害兮 屈柔從容不強察兮

蒙恥救民徳彌大兮 雖遇三黜終不蔽兮

愷悌君子永能厲兮 嗟乎惜哉乃下世兮

庶幾遐年今遂逝兮 嗚呼哀哉魂神泄兮

夫子之謚宜爲惠兮

門人從之以爲誄、莫能竄一字、(列女傳、卷二賢明、)

右の「屈柔」の句以下は全然騷賦の「亂辭」、若くは「橘頌」の形式と符合するを見る。余は誄は必ず誦せられしものならんと考ふ。

【参考】

騷賦の生成を論ず

鸞鳥鳳皇日以遠兮 (例、四三言)

燕雀烏鵲巢堂壇兮 (例)

露申辛夷死林薄兮 (例)

腥臊竝御芳不得薄兮 (變、四言體)

陰陽易位時不當兮 (例)

懷信佞諛忽乎吾將行兮 (四言體又變) (九章涉江亂辭)

誦は専門家たる工師の爲す所なりしも後には専門家ならざる者も其の所爲をまねて之を爲すものあり。春秋時代の國誦、輿誦は即ち是なるべし。其の句形式は概して四言なるも必しも然らざるものあり。其の例は左に示す。

晉語三に左の記事あり、

惠公入、(周襄王元、僖公九年、西前六五一)而背外内之賂、輿人誦之、曰、佞之見佞、果喪其田(以下四言)云云(韋昭注、不歌曰誦、)又國人誦之、曰「貞之無報也、孰是人斯、而有是臭也、貞爲不聽、信爲不誠、國斯無刑、媮居幸生、不更其貞、大命其傾、威兮懷兮、各聚爾有、以待所歸兮、猗兮違兮、心之哀兮、歲之二七、其靡有微兮、若翟公子、吾是之依兮、鎮撫國家爲王妃兮、妃配同、」惠公即位、出其世子、而改葬之、臭達於外、晉語三、

この惠公の時の國人の誦は句法甚だ不規則なり。

又左傳襄公三十年(西前五四三)に鄭の輿人の誦につきて左の記事あり。

(子産)從政一年、輿人誦之、曰、

取我衣冠而褚之。取我田疇而伍之。

孰殺子産。吾其與之。

及三年、又誦之曰。

我有子弟。子産誨之。我有田疇。子産殖之。

子産而死。誰其嗣之。(左傳襄公三十年)

と。此の誦の形式は大體に於て余の所謂四三言體なり。余は此を以て古の誦聲の遺風ならむと考ふ。

又晉の輿人の誦あり、

楚師背鄒而舍、晉侯患之、聽輿人之誦、曰、

原田每每、舍其舊、而新是謀、(左傳僖廿八年)

魯の國人の誦あり、

曷賦の生成を論ず

臧紇救鄆、侵邾、敗于狐駘、國人誦之曰、

臧之狐裘、

敗我於狐駘、我君小子、

朱儒是使、

朱儒朱儒、

使我敗於邾、(左傳襄四年)

魯人驚なるもの、誦あり、

孔子始用於魯、魯人驚誦之、

麇裘而鞞、

投之無戾、

鞞而麇裘、

投之無郵、(呂氏春秋樂成篇)

凡そ此等が國人、輿人、名某の誦と稱せらるゝは本來誦は工師がなすべきものと考へられしものなるが故にそれと區別してかくいへるものなるに外ならざるべし。

第五節 誦と賦との關係

班固の藝文志に

傳曰、不歌而誦、謂之賦、登高能賦、可以爲大夫、

とあり。余が誦と賦とを結びつけて考へんとするは此の文に依るもの多し。

晉の皇甫謐の三都賦序に曰く、

古人稱、不歌而頌、謂之賦、

左思の三都賦序に曰く、

升高能賦者、頌其所見也、

と。皇甫謐、左思の「頌」は即ち「誦」の義なり。二人の言の班固の引ける傳文に本けることは明なり。班固の引文の何の書に本くやは今日明かならず。登高能賦の二句は詩經邶風「定之方中」篇のト云其吉、終焉允臧、句下の毛傳の九能の一の中に見ゆるのみ。此の班氏の引ける古傳文によれば「賦とは歌はずして誦するものなり」といふなり。己に誦すといへば之を古の「箴詩の誦」に本くと考ふるも必しも不可なきに似たり。

歌と誦とはどこが異なるかといふに余は歌は永言するものにして、誦は朗讀するものと考ふ。(我邦の例を以ていはゞ俗謠の追分節、磯節、などいふ類は永言するものにて歌なり。宣命の如きは朗讀するものにして誦なり。謠曲の如きものは誦の類なるも朗讀より發達して朗讀自體に於ける節奏を備へたるものなりと考ふ。)歌は樂曲に伴ひ得るものにして、之に伴ふものあり。後世に「徒歌」といふものあり、それは歌にして樂曲を伴はざるものをいふ。誦は本來は樂曲を伴はざるものなり。而して後に述ぶる如く「九歌」の如き之を祭りに用ふるに至りては樂を伴ふこともある

に至りたりとおもはる。

屈原宋玉等は誦に對して關係せる言をなせりや否を考ふるに、原の九章の「抽思」篇の亂辭の中に道思作頌聊自救兮の語あり。この頌とは明かに彼自ら作る所の「抽思」の篇をさすものなり。又同じく「惜誦」に

惜誦以致愍兮 發憤以抒情

〔王逸注、惜、貪也、誦、論也、言己貪忠信之道、可以安君、論之於心、誦之於口、至於身以疲病、猶發憤懣、作此辭賦、深己情志、風諫君也、〕〔惜誦、朱子注、愛惜其言、忍而不發、〕

とあり。惜誦の二字に對して王逸、朱子、の注共に分明を缺く。但之を「惜往日」の例に照らすときは「惜む」にて讀みきり、惜は以下の全文にかゝるものとすべく、「誦以て愍を致す兮」と解すべしに似たり。然らば此の誦とは古箴詩の言を誦するものに外ならざるべし。

宋玉については玉の九辯の第六に
然中路而迷惑兮。自壓按而學誦。

〔王逸注、舉足猶豫心回疑、弭情定志吟詩禮、〕

の語あり、王注に學誦を解して吟詩禮といへば是屈子謂ふ所の誦と同じかるべきなり。

後世楚辭が誦讀せられしことは被公、道騫、の例あり、

漢書王褒傳、宣帝時、…徵能爲楚辭九江被公、召見誦讀〔王氏補注、沈欽韓曰、御覽八百五十九、宣帝詔徵被公見、誦楚辭、被公年衰老、每一誦輒與粥、〕

隋經籍志、隋時有釋道騫、善讀之、能爲楚聲、音韻清切、至今傳楚辭者、皆祖騫公之音、
(楚辭の部)

此の事實は騫の風誦と關係あることを示す間接の證として可なるべし。

誦は如何にして賦と名けらるゝに至りしか。

原來誦と賦とは其の文字異なるも義は同じ、已に上引の班固以下が賦を誦又は頌といへるを以て知ることを得べく、更に宋玉の「招魂」の人有所極同心賦些の句下の王逸注に

賦、誦也、誦忠信與道德也、

とあるを以て知るべし。宋玉已に誦することを賦すといへるなり。然りと雖も誦することを誦と稱せずして之を賦と稱するには其處に何等かの理由なかる可らず。

それは如何にといふに春秋の初よりして詩篇を誦することを「賦する」と稱すること起りしによ

るもの考ふ。左傳隱元年(西、前七二二)に鄭の莊公に關し公入而賦、大隧之中、其樂也融融、といひ、僖五年(西、前六五五)に晉の士薦が退而賦曰、狐裘尨茸、一國三公、吾誰適從、といへるは自ら詩を作爲せるなり、而して作爲すると共に自ら之を誦せるなり。文公六年の秦の穆公が三良を殉せしめしとき、國人哀之、爲之賦黃鳥、とは黃鳥の詩を作り誦せしなり。晉語四に秦伯賦采芣、公子賦黍苗、左傳僖二十三年(六三七)の公子賦河水、文十三年(六一四)の文子賦四月、子家賦載馳之四章、といへるは古詩篇の章を斷じて其の一部を誦せるなり。文四年(六二三)に衛甯武子來聘、公與之宴、爲賦淇露及彤弓、といへるは樂人に命じてその詩篇をうたはしめしなり、襄二十九年(五四四)の吳の季札來聘の場合には詩經中の某某詩篇を歌ふとあり、是は樂曲に合はせて歌ひしなり。此等の例によるに淇露・彤弓の場合を除きて、詩を誦することを賦すと稱する事實が生じたり。屈原等の韻文は誦するものなるにより、誦することを賦とよべる慣習が此に至りては遂に之を韻文の體としての「賦」名を生ずるに至りしものと考ふ。余の此考は賦の名稱はよみかた、ごなへかた、より來りしものとしての説なり。

之に對しては異説あらむ。余の説を假に「よみかた」説と名くれば是の異説は「つくりかた」説と名くべきものなり。之を爲すものは或は言はん、賦の名は誦の義よりせずして鋪陳の義よりして之を得たるものなりと。

周禮の春官大師職に大師、教六詩、曰風、曰賦、曰比、曰興、曰雅、曰興、とあり、その鄭注に

賦之言鋪、直鋪陳今之政教善惡、

といへり。ト商撰と傳ふる詩序にも故詩有六義焉、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌、〔陸氏音義音詛〕とありて、孔疏に

賦之言鋪、直鋪陳今之政教善惡、

といひ、全く鄭注に依れり。「定之方中」の毛傳の升高能賦の孔疏に謂升高有所見能爲詩、賦其形狀、鋪陳其事勢也、とあるは形狀、事勢、といひて前の政教善惡とは内容を異にせるも「作りかた」としての説明なるは同じ。「釋名」の賦、敷也、敷布其義、謂之賦、も同じ。班固の兩都賦序に

或曰、賦者、古詩之流也、〔李善注、毛詩序曰、詩有六義、二曰賦、故賦爲古詩之流也〕

と。是、六義の賦より韻文の體たる賦を説明せんとするなり。又皇甫謐三都賦序の賦也者、所以因物造端、敷弘體理、欲人不能加也、陸機の文賦の賦、體物而瀏亮、劉勰の文心雕龍 詮賦、の賦

鋪也、鋪采摛文、體物寫志也、といへる、立言一樣ならざるも賦、鋪也敷也、の義を本とし、謚以下の諸人は之に加ふるに漢賦の性質たる賦は記載的なるものなりとの意を以てせるものなり。

六詩の賦比興の賦は修辭の方法に對する稱なり。其の賦が鋪陳の義なることは疑ふべきなし。又漢賦以下が實質的に事物の形勢を鋪陳せる者なることも眞實なり。然れども屈宋等の韻文が鋪陳の義よりして其の體名を得たりとするは歴史的に見て余はしか信する能はず。若し鋪陳とするならば寧ろ音を陳ぬるとみる方がよきかと考ふ、矢、肆、等の義は屢々詩經の詩句中に用ひらる。而して音を陳ぬるとするならば依然として諷誦の義にたちもどり來るなり。

此に少しく傍徑に入るの嫌あるも賦、敷、鋪、等の文字の用法につき觀察を試みんと欲す。敷と鋪と同義とみなし、鋪を省き賦と敷とにつき考ふべし。

賦と敷とは文字いづれが早く出來たるものなりや。考へうべき場合は二字同時に存したりとするか、敷が先きなりとするか、賦が先なりとするか。かく三様にみることを得。賦の字は會意のものらしくあるも起原は明ならず。愚を以て之を推すに段玉裁の説文解字の注賦字の下にいへる如く經傳中、凡言以物班布與人曰賦、にて恐くは武力を以て奪取りたる財物を班布することを原義とするならん。班布の義を用ふるときは賦と敷は互用しうべきなり。左傳僖二十七年(西前六三三)

に晉の趙衰、夏書を引きて、夏書曰、賦納以言、明試以功、車服以庸、(「益稷」に同文あり)「正義、古本作敷納以言、明庶以功、敷作賦、庶作試、師受不同、古字改易耳、」とあり、今の「舜典」に敷奏以言、明試以功、車服以庸、に作る。敷奏は賦納と類似の義を有するなるべし。舜典の僞孔傳に敷、陳也、正義に敷者布散之言、與陳設義同、故爲陳也、といひ班布の義をこれり。商頌の「長發」に禹敷下土方、及び敷奏其勇の語あり、並に敷、布也の義を用ふ、大雅烝民の明命使賦(箋施布)又賦政于外、(箋布政)管子山權數の賦籍藏龜、「注、賦、敷也」、周語上の賦事行刑、必問於遺訓、及び治民惡事、無以賦令、屈原の悲回風の竊賦詩之所明、「王注、賦、鋪也、詩、志也、鋪陳其志、自證明也、」若くは呂氏春秋慎大覽の賦鹿臺之錢、「注、賦、布也、」に至るまで賦は鋪陳、布散の義に用ひらる。而して言辭に關して敷の字は言を誦するの義と解すべきこと已に前述せし所なり。左傳文十八年(西前六〇九)に布五教於四方、今の舜典に敬敷五教、「僞孔傳、布五常之教、」是、敷を布とするなり。韋昭の國語注には逆に布を注するに賦を以てす。周語上の厲王說榮夷公章に夫王人者、將導利而布之上下者也、「韋注、布、賦也」、又、宣王即位不藉千畝章に時布之於農、「韋注、布、賦也、」是、賦は班布なりの義を用ふるものなり。

然るに「禹貢」に厥賦上上、錯、「僞孔傳、賦、謂土地所生、以供天子、」といひ、周禮大宰職に

以九賦斂財賄、といひ、又、賦貢以馭其用、といふ、即ち人民の出して官の用に供する賦税の義の賦あるをみる。爾雅釋言に賦、量也、「説文」に賦、斂也。は既に賦税の義を意味しての解なり。禹又は周公の時代に於て果してかゝる税制ありて之に對し賦の字用ひられしや否や、頗る疑問とせざる能はず。若し愚見を以てすれば寧ろ春秋戰國以來兵賦行はれてより後人が後代の制を溯りて古制にあてはめしものに非るが。

左傳には隱四年(西前七一九)に敵邑以賦(杜注、賦、兵也)與陳蔡從、を始めとし以下兵賦、田賦、等の義に賦字を用ふるもの多し。論語公治長篇の子曰、由也、千乘之國、可使治其賦也、「注、孔安國曰、賦、兵賦」、孟子滕文公上の請野九一而助、國中什一、使自賦、其他戰國以下の例は一々之を擧ぐるを要せざるなり、

其他賦を授予の義とするあり、(例、呂覽分職篇、出高庫之兵以賦民、高誘注、賦、予也、「晉語四、公屬百官、賦職任功、韋昭注、賦授也、)これは班布の義と大差なく、賦を賦課の義とするは(例、左傳襄二十五年、量入修賦、賦車籍馬、賦車兵徒卒甲楯之數、)兵賦と近し。

第二章 騷賦形式論

第一節 騷賦が工誦の遺風なりとの事實と推論

余は騷賦を以て工誦の遺風ならむと考ふるものなり。之については騷賦の特色たる句法が如何なるものなるかを擧げ、それが誦に本くことを定めざる可らず。而して事實を擧げて之を決定するは難し、却て逆に推理上よりして此の如き特色ある句法を用ふることが誦即ち朗讀上に最も便利なりし故にかゝる形式のものとなりて出現せしならんといふことを以て満足せざるを得ず。但し余は努めて事實を擧ぐべし。

詩經の詩は通例四言詩なり、一句四字なるを通例とす。その中に韻礎を第三字に置きたる句はその第四字常に語詞又は輕き意味の字を用ふ。

周南關雎の

參差荇菜。左右流之。窈窕淑女。寤寐求之。

同漢廣の

南有喬木。不可休息。漢有游女。不可求思。

のごとく是なり。此種の句法のもの形式的には四字、四字、なるも實質的には四字、三字な、

り、之を連讀するときは殆んど七字句の如き感を與ふるなるべし。

鄭風の野有蔓草に

野有蔓草。零露漙漙。有美一人。清揚婉婉。邂逅相遇。適我願兮。

曹風の鳩鳴に

鳩鳴在桑。其子七兮。淑人君子。其儀一兮。

とあるは其例なり。

余之を「四三言體」と命名す。二南、鄭、曹、の詩に此の句格あり。故に四三言の句格は楚國特有の歌聲によるものと謂ふことを得ず。

四三言は下句三言の如しと雖も四字句の聲をなさんとするものにして本來四言體なりといはざる可らず。

然るに三言に至りては詩經中たとひ其の數少しといふことも時々之あり、是は四言體とは獨立して考へざる可らず。

江漢地方の詩たる「江有汜」の篇が三言なるは甚だ興味あることなり。詩に曰く

江有汜。之子歸。不我以。不我以。其後也悔。

此篇あるが故に楚には三言體ありしものと認めて可なり。たゞこの三言體は楚の地特有のものなるや否が問題の存する所なり。之を楚地特有とするならば、召南の「標有梅」(詩云、標有梅。其實七兮。求我庶士。迨其吉兮。)、鄘風の「牆有茨」(詩云、牆有茨。不可埽也。中冓之言。不可道也。所可道也。言之醜也。)、余案、是は三言體と見なすべきものなり、也之等は「江有汜」の其後也(悔の如く聲餘の字と目して可ならん)王風の「采芣」(詩云、彼采芣兮。一日不見。如三月兮。)、余案、一日の句は破格)陳風の「月出」(詩云、月出皎兮。佼人僚兮。舒窈糾兮。勞心悄兮。)、案、是全く三言體なり)、陳風「宛丘」の第一章、(詩云、子之湯兮。宛丘之上兮。洵有情兮。而無望兮。)、是も三言體と認めて可ならん)魯頌「有駉」(詩云、振振鷖。鷖于下。鼓咽咽。醉言舞。于胥樂兮。)、等は如何に見なすべきか。余は遽に楚と鄘、陳、若くは王國、魯頌、の三言體の孰か先きに存在せしやを決定せんとするものに非ず。而かも下のことを言はんぞす、曰く「三言が楚地特有のものならば騷體の或句法は楚産なりといひて可なり。若し三言が他地方にも行はれたりしものなりとせば騷體の或句法は必ずしも楚地特有の歌謠の聲より生じたりと言ふことを得ざるものなり」と。

第二節 騷以前の騷に近き句法

屈原以前に管子に「國頌」あること前に已に之をいへり。
「老子」の中の

衆人熙熙。如享大牢。如春登臺。

我獨泊兮其未兆。如嬰兒之未孩。

儻儻兮若無歸。衆人皆有餘。而我獨若遺。

我恐人之心也哉。

沌沌兮。俗人昭昭。我獨昏昏。

俗人察察。我獨悶悶。

澹兮其若海。兮若無止。

衆人皆有以。而我獨頑似鄙。

我獨異於人。而貴食母。(老子第二十章)

の文あり、奇々怪々、詩の如く謠の如く又賦の如し。

又論語、莊子に「風兮」の歌あり、孟子、及屈原の「漁父」に「滄浪歌」あるも四言の遺のみ。越の舟人の歌は六言、三三言(三言連誦)あること九歌の體と似たるものあるも、是已に襄王のときなり。

れば屈原と時を同じくするものなり。歌の類にして直ちに騷の原となしうべきものは得がたきなり。

例、

風兮歌

風兮風兮、何德之衰、往者不可諫、來者猶可追、

已而已而、今之從政者殆而(論語微子篇)

鳳兮鳳兮、何如德之衰也、來世不可待、往世不可追也

天下有道、聖人成焉、天下無道、聖人生焉

方今之時、僅免刑焉、福輕乎羽、莫之知載

禍重乎地、莫之知避

已乎已乎、臨人以德、殆乎殆乎(莊子、人間世)

滄浪歌

有孺子歌曰、

滄浪之水清兮、可以濯我纓

騷賦の生成を論ず

滄浪之水濁兮 可以濯我足

孔子曰、小子聽之、清斯濯纓、濁斯濯足矣、自取之也、(孟子、離婁上)

【案】これは(之)の字、(以)の字は重きをなさないものなれば四言連語の類なり、劉勰之を五言と數ふるは余取らず、

越舟人歌

今夕何夕兮 擗洲中流 今日何日兮 得與王子同舟

蒙羞被好兮 不訾詬恥 心幾頑而不絕兮 (三言連) 知得王子

山有木兮木有枝 (三言連) 心說君兮君不知 (三言連) (說苑、善說篇)

第三節 騷と賦——騷體中の類別

屈原の作を形式より見るに之を單に騷又は騷賦と總稱すと雖も騷體と賦體とに別ちてみるべし。「卜居」、「漁父」は有韻の文といふべく、賦の先驅をなす。騷體の中にて「離騷」と「遠遊」と九章の「懷沙」「橘頌」を除ける七篇相類し、九歌十一篇互に相類す。橘頌の

后皇嘉樹橘徠服兮 受命不遷生南國兮

深固難徙更壹志兮 綠葉素榮紛其可喜兮

曾枝刺棘圓果搏兮 青黃雜糅文章爛兮

は形式的に四字四字(綠葉の句は例外)にして、實質的に四字三字の體を用ひ、之を連讀するとき七言句ともみなしうべきものたり。余は之を名けて「四三言體」といふなり、「四三言體」が騷の特有のものならず、詩經以來のものたることは已に述べし所により明かなり、(關雎、漢廣、野有蔓草、鳩鳴の類)。「大招」は屈原の作といひ景差の作といひ不明なるも形式は四三言體なり。

例、

青春受謝白日昭只

春氣奮發萬物遽只

冥凌決行魂無逃只

魂魄歸徠無遠遙只 (大招)

屈原の「天問」、宋玉の「招魂」は四言を體とし、四三言の體を雜用するものなり。

例、「天問」の

崑崙縣圃 其尻何在 增城九重 其高幾里

招魂の

騷賦の生成を論る

虎豹九關 啄害下人些 一夫九首 拔木九千些
の類は四言なり。

「天問」の

桀伐蒙山、何所得焉 妹喜何肆、湯何殛焉
は四三言なり。

彭鏗斟雉帝何饗 受壽永多夫何久長（此句例外）
中央共牧后何怒 螽蟻微命力何固

は七言なり。

「招魂」の

魂兮歸來入脩門些 工祝招君背行先些
秦篝齊縷鄭綿絡些 招具該備永嘯呼些
魂兮歸來反故居些

以下は「亂」の前まで全部四三言體なり。

九章の中「懷沙」も四言、四三言體なり。

是に於て「離騷」と「橘頌」、「懷沙」を除きたる九章即餘り七篇と九歌とが騷の特色を有するものとなる。

余はその特色の句法は六字句にありと考ふ。其他の句法はありても骨子に非ず。其の形式は

(上三字有意義)

(中間一字輕)

(下二字有意義)

□□□

語助詞

□□

【附言】此の語助詞とは代名詞、(之、其、夫)前置詞(於、乎、以)、接續詞(而)語詞(兮)等なり

の如きものなり。

例、

汨余若將弗及兮 恐年歲之不吾與 (六字變體)
朝搴阰之木蘭兮 夕攬洲之宿莽
日月忽其不淹兮 春與秋其代序
惟草木之零落兮 恐美人之遲暮 (離騷)
遭吾道夫崑崙兮 路脩遠以周流
揚雲霓之旖旎兮 鳴玉鸞之啾啾

騷賦の生成を論ず

朝發軔於天津兮(朝發軔於天津兮)
 鳳凰翼其承旂兮(鳳凰翼其承旂兮)
 路不周以左轉兮(路不周以左轉兮)
 屯余車其千乘兮(屯余車其千乘兮)
 駕八龍之婉婉兮(駕八龍之婉婉兮)
 抑志而弭節兮(四字變體)
 神高馳之邈邈(神高馳之邈邈)
 奏九歌而舞韶兮(奏九歌而舞韶兮)
 聊假日以媮樂(聊假日以媮樂)
 陟陞皇之赫戲兮(陟陞皇之赫戲兮)
 忽臨睨夫舊鄉(忽臨睨夫舊鄉)
 僕夫悲余馬懷兮(六字變體)
 蜺局顧而不行(同)

此の例を以て知るべし。

九章中、七篇の句法亦同じく此例なり。

九歌に至りては句法一見大に異なるが如し。然れども實質的には大に異なるには非ず。九歌にては二字と二字との中間に分を置きたる四字句、或は三字句を二つ分にて結び付けたる句法、を用ふることも多きが「離騷」等と異なるのみ。例へば

吉日辰良 を 吉日辰良(東皇太一)

とし、

瑤席玉璫 を 瑤席兮玉璫(東皇太一)

とするの類是なり。是は結局四字句にして中間にて引きのばすに過ぎず。

沅有芷兮澧有蘭 思公子兮未敢言(湘夫人)

入不言兮出不辭 乘回風兮載雲旗

悲莫悲兮生別離 樂莫樂兮新相知(少司命)

青雲衣兮白霓裳 舉長矢兮射天狼(東君)

の如き、是は即ち三言連誦なり。

たゞ

撫長劍兮玉珥 璆鏘鳴兮琳琅(東皇太一)

の如き句法は他篇に見うけざるが如く、異様として感ぜらる。而して仔細に考ふるときは是も「離騷」等に於ける六字句と大差なきものなり。「離騷」等に於ては之、而、其、以、等の字を用ひし場所に分を用ひしまでのことなり。故に九歌の「湘君」の中の

采薛荔(兮)水中 攀芙蓉(兮)木末

は

采薛荔(於)水中 攀芙蓉(於)木末

とするも大差なく、「湘夫人」の

帝子降(兮)北渚 目眇眇(兮)愁予

は

帝子降(於)北渚 目眇眇(其)愁予

とするも大差なく、此の句法たるや離騷の

製菱荷(以)爲衣(兮) 蕙芙蓉(以)爲裳

飲余馬(於)咸池(兮) 惚余轡(乎)扶桑

百神翳(其)備降(兮) 九嶷繽(其)並迎

揚雲霓(之)暍藹(兮) 鳴玉鸞(之)啾啾

其他の句法と誦讀の場合に於ける効果はみな其價值を等しくするものに外ならず。

第四節 理論的に推定せる句形

三字句、四字句、が各獨立して句をなすものは其は詩篇の三字句四字句なるものと同一ことなり。たゞ同じく三字句にても之を結びつけ、若しくは四字にても中間に兮を挿みて引きのばす所に騷としての特異が存するなり。此が即ち「騷體は詩の朗誦の聲を寫す」と考へらるゝ點にてあるなり。

上述の

三助二

が騷の骨子をなすはこれが一氣に誦する際に最もよき口調なりしによるものと余は考ふるなり。

第五節 騷特有の句法の生ぜし徑路

如何にして騷の句法が生ぜしや。

余は騷を詩の讀誦の遺風に歸せんとするものなり。詩は多く四言句なるも三言句の詩も之ありしものと見る。之を讀誦するとき如何なる状態に之をなせしか。是余の推測に由るも左に之を述

べん。

先づ四言句の場合、

其一是

□□□□

の如く四字をそのまま讀む。

其二是上二字と下二字との中間にて音を引き緩かにして讀む、

□□(○)□□

の如し。騷に於ては(○)の箇處に今の字を置く、是なり。

次に四字句が二句接続せる場合、

其一是二句接続すとも正直にそのまま一字づゝ讀む、

□□□□、□□□□

の如し。

其二是第一句の四字を讀みてそこに音を引き緩かにし更に第二句を讀む、

□□□□(○)、□□□□、

の如し。

其三是二句連屬して第七字めまで至り第八字めを緩かに讀む、

□□□□□□□□(□)

の如し。余の所謂四三言體は此の誦法より生ず。

其四是

□□□□□□□□

の如く第五字めを緩かに讀む。

三言句の場合

其一是一字づゝ正直に讀む、

□□□

の如し。

其二是三字句が二句接続せる場合、

此の第一は二句とも正直に讀む、

□□□、□□□、

騷賦の生成を論ず

の如し。

第二は第一句の三字を讀みてそこに音を引き緩かにし更に第二句を讀む、

□□□○、□□□

の如し。余の謂はゆる三言連は此の誦法より生ず。

第三は二句連屬して第六字めまで至り(假設第七字め)音を緩かに讀む、

□□□□□□○、(例、僕夫悲余馬懷兮)

の如し。此の句法は甚稀なり。

第四は二句連屬して第四字めを緩かに讀む、

□□□□(□□)

の如し。此の句法が「九歌」、「離騷」の骨子をなす。此形が骨子をなすには三言體なるものを重要視せざる可らざるなり。

第六節 騷と巫との關係

余は誦の遺風が騷となりしとするが故に巫が誦聲を傳へたりや否やとは別問題となる。舊説

(王逸)にては九歌がその土俗の歌樂を寫したりといふのみにてそれが誦聲の遺なりや否やを説かず。屈原はたゞその土俗のまねせしことなる。是余の服せざる所なり。余は誦としてはかゝる形式が尤も誦としてふさはしきが故かくなりしものと考ふるを以て、巫なるものは屈原が單にその歌辭をのべさすアクターとしてもち出したるものに過ぎずとみるも差支なきなり。但しこれは抽象的議論として然りといふなり。歴史的事實として考ふるならば、巫は屈原よりも古きものなれば巫によりて誦風が保存せられ、(かく論斷する證據はなきも)原はその聲を寫したりとみる方に近からん。然らば九歌が古く離騷は九歌ありてのちその聲を寫したるものとみざる可らず。重ねていふ、これは歴史的にいふことなり、實質上には九歌と離騷と形式の重なる差はなきこと已にのべたる如し。

余更に考ふるに工誦と巫との歴史上の關係は明かならず。然れども巫の字體は工の字を帯びたり、雩祭に於ても巫は舞と共に誦をなせしならん。(周禮の女巫は雩にあたり「雲漢」の詩の若きものを歌ひたるならんとは先儒の説く所なり)九歌に至りては名は歌なるも巫は誦をなせしものと考ふ。巫は屈原より古きこと明なれば原が巫誦を用ひたりとせば離騷の句形の九歌の句形に本くこと推して知るべし。

九歌は歌なりや誦なりやについては議論あらん。余は巫の誦辭ありて屈原之を寫せしものと考ふるが故に之を誦とみるなり。蓋し九歌に關しては「離騷」に就重革而 詞。啓九辯與九歌分。といひ、「天問」に啓棘賓商九辯九歌といへり。王逸は離騷に注して九辯九歌は禹の樂なりといひ、天問に注して九辯九歌は啓が作れる樂なりといへり。左傳に文公七年夏書を引き九功之德皆可歌也。謂之九歌。偽古文大禹謨同 といへり。古或は九歌の歌辭の傳はりしものありしならん。然れども禹時の九歌の何なるやは已に知る能はず。屈原其の篇數を襲ふと雖も必ず其の歌聲を襲ひたりとは斷定すべからず。原が九歌の形式の已に離騷に近きより推せば九歌も亦た歌の名あるも歌にあらずして誦なりしならん。固より巫がこの誦聲を以て歌のごとくして之を樂舞に用ひたりしことは想像に難からざるなり。

楚の巫なるものは楚の自産なるや、他よりの輸入物なるや、陳に巫風盛にして陳の詩に三言體あるを以て推すに、楚は或は陳より巫及び巫誦を傳へたるものには非るか。抑も或は鄭よりせるか。

第三章 賦の生成を論ず

第一節 荀子の賦及其他の韻文

次に賦についていはん、

賦は荀子に賦篇ありて禮、知、雲、蠶、箴、等を詠せり。而して其體は隱語により先づ問を出し然る後に之に答ふるの法を用ふ。其の問の部は四言句を主とし、答の部は句に定格なし。

例、

爰有大物、非絲非帛、文理成章、非日非月、爲天下明、生者以壽、死者以葬、城郭以固、三軍以強、粹而王、駁而伯、無一焉而亡、臣愚不識、敢請之王、

王曰、

此夫文而不采者與、簡然易知、而致有理者與、君子所敬、而小人所不者與、性不得、則若禽獸、性得之、則甚雅似者與、匹夫隆之、則爲聖人、諸侯隆之、則一四海者與、致明而約、甚順而體、請歸之禮、(右禮)

荀卿(楚考烈王八年、西前二五五爲蘭陵令)の賦篇と題するは彼自身の手に出でしか後人其の後世の賦體と似たるを以て之を題せるか、明かならず。彼の自題とすれば彼は文體として「賦」の稱を

騷賦の生成を論ず

用ひしもの、最も古きものとせざる可らず。

荀卿は四言三言の句を用ひて儗詩及成相を作れり。

成相は「きねうた」の調子に擬して作れるものなりといふ。春申道綬、基畢輪、の語あれば春申君死後の作なるべし。朱子分ちて之を三章とす。第一、第二章は二十二節より成り、第三章は十二節より成れり。

例、

請成相、世之殃、愚闇愚闇、墮賢良、人主無賢、如瞽無相、何俛俛、(成相第一章第一節)

請成相、道聖王、堯舜尚賢、身辭讓、許由善卷、重義輕利、行顯明、(第二章第一節)

即ち此の形式は

三 三(韻) 四 三(韻) 四 四 三(韻)

なり。この愚闇愚闇墮賢良、如瞽無相何俛俛等は四言三言なるも連讀すれば七言と區別すること難し。後代のものにはあれども、漢の高祖の大風歌、或は唐山天人安世房中歌の大海蕩蕩水所歸、高賢愉愉民所懷、なども同じ。

儗詩は儗異激切の詩なりといふ。此詩は

天下不治、請陳儗詩、天地易位、四時易鄉、

に起り、大抵四言句を用ふ。されども

螭龍爲蝦蟇、鷓鴣爲鳳皇、

の如き五言句もあり。又七言句、九言句、等もあり。附するに「小歌」を以てす。「小歌」にては之の前旨を反覆叙説するなり、曰く、

念彼遠方何其塞矣(朱子塞を鑿の誤とす) 仁人緝約暴人行矣 忠臣危殆讒人服矣(服一作敷)

璇玉瑤珠不知佩也 雜布與錦不知異也

閭姬子奢莫之媒也 嬖母力父是之喜也

と、是即ち余の謂はゆる四三言體なるものなり。騷の亂辭は多く此形なり。

此の句法や散文と雖も之あり、

山高而不崩則祈羊至矣 淵深而不涸則沈玉極矣

.....

蛟龍得水而神可立也 虎豹得幽而威可載也 風雨無鄉而怨怒不及也(管子、形勢篇)

句法の整調せらるゝ所自からかゝるものを生ずるなり。散文に於てはたゞ句尾に押韻なきのみ。

第二節 屈原の卜居・漁父と賦體

屈原の「卜居」、「漁父」は明かに後の賦體を開く。

「卜居」に

屈原曰、

(吾) 寧惘惘欸欸朴以忠乎	(將) 送往勞來斯無窮乎
(寧) 誅鋤草茅以力耕乎	(將) 遊大人以成名乎
(寧) 正言不諱以危身乎	(將) 從俗富貴以媮生乎
.....
(寧) 昂昂若千里之駒乎	(將) 汜汜若水中之鳧乎

とあるは騷の六字句、七字句、若くは四三言體を用ふるものなり。彼は此外に他の雜言を錯用して散文的に文を行れるなり。

「漁父」に

屈原曰、

舉世皆濁、	而我獨清、	衆人皆醉、	而我獨醒、
是以見放、			

漁父曰、

夫聖人者、不凝滯於物、而能與世推移、舉世皆濁、(何)不泥其泥而揚其波、衆人皆醉、(何)不備其糟而飲其醜、何故懷瑾握瑜、而自令見放爲、と、是四字句を主とし三三言を雜用するものなり。此の句法が騷より影響されたること、否、寧ろ誦聲の同じ影響の下に發せることは推察しうべし。

第三節 賦に影響を與へたる傍系文學

余は賦の句法は騷によりて助けられたるものと考ふるが、その外にも隱語、優辭、縱橫家及辯士の語なるものが之を助けたりと考ふ、而してそれが問對となり、賦となりしとおもふ。

隱語に關しては余嘗て「支那文學に於ける語戲」の題下に一文を草せしことあり、春秋以來戰國漢初までに頗る其例あるをみる。荀子の賦篇は楊偉已に之を隱語なりといへり。偉を待たずとも隱語的のものなることを見るなり。

騷賦の生成を論ず

齊の淳于髡の「三年不蜚不鳴」、又戰國策に見えたる某の「三年不飛」、及同書に見ゆる「海大魚」
(齊策二)等の話を見るに隱語にしてその辯を飾るものなり。

「史記」の孟荀列傳にみえたる鄒奭も辭を飾るに名あり。

故齊人頌曰、談天衍、雕龍奭、炙穀過髡、〔注、劉向別錄曰、騶衍之所言、五德終始、天地廣大、盡言天事、故曰談天、鄒奭脩衍之文、飾若雕鏤龍文、故曰雕龍、〕

この鄒奭が文を飾りしことは知るべきなり。

髡の辯は左例により窺知しうべし。

淳于髡の齊の宣王(三四二三四三三四四三四五三四六三四七三四八三四九三五十)に言ふや曰く

夫鳥同翼者而聚居、獸同足者而俱行、今求柴葫桔梗於沮澤、則累世不得一焉、及之罌黍梁父之陰、則邨車而載耳、夫物各有疇、今髡賢者之疇也、王求士於髡、譬若挹水於河、而取火於燧也、(齊策三)

又曰く

韓子盧者、天下之疾犬也、東郭逡者、海內之狡兔也、韓子盧逐東郭逡、環山者三、騰山者五、兔極於前、犬廢於後、犬兔俱罷、各死其處、田父見之、無勞勸之苦、而擅其功、今齊

魏久相持、以頓其兵、弊其衆、臣恐強秦大楚、承其後、有田父之功、(齊策三)
優人が辯舌に長じたることも明かなり。

楚の莊王(前六一三—五九二)の優孟の葬馬の諫辭のごときはなり。曰く

請爲大王、六畜葬之、以壘窳爲槨、銅歷爲棺、齋以蕞菜、薦以木蘭、祭以糲稻、衣以火光、葬之於人腹腸、(史記滑稽列傳)

縦横家に於て張儀は餘り形式を飾らざるも蘇秦は之と異に形式的に大に辭を脩めたるものなり、

蘇秦の趙の司寇李兌に説くや曰く、

雒陽乘軒里蘇秦、家貧親老、無罷車駕馬、桑輪蓬篚、麻勝擔囊、觸塵埃、蒙霜露、越漳河、足重繭、日百而舍、造外闕、願見於前、口道天下之事、(趙策二)

如何にその飾りに富めるや。又彼が秦の惠王(西前三三七—三一一)に説きたる言中には四言句を以て押韻せる一長段あり。

昔者神農伐補遂、黃帝伐涿鹿而禽蚩尤、堯伐驩兜、舜伐三苗、禹伐共工、湯伐有夏、文王伐崇、武王伐紂、齊桓任戰而伯天下、由此觀之、惡有不戰者乎、古者、使車轂擊馳、言語相

騷賦の生長を論ず

結。天下爲一。約從連橫。兵革不藏。文士並飭。諸侯亂惑。萬端俱起。不可勝理。科條既備。民多僞態。書策稠濁。百姓不足。上下相愁。民無所聊。明言章理。兵甲愈起。辯言偉服。戰攻不息。繁稱文辭。天下不治。舌弊耳聾。不見成功。行義約信。天下不親。於是、乃廢文任武。厚養死士。綴甲厲兵。效勝於戰場。夫徒處而到利。安坐而廣地。雖古五帝、三王五伯、明主賢君、常欲坐而致之、其勢不能、故以戰續之、寬則兩軍相攻。迫則杖戟相撞。然後可建大功。是故、兵勝於外、義強於內、威立於上、民服於下、今欲并天下、凌萬乘、誦敵國、制海內、子元元、臣諸家、非兵不可、(秦策二)

此の遊説はかく辯に苦心せるわりに效を奏せず、遂に彼をして去て趙に赴かしめたるなり。趙に成效して齊に至り宣王に説くや又々大に脩飾をつとめたり。彼の有名なる臨淄の狀を説きたる一段の如何に華博なるかを見よ。曰く

齊地方二千里、帶甲數十萬、粟如丘山、齊車之良、五家之兵、疾如錐矢、戰如雷電、解如風雨、卽有軍役、未嘗倍太山、絕清河、涉渤海也、臨淄之中、七萬戶、臣竊度之、不下戶三男子、三七二十一萬、不待發於遠縣、而臨淄之卒、固以二十一萬矣、臨淄甚富而實、其民無不吹竽鼓瑟、擊筑彈琴、鬪雞走犬、六博踰鞠者、臨淄之途、車穀擊、人肩摩、連衽成

帷、舉袂成幕、揮汗成雨、家敦而富、志高而揚、夫以大王之賢、與齊之強、天下不能當、今乃西面事秦、竊爲大王羞之、(齊策二)

彼の魯仲連の如きも權謀に長じたるのみならず亦脩辭家なり。彼が齊の孟嘗君(三二三封於薛、二九九入相秦)に説くや、曰く

猿獼猴、錯木據水、則不若魚鼈、歷險乘危、則騏驥不如狐狸、曹沫之奮三尺之劍、一軍不能當、使曹沫釋其三尺之劍、而操銚鐻、與農夫居墟畝之中、則不若農夫、故物舍其所長、之其所短、堯亦有所不及矣、(齊策三)

又曰く

君之廐馬百乘、無不被繡衣、而食菽粟者、豈有騏驎騄耳哉、後宮十妃、皆衣綺紵、食梁肉、豈有毛膚西施哉、色與馬取於今之世、士何必待古哉、(齊策四)

以てその文辭の妙を窺ふべし。

汗明の楚の春申君(二六二、始封、二五八救趙、二四八徙封於吳)に説くや曰く
君亦聞驥乎、夫驥之齒至矣、服鹽車而上大行、蹄申膝折、尾湛脂潰、漉汁灑地、白汗交流、中阪遷延、負轅不能上、伯樂遭之、下車攀而哭之、解紵衣以羈之、驥於是俛而噴、仰

而鳴、聲達於天、若出金石聲者、何也、彼見伯樂之知己也、今僕之不肖、阨於州部、掘穴窮巷、沈滯鄙俗之日久矣、君獨無意漸被僕也、使得爲君高鳴、屈於梁乎、(楚策四)
又雍門周の齊の孟嘗君に説くや、曰く

夫以秦楚之強、而報讎於弱薛、譬之猶靡蕭斧而伐朝菌也、必不留行矣、天下有識之士、無不爲足下寒心酸鼻者、千秋萬歲之後、廟堂必不血食矣、高臺既以壞、曲池既以漸、墳墓既以下、而青廷矣、嬰兒豎子、樵採薪蕘者、躡躅其足、而歌其上、衆人見之、無不愀焉爲足下悲之、曰、夫以孟嘗君尊貴、乃可使若此乎、於是孟嘗君泣然泣涕承睫而未殞、(說苑 善說篇)

と。周や辯を善くすといふべし。

第四節 楚の修辭家

楚に於ては脩辭家彬々として輩出せり。

戰國策に楚の安陵君の楚の宣王(三六九—三四〇)に説くことを敘せる一段あり、曰く

楚王游於雲夢、結駟千乘、旌旗蔽日、野火之起也、若雲蜺、咒虎睜之聲、若雷霆、有狂

咒、跽車依輪而至、王親引弓而射、壹發而殪、王抽旃旄、而抑咒首、仰天而笑曰、樂矣今日之游也、寡人萬歲千秋之後、誰與樂此矣、安陵君泣數行、而進曰、臣入則編席、出則陪乘、大王萬歲千秋之後、願得以身試黃泉、虜螻蟻、又何如得此樂而樂之、(楚策一)

安陵の辭は一部分に過ぎず、多くは國策記者の文なりと雖も、恐くは當日の記録に負ふものもあるべし。而してその前半の全く後代の遊獵の賦を想見せしむるをみよ。

楚の考烈王(二六二—二三八)のとき或人の謂へるに曰く

夫因詘爲信、奮患有成、勇者義之、辨禍爲福、裁少爲多、知者官之、夫報報之反、墨墨之化、唯大君能之、禍與福相貫、生與亡爲鄰、不偏於死、不偏於生、不足目載大名、無所寇艾、不足以橫世、(楚策四)

この文の如きも老子系統のものにして諷言の餘風なるざるやを疑はしむるものあり。

楚の文辭は遂に懷王、襄王に至りて其盛を極む、屈原、宋玉、景差、の輩は其の雄なるものなり。

其の以外に於て楚には莊辛あり、其の襄王(二九八—二六三)に對せる文、妙を盡せり、曰く、
臣聞、鄙語曰、見菟而顧犬、未爲晚也、亡羊而補牢、未爲遲也、臣聞、昔湯武以百里昌、

桀紂以天下亡、今楚國雖小、絕長續短、猶以數千里、豈特百里哉、王獨不見夫蜻蛉乎、六足四翼、飛翔乎天地之間、俛啄蚊蚋而食之、仰承甘露而飲之、自以爲無患、與人無爭也、不知夫五尺童子、方將調飴膠絲、加己乎四仞之上、而下爲螻蟻食也、蜻蛉其小者也、黃雀因是、以俯囓白粒、仰棲茂樹、鼓翅奮翼、自以爲無患、與人無爭也、不知夫公子王孫、左挾彈、右攝丸、將加己乎十仞之上、以其類爲招、晝游乎茂樹、夕調乎酸醎、倏忽之間、墜於公子之手、夫雀其小者也、黃鶴因是、以游於江海、淹乎大沼、俯囓鯉鯉、仰嚼蘆衡、奮其六翮、而凌清風、飄搖乎高翔、自以爲無患、與人無爭也、不知夫射者、方將脩其荃盧、治其繒繳、將加己乎百仞之上、被矰磻、引微繳、折清風而抔矣、故晝游乎江河、夕調乎鼎鼐、夫黃鶴其小者也、蔡靈侯之事因是、以南游乎高陵、北陵乎巫山、飲茹谿流、食湘波之魚、左抱幼妾、右擁嬖女、與之馳騁乎高蔡之中、而不以國家爲事、不知夫子發、方受命乎宣王、繫己以朱絲而見之也、蔡靈侯之事、其小者也、君王之事因是、以左州侯、右夏侯、繫從鄂陵君與壽陵君、飯封祿之粟、而載方府之金、與之馳騁乎雲夢之中、而不以天下國家爲事、不知夫穰侯、方受命乎秦王、填隄塞之內、而投己乎隄塞之外、(楚策四)

又彼の越の舟人に關する記事も恐くは莊辛の手に成れるものならん、

襄成君始封之日、衣翠衣、帶玉劍、履縞舄、中略楚大夫莊辛、過而說之、遂造託而拜謁、起立曰、臣願把君之手、其可乎、襄成君忿作色而不言、莊辛遷延盥手而稱曰、君獨不聞夫鄂君子皙之汎舟於新波之中也、乘青翰之舟、極蕭菹、張翠蓋、而檢犀尾、班麗桂社、會鐘鼓之音、畢、榜柁越人擁楫而歌、歌辭曰、濫兮捰草、下略鄂君子皙曰、吾不知越歌、子試爲我楚說之、於是、乃召越譯、乃楚說之、曰、

今夕何夕兮 蹇芷中流

今日何日兮 得與王子同舟

蒙羞被好兮 不訾詬恥

心幾頹而不絕兮 知得王子

山有木兮木有枝 心說君兮君不知

於是鄂君子皙、乃楫脩袂、行而擁之、舉繡被而覆之、說苑、善說篇、

余は之を此に掲ぐるは其の文致の賦に似たるものあるをいはんがためなり。其の歌辭の楚歌の體なることは言を待たざるなり。

楚の襄王の時、その十八年(西、前二八一)に又繳者の對あり、曰く

十八年。楚人有好以弱弓微繳如歸鴈之上者。頃襄王聞。召而問之。對曰。

『小臣之好射。騏驎羅鷁。小矢之發也。何足爲大王道也。且稱楚之大。因大王之賢。所弋非直此也。昔者。三王以弋道德。五霸以弋戰國。故秦魏燕趙者。騏驎也。齊魯韓衛者。青首也。鄒費邾邳者。羅鷁也。外其餘則不足射者。見鳥六雙。以王何取。王何不以聖人爲弓。以勇士爲繳。時張而射之。此六雙者。可得而囊載也。其樂非特朝夕之樂也。其獲非特鳧鴈之實也。王朝張弓。而射魏之大梁之南。加其右臂。而徑屬之於韓。則中國之路絕。而上蔡之郡壞矣。還射圉之東。解魏左肘。而外擊定陶。則魏之東外奔。而大宋方與二郡者舉矣。且魏斷二臂。顛越矣。膺擊邾國。大梁可得而有也。王繕繳蘭臺。飲馬西河。定魏大梁。此一發之樂也。若王之於弋。誠好而不厭。則出寶弓。繕新繳。射囑鳥於東海。還蓋長城以爲防。朝射東宮。夕發沮丘。夜加卽墨。顧據午道。則長城之東收。而太山之北舉矣。西結境於趙。而北達於燕。三國布弋。則從不待約而可成也。北遊目於燕之遼東。而南登望於越之會稽。此再發之樂也。若夫泗上十二諸侯。左縈而右拂之。可一旦而盡也。今秦破韓以爲長憂。得列城而不敢守也。伐魏而無功。擊趙顧病。則秦魏之勇力屈矣。楚之故地漢中析郢。可得而復有也。王出寶弓。繕新繳。涉鄆塞。而待秦之倦也。山東河內。可得而一也。勞民

休衆。南面稱王矣。故曰。秦爲大鳥。負海內而處。東面而立。左臂據趙之西。右臂傅楚鄆郢。膺擊韓魏。垂頭中國。處既形便。勢有地利。奮翼鼓軀。方三千里。則秦未可得獨招而夜射也。』

欲以激怒襄王。故對以此言。史記楚世家。

これ實に隱語にして譬喩を用ひ辯を馳せて敷演する賦と一致するものなり。

第五節 屈原宋玉等の問對

此の如き情勢がつもりて遂に屈原、宋玉の問對となり、又宋玉の賦となれるは自然の趨勢なり。原の騷及九歌(特に後者)は巫をかりたる問答の體とみるべし、騷は獨語なるも時として我に對する神(靈)あり。宋玉の對は對といふも已に賦のごとし、たい之を賦とは稱せず而して賦體の文に至りても之を稱して賦とよぶこと果して彼自身に始まるか、後人之を稱せるか、明かならず。

玉の神女賦の序に楚襄王與宋玉遊於雲夢之浦、使玉賦高唐之事……玉對曰、云云、……王曰、若此盛矣、試爲寡人賦之、玉曰、唯唯、とあり、高唐賦の序にも、王曰、試爲寡人賦之、玉曰、唯唯、とありて、「賦す」と動詞に用ひあり。「古文苑」に收むる所の小言賦に至りて始て

楚襄王既登陽雲之臺、令諸大夫景差唐勒宋玉等、並造大言賦、賦畢、而宋玉受賞、王曰、此賦之迂誕、則極巨偉矣、抑未備也、……有能爲小言賦者、賜之雲夢之田、といひ、大言賦、小言賦、此賦之迂誕と名詞として賦を呼べり。「古文苑」は後出の書なれば果して玉の自言なるや疑はし。

但し玉の作は實質的には已に賦なり。騷の六字句法の外に四字句堆疊して漢賦の先驅をなす。

第四章 餘言

第一節 楚騷漢賦の比較

終りに余は楚騷漢賦の形式、性質、の關係をいはん。

余は楚騷漢賦を比較し左の如く觀察す。

- 一、楚騷は三言四言五言六言(稀に七言)を用ひ、三言連用、四三言、上三字中間助詞下二字の六字句、を主要なる句とす。
- 漢賦は三、四、五、六、言より成り、時々破格(それ等の字數に關せざる)の句を作りて

展開收束をなす。

- 二、漢賦に於ては虚字助字は楚騷に比すれば著しく減少し、なるべく實字を用ふ。
- 三、楚騷に於ては必ず押韻す。

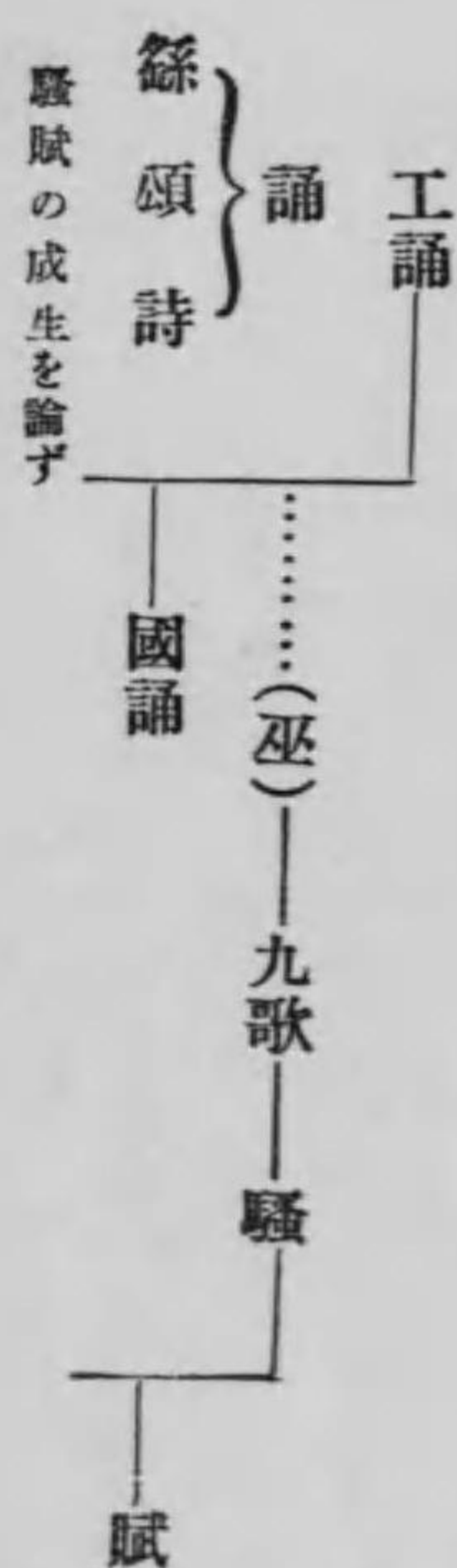
漢賦にては押韻は毎句に於てするものあり、偶數位の句脚に於てするものあり、全く爲さざるものあり、宜しきに從ひ必しも一定せず。

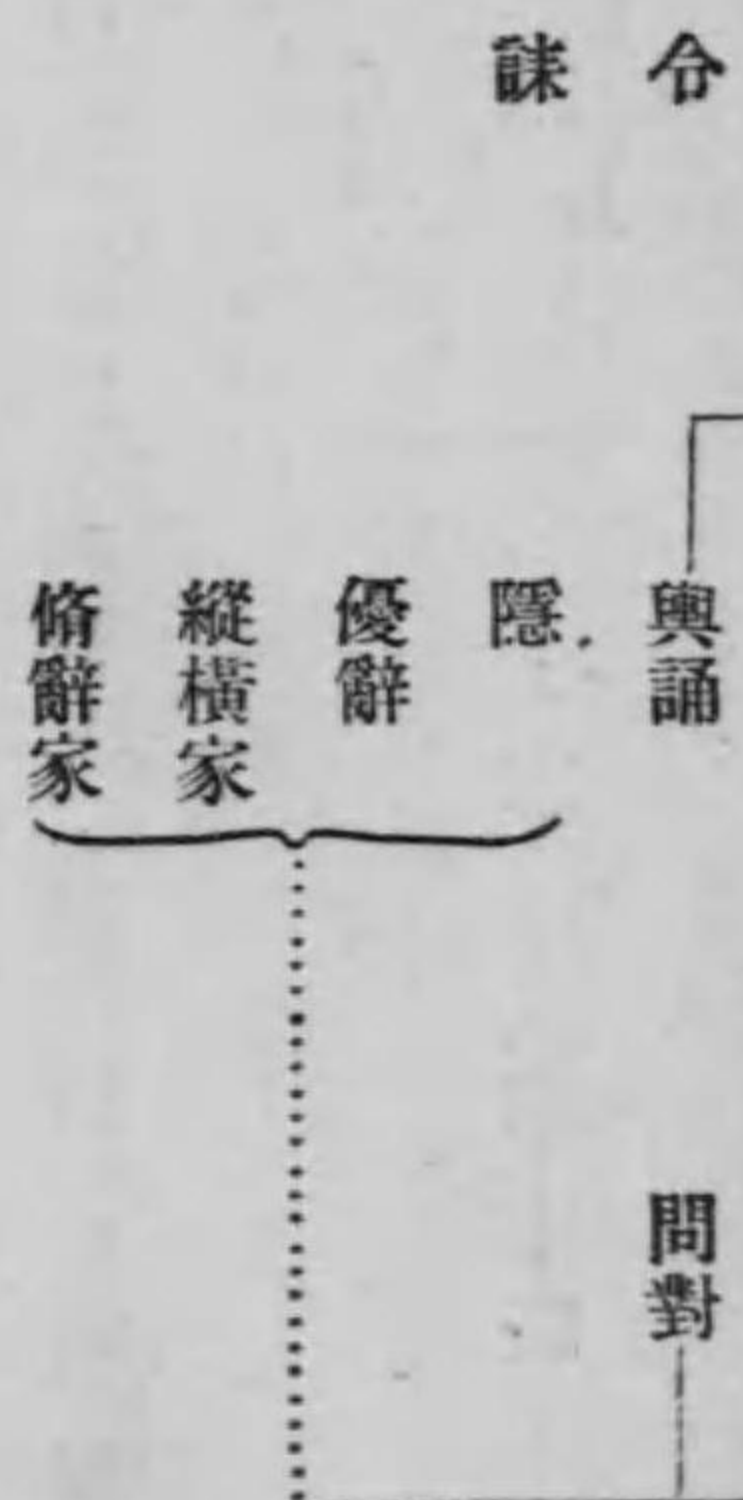
- 四、思想の述べ方は楚騷は叙情的なり。漢賦は寧ろ記載的なり。

右の漢賦に屬する條件性質を楚の騷及賦已に之を啓く。

第二節 本論の系統的圖示

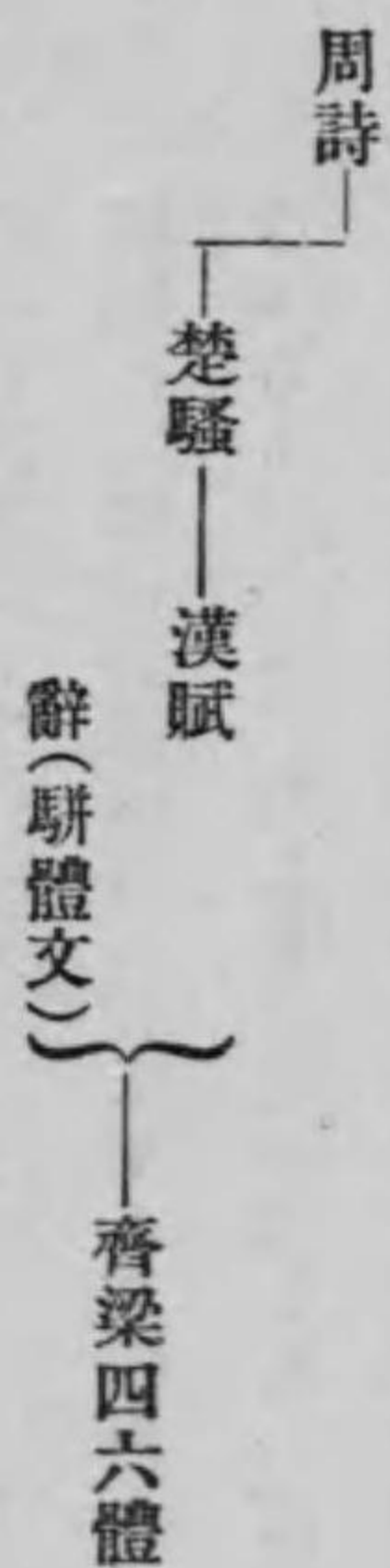
更に余の本論の趣旨を要約し、文辭諸體の變遷、展開せる關係を系統的に圖示すること左の如し。





第三節 騷賦の文學上の位置

又騷賦の其の前代後代の文學に對して占むる位置は左の如し。



離騷

一 楚騷の影響

「騷」は今を去る約二千二百年前、周末楚の屈原の製作であります。孔子が「詩經」を刪定せられ
 てから所謂春秋戰國諸子横議といふ時代において散文に於てはそれ／＼作者が出てゐますが韻文
 に於ては殆ど作者が見あたらないのであります。然るに屈原といふ人が出て、「騷」——語をかへ
 ていへば「叙情的の賦」、といふ者をつくつたことは文學史上餘程注意すべきこと、考へます。こ
 の「騷」あるがために漢代の文學が起るまでに甚しき寂寞を生せしめなかつた、音に寂寞を生せし
 めなかつたのみならず、漢代詩賦并に後代の文學は向つて千古の源を闢いたのであります。——
 勿論、屈原より二三十年以前に荀況(荀卿、荀子)が居りまして「成相」(杵歌に擬してつくる)とい
 ふやうなものを作つてゐますが強て言はゞ賦の萌芽でありませう。また後代に與へた影響は屈原
 ばかりの仕事ではなくして、屈原についで其の風を繼承した人々、所謂「楚辭家」の協力による
 ものでありませう。併しながら前には「詩經」以外に何も無かつた時代に出て、或る一體を創作し

て後代に垂れるといふことは主として屈原の力に基いたことであります。(一)

さて「騷」、もすこし廣めていへで「楚辭」なるものがどれだけ後代の文學に影響したか。事實を擧げて申しあげたい。先づ思想、——實質的の方面よりいへば「詩經」并に「楚辭」に言ひあらはしてあること、甚しきは其の字句までが摘出せられて後代の文學に現はれてゐる。これは苟も支那文學に目をさらす人の容易に認むる所であつていふまでもない。ことにいま此處に注意を願ひたきは其の形式的の方面であります。(二)

通例支那文學の變遷を説きまするに「詩」が亡びて「騷」が起り、「騷」が亡びて漢の「五言詩」并に「賦」が起つたと申しますがこれは事實である。併しこの間にかく變遷してゆく、も少し具體的の連鎖がありはしないか。私はあると考へるのであります。「詩經」を取つて見まするに全體に於て四言の詩であります。分つていへば國風の方は虛字助字に富んだ四言詩、雅頌は實字に富んだ四言詩であります。(雅頌といへどもなほ虛字助字に富んだものが少くないのはこれは漢若くは魏晉の四言詩と異なる點)これが漢の初に於て突然無名氏の五言古詩十九首となつてあらはれるのでありますが「楚辭」を見れば四言と五言の間に或る中間の形式があることがわかります。或る詩話に「離騷」の中の「字余曰靈均」といふ句が五言の始めであるといふことをかいてあり、又た或る

詩話に「書經」や「詩經」の中の五言の句を引きだして、これが五言の始であるといふやうなことがかいてありましたが、左様な議論のたてかたは無理でありませう。私がこゝに中間の形式と申ますはそんな一句や二句ではない。「楚辭」の「九歌」は大抵五言又は六言からできて居ります。その五言は

吉日兮辰良(東皇太一)

瑤席兮玉璫(同上)

龍駕兮帝服(雲中君)

桂權兮蘭櫺(湘君)

石瀨兮淺淺(同上)

上二字、下二字の中間に兮といふ助字がおいてあるのであります、この兮はこゝで聲をながく引くのでありましてその長さの時間は一音にひくのか又たそれ以上にひくのかわかりませんが假りに一音にひくものと解すればこゝに五音ができるのであります。それで意味の方からいへば四字であつて「詩經」の四言と同じで音の方で五つになつたのであります。いま一步をすゝめて想像すればこの兮の字が音だけの字でなしに意味のある字を用ふることゝすればこゝに五言詩が成り

たち得るわけでありませう。

次に「九歌」のうちの六言の句であります。これは

帝子降兮北渚(湘夫人)

目眇眇兮愁余(同)

捐余袂兮江中(同)

遺余褱兮醴浦(同)

といふやうになつてゐます。これは今の字を省けば五言になるのであります。しかしこれはすぐにこれが五言詩となるわけにはゆかない。御承知の如く漢の五言詩といふものはリズム(詩の句中の字數の音率)のうへからいふと上二音と下三音から成りたつのである。然るにこの「九歌」の句は上三音、下二音からできてゐるからすぐに同じとはゆかない。併しこれは若しもリズムの組み立てを顛倒するならば五言詩となるので全然關係は無いではないのであります。(以上は漢の五言詩と楚辭との關係であります。)(三)

次に漢の七言詩に對してどんな關係があるか。通例七言詩の始は漢の武帝の元封三年(皇紀三五、四紀前)の柏梁臺の聯句即ち

日月星辰和四時(漢武帝)

驂駕騶馬從梁來(梁孝王武)

(以下東方朔に至る二十四人各々一句を作る)

から出でたといふのであります。併しこれも此の時突然かやうなものがでたのではない。漢の初に於て高祖は楚聲を好むといふことがある。これはやはり楚辭のやうな歌ひかたを好んだので彼の「大風歌」の

大風起兮雲飛揚(漢高帝)

は明かに楚聲なのでありませう。又た武帝の「秋風の辭」(此詩は武帝の元鼎四年(皇紀五四、四紀前一三)に作る)の

秋風起兮白雲飛

草木黃落兮雁南歸(漢武帝)

及び「瓠子歌」(此詩は武帝の元封二年(皇紀五二、四紀前一〇九)に作る)の

瓠子決兮將奈何(漢武帝)

或は

河湯湯兮激潺湲

離 騷

の如き句を見ればこれも楚聲に基いたものであることは、わかります。

此の高帝が「大風歌」の第二句第三句に於て

威加海内兮歸故郷。安得猛士兮守四方。

是は兮を除けば直ちに七言となるのであります。また

大風起兮雲飛揚

は兮の字を意味のある字に改めさへすれば七言はすぐにできるのであります。また武帝の

草木黃落兮雁南歸

の兮の字を省きさへすれば、同じくすぐに七言となるのであります。

而して高帝、武帝等の句法が楚辭に基いてゐることは次の句を御覧になれば明でありませう。

旌蔽日兮敵若雲

矢交墜兮士爭先(國慶)

鸞鳥鳳皇日以遠兮

燕雀烏鵲巢堂墳兮(涉江)

前の二句は七言、後の二句は八言を擧げたのであります。前の方は兮を意味のある字に改め、

後の方は最後の兮を省けば此處に七言詩が成りたつのであります。

そこでまた七言詩のリズムであります。これは上四音、下三音といふ組み立てであります。そこで前例の前の二句の如きもの、兮の字を意味のある字に改めるにしてもその字は上部に屬せねばならぬのであります。そこで同じ楚辭の句法から七言詩がで、くると假定しても前の二句の方が既に在つてその後に後の二句のやうなのができたのであらうかと思はれます。これについて漢の武帝の初年に淮南王劉安といふ人がありますが、この人の「招隱士」といふ騷體を考へて見るに

桂樹叢生兮山之幽

偃蹇連蜷兮枝相繚

山氣靄鬱兮石嵯峨

谿谷崢嶸兮水曾波(淮南小山)

の如く、兮の字を省けば直ちに七言詩となり、漢の武帝の

草木黃落兮雁南歸

と同一句法であります。

今前に掲げた楚辭中の句は殆ど見當り次第に取つたもので決して極稀なやうなものを拾ひ集め

て自説を證明するわけではございませぬ。それゆゑ「楚辭」が七言詩に影響した、すなはち其の淵源であるといつてもよろしからうと考へます(四)

次には「楚辭」と漢賦及び漢初の散文との關係であります。漢初の散文に於て賈誼の「治安策」とか董仲舒の「天人對策」とか鼂錯の「貴粟」とか、あゝいふ達意的の文章は別といたしまして枚乘、鄒陽、の「上吳王書」のやうなものにいたりましては既に或るものは之を「駢體」と見做すのであります。私はこれが駢體と見做さるゝ丈けそれだけ賦と接近したものであるといふ考であります。又た淮南王劉安の「淮南子」の文章であります。これは劉安が詞賦の才を散文に應用したものでありまして其の外形に於て甚しく詞賦との接近を見るのであります。若し劉安が詞賦を善くした人でなかつたならばあれだけの散文は到底できなかつたであらうとおもはれます。又た司馬遷の文章であります。これは直接には賦とどれだけの關係があるかを明かに示してはゐませぬけれども「屈賈列傳」に下してある評や、司馬遷得意の文章を讀みれば其の詞賦にも造詣の深かつたことが推量せられるのであります。故に私は賦を研究しなければ西漢文章の妙は知れにくいであらうと考へます。(五)

次に漢賦であります。通例楚騷、漢賦と申しますが、騷と賦とどれだけちがふか。騷は前申し

た如く「叙情的の賦」であります。而して賦は所謂賦で情をのべるよりも或る事物を直接に詠する記載するものであります。司馬相如、揚雄等の手に成つた漢賦はさういふものであります。この體は固より漢代に出來たもので周末には無かつたものであります。併しながら賦が騷の體から出て來たことは明瞭でありまして唯だその性質に於て叙情的なるものを記載的とし、騷に用ふる如き音聲の助字のやうなものを省いた所が賦の特色であります。これは相如の「上林」の賦、揚雄の「羽獵」の賦等に於て明かであります。故に「楚騷」と相對して稱せらるゝ漢賦でさへこのことほりてあります。まして漢人ではあります。故に「楚騷」と相對して稱せらるゝ漢賦でさへこのことほりて劉向、の徒は言ふを待たぬことであります。東漢の作者は前代の模倣でありますから申しませぬ。

(以上は漢初の散文及賦との關係であります)(六)

最後に「楚辭」と四六文との關係を述べませう。

今、「四六文」と申すのは一に「駢體」、「駢儷體」、など、稱へらるゝものであります。駢體といふ語は對句を用ひる體といふやうなことで餘り意味が廣い。それで「四六文」と申します。「四六文」は文章の句の構造の大多數が四言と六言から成るものをいふのであります。處々にこの數に

合はない句や字が有つてもそれが僅少であれば構はないのであります。この用語に従つて四六文は大約魏晉の頃から起つたもので六朝を通じて行はれ、陳、周の際に最も發揮せられたのであります。此の體は唐の韓愈以下古文家と稱するものからは非常に排斥せらるゝのであります。此の體そのものには何等の罪もない。私どもは局外より見て支那文學に於て最も有力なる美文の一體と考へるのであります。古文即ち散體と四六體とは並び行はれて差支ないものと考へます。差支ないどころではありませぬ。これがなかつたら文章の脩辭的方面の技巧は大半失はれるであらう。そこで支那に於ては上は天子の詔制より下は臣下の奉る表牋、士人相互の書牘の類に至るまでこの體が行はれてゐるのであります。我が日本におきましても王朝時代の文學は頗るその影響をうけたこととあります。「源平盛衰記」の彼の「大原の行幸」の條下などに於ては四六文を書き流しにした所もあるのであります。書き流しにせぬでも一定の語數を以て兩々相對せしめ若くは隔句に相對せしむるといふやうなことは本邦固有の脩辭と相待つてこの四六體といふものが助けたこと、おもしろはれます。又た現に「教育勅語」の文章の莊重なもの、その含んでゐる意味から來るもの、外に外形上、この四六體から得た所の或るものがあるであらうと考へます。それで此の體は日本、支那兩種の文學に於て充分研究の價值があると思ひます。

少し餘談に流れました。本題に立ちもどりまして、四六體の初は魏の文帝の「與吳質書」の馳騁北場。旅食南館。浮甘瓜于清泉。沈朱李于寒水。白日既匿。繼以朗月。魏 帝與吳質書
 だと傳へられてゐます。はつきり此時からといへますまいが東漢の末頃から行はれたものでありませう。同じころ建安の七子中の一人である所の應瑒の

慰藉輕於繒綺。譏望重於邱山。是角弓之詩。所以爲刺也。植鷺羽於宛邱。騁駿足於株林。發明月之輝光。照妖人之窈窕。斯亦所以眩耳目之觀聽、亡聲命於知友者也。(報龐惠恭書)

晉の呂安の

或乃廻飈狂厲。白日寢光。崎嶇交錯。陵隰相望。徘徊九臯之內。慷慨重阜之巔。進無所依。退無所據。(與嵇茂齊書)

など一斑を伺ふことができます。これが齊、梁から陳、周、時代に於て最も巧になつてまゐりました。

離房乍設。層樓間起。負朝陽而抗殿。跨靈沼而浮榮。鏡文虹於綺疏。浸蘭泉於玉砌。幽幽叢薄。秩秩斯干。曲拂遑廻。潺湲徑復。新萍泛沚。華桐發岫。雜天采於柔荑。亂嚶聲於綿羽。(三月三日曲水之詩序、齊の王融)

離

騷

粧明蟬之薄鬢。照墜馬之垂鬢。反插金蓮。橫抽寶樹。南都石黛。最發雙蛾。北地燕支。偏開兩鬢。亦有嶺上仙童。分丸魏帝。腰中寶鳳。授曆軒轅。金星與婺女爭華。靡月共姮娥競爽。鸞鷲浴袖。時飄韓椽之香。飛燕長裾。宜結陳王之佩。(玉臺新詠序、陳徐陵)

この例は其の當代のその他の人の文を見ても同じことであります。かういふ調子でつゞけてまゐるのであります。つまり四言と六言の句を巧みに點綴してけかなる長篇大作をもくみたてるのであります。(この對句の法やその他の事がらは四六文専門の一科になりますから申し上げませぬ)。(七)

此の四六文の四言の句であります。これは賦からでたといふのではありませぬ。既に「詩經」が四言の句でありますし、又た「書經」の典謨の文章も四言の句が多くあるのであります。この四言即ち偶數の句といふものは奇數の句に比べると餘程句調がよいのであります。たゞ一句でもさうでありますが、それが二句相對するときは猶さらであります、それで相對されない句即ち「單句」或は「散句」はかたちんばの句であつて辭をうるはしくのべる、裝飾的にのべるには工合がよろしくないのであります。(勿論對句のみでもこまありますが)。それゆゑ古來名文章と稱へられてゐる文章はたとへ散體の文にしても處々にこの對句を用ひてあるのであります。ずつと昔しの秦の李斯

の「諫逐客書」あたりでもさうであります、その以前の戰國の諸子の文に於てもさうであります。四六文は裝飾の方が勝つて來たのでありますからこれを殊更多く用ゐるやうになつたものであります。(八)

次に四六文の六字の句であります。これは私が主として騷賦からで、きたものであらうと申すのであります。四六文が生れるにはやはり次第に變化してこまてまゐつたものであります。騷賦から突然出でたと申すのではありませぬが脈絡がそこから發してゐると申すのであります。前に漢初の散文に於て淮南子の文が賦に近いと申しましたが鄒陽、枚乘、などの文もさうであります。特に枚乘の「七發」といふものは最も賦に近い。魏の曹植がこの「七發」をまねして「七啓」をつくつてゐますがこの「七啓」と當代の四六文を比較すれば兩者甚だ似てをります。

枚乘の文には

且夫出輿入輦。命曰麗痿之機。洞房清宮。命曰寒熱之媒。皓齒娥眉。命曰伐性之斧。甘脆肥膿。命曰腐腸之藥。今太子、膚色靡曼。四支委隨。筋骨挺解。血脉淫濯。手足惰懈。越女侍前。齊姬奉後。往來游讌。縱恣乎曲房隱閨之中。此甘登毒藥。戲猛獸之爪牙也。(枚乘七發)

といふやうながあり、曹植の文には

僕將爲吾子。駕雲龍之飛翺。飾玉輅之繁纓。垂宛虹之長綏。抗招搖之華旂。插忘歸之矢。乘繁弱之弓。忽躡景而輕驚。逸奔驥而超遺風。(曹植七啓)

といふやうながあります。殆ど全く四六文と區別ができないでありませう。而してこのうちの六言の句は「楚辭」に非常に多く用ひてあるのであります。試に挙げますならば

朝攀阨之木蘭兮。夕攬洲之宿莽。(離騷)

惟草木之零落兮。恐美人之遲暮。(同上)

揚雲霓之晦靄兮。鳴玉鸞之啾啾。(同上)

朝發軔於天津兮。夕余至乎西極。(同上)

帶長鈇之陸離兮。冠切雲之崔嵬。(涉江)

步余馬兮山阜。邸余車兮方林。(同上)

といふやうに第四字目に虚字を用ひて、六字の句を作ることは枚舉に遑あらず。四六文の六字句は必ずしも第四字目に虚字を用ふると限りませぬがさういふ句法が甚だ多いのである。それで私はそれが源を騷賦に發したものであると信するのであります。(九)

かく觀察いたしますれば「騷」——或は「楚辭」といふものは漢代の散文に五言詩に七言詩に賦にそれ／＼影響し、又た六朝時代の四六文にも波及したものと見てよろしくありませう。形式上の影響はかくの如く、其の思想及び文藻が一々後代の模範となり感化を與へたことも非常なものであります。極端にいへば今日に至るも支那文學者は其の糟粕をなめつゝあるのである。善く申せば「英を含み華を咀む」とでもいふのでありませう。支那の古典として珍重すべきものと考へます。(十)

全體「詩經」と「楚辭」と「文選」は支那文學の三大首腦であります。この三者を咀嚼し、賞翫する力がなければ到底支那文學の眞味を了解することができない。いづれも古典であつてむつかしい。そのうちでも「楚辭」はむつかしく「楚辭」のうちでまた「離騷」がむつかしいのであります。まづ「離騷」の解釋が充分につきますならば騷人の想像力の運ぐらし方にも略々見當がつき、句法や字法に於ても大體類推することができるとありませう。そこでこれを新體詩に翻譯いたして、及ばすながら原作の百分の一なりどもの風神を發揮したいといふ考なのでございます。(十一)

一一 屈原及び其の時代

「離騷」の作者屈原は周の赧王の世 我が孝安天皇の世、皇紀三百四十五年、西紀前三百年代 の人で楚 今の支那の湖南 に生れ楚の懷王に事へた。學問もよくでき歴史にも通じ法文の起草や外國諸侯の應接などをしてすべて材能があつた人であります。それが同僚から惡まれて讒言をせられて遂に懷王に疎んせられる様になつた。そこで此の「離騷」を作つたと申すのである。漢の司馬遷は「騷は憂なり」と説き、王逸は「離は別なり」と説てゐます。然らば「君ごわかれてゐる心配」を述べたものといふ意味になります。が「離」は罹なりで「かゝる」といふのでないかと思はれます。これは本文中に左様に解してある所が澤山あるからいふので、さすれば「憂にかゝつて」その情を述べることになります。懷王から疎せられてすぐこの賦を作つたか。これは疑問であります。「離騷」中に投水の決心をしたことがかいてある。決心と實行との間は時間が長くてもよいのでありますけれども私は「離騷」も「懷沙」のやうに投水間際につくつたものでないかと疑ふのであります。さすればもつと後に作つたのであります。「史記」に依ると一旦屈原が懷王に疎んせられてそれからまだ度々懷王に面會もし國政についても忠告をいたして居るのであります。私はそんなときに投身の決心をしたであらうと考へることはできません。(一)

屈原の時代は戰國の世で策士横行の時である。屈原が一旦退けられてから後、懷王の十六年

周の赧王二年、皇紀三四八、西紀前三一三 に秦から楚へ張儀といふ策士を使いやり且つ楚の宰相とならしめて計を以て楚と齊の親密なる交を斷絶せしめた。その計といふのは楚が齊と絶交したならば秦から商於といふ地方六百里を楚に與へやうといふのであります。懷王が張儀にだまされて齊と絶交して六百里の地を得やうと秦に談判したが秦は與へない。そこで翌十七年楚は大兵を擧げて秦と戦つたが敗北して漢中といふ地方をも失ひました。翌十八年秦楚の和睦が出来て秦から漢中を返へさうといひました。懷王は土地はいらぬから張儀の生命を申うけたいと申して(當時張儀は秦に在り)張儀をもらひました。此の頃屈原は何をしてゐたかといふに彼の前に絶交した齊に使をしてゐたのであります。これは秦との關係上何か秘密の命を奉じてまゐつたものであらうと察せられる。あたかも屈原が齊からかへりまして懷王は再び張儀にだまされてこれを秦へ逃がしてやつたことを聞いて、懷王を諫めて後から追かけさせましたがあとのまつりでありました。それから懷王の二十四年に秦の昭王と楚との間に結婚が成立し楚から娘をやりました。二十八年に秦、韓、魏、齊の四國が連合して楚を伐ち楚の將を虜にした。つまり懷王は秦の結婚政略に又々だまされたのであります。戦が終つてから秦は懷王に武關といふ處で會見したいと申込んだ。屈原は「行くなかれ」と諫めたが懷王の第二男子蘭などがすゝめて會見にゆかせたところが遂に秦に捕へられて歸國す

ることができなくなつた。これが懷王の三十年(周赧王の十六年)であります。周の赧王の十七年(皇紀三六三、四)に懷王の長子頃襄王が楚王となり弟子蘭を令尹(即ち宰相)とした。子蘭は屈原と説を異にし上官大夫をして屈原を頃襄王に讒言せしめた。そこで頃襄王が怒りて屈原を江南(湘江の南)に遷しました。これが屈原が第二次に新王から疎んせられた時であります。(二)

そこ、屈原の死期と死因について少しく愚見を述べませう。屈原がいつ死んだか、或る人は懷王が秦に捕へられた年と同じだといひますが、それはうそであらう。頃襄王が立つてからも屈原は生きてゐる。そこで頃襄王の何時に死んだか。屈原の「漁父」に「屈原既放、遊於江潭」とあり、又た「卜居」に「屈原既放、三年、不得復見」とあります。私考へますに懷王の時には屈原はたとへ王から疎せられてもまだ江南に遷されたといふことは無く却て間接に國事に奔走もいたしてゐたのであります。然るに新王頃襄王の時になつてから全く江南に遷され所謂「遊於江潭」の状態になつたものでありませうか。さうすると「三年」も頃襄王立つてのち三年と解釋ができ「復見」といふのは先王懷王に思を寄せたものであらうと思はれます。なぜならば懷王の時疎んせられて三年といふならば恐くは「不得復見」といふのは不適當であります。現に度々懷王に面會してゐるではありませぬか。因て頃襄王の三年と見るのであります。この三年目に彼の如き文を作り卜者にも

運命を占ひてもらひ、形容も憔悴し、愈々死の決心を固めたのであります。而して頃襄王の三年(周赧王十九年、皇紀三六五、四紀前二九六)は曩に虜にせられた懷王が秦で客死した年であります。恐くは屈原の死の決心を最後に促したものはこの懷王の客死といふことの與へた失望ではありますまいか。屈原は懷王を美人に比しおのれの戀人に見做してゐるものであります。その人の死を聞て死を決したと見るのは餘り不當な推察ではなからうかと考へます。(三)

三 「離騷」の解説

前にも申したごほり「離騷」一篇の大意は屈原が懷王から退けられて初はその悟らんことをねがひ次にはそれを怨み怨みのはては遂に失望にいたつて投水の決心をする、その無限の憂愁をのべたものである。或る人は屈原が偏狹に過ぐるものであると評します。いかにも偏狹かも知れない。併しながら善を好む程度が強ければ強いほど惡をにくむ程度もつよい。屈原はこの惡をにくむことの極端な人である。そこでどうにかして其の君をして惡から遠かり善を用ひるやうにせしめたいと思ふけれども君は我が言を用ひない。一度ならず二度三度も之を諫めるけれども用ひられない。かやうなときに怨みの心を生ずるは決して情に於て無理ではない。況んや此怨みなるも

のも決して悪意に出たものでない以上は實に同情すべき怨である。これが偏狭ならばどうか少し此やうな偏狭心を持つてもらひたいものと考へます。さすがに漢の司馬遷であります。最も能く屈原の心理を道破して居ります。「屈平、王ノ聽クコトノ聰ナラズ、讒諂ノ明ヲ蔽ヒ、邪曲ノ公ヲ害シ、方正ノ容レラザルヲ疾ム、故ニ憂愁幽思シテ「離騷」ヲ作ル、」又た曰く、「夫レ天ハ人ノ始ナリ、父母ハ人ノ本ナリ、人窮スレバ則チ本ニ反ヘル、故ニ勞苦倦極ニハ未ダ嘗テ天ヲ呼バズンバアラズ、疾痛慘憺ニハ未ダ嘗テ父母ヲ呼バズンバアラズ、屈平、正道直行、忠ヲ竭シ智ヲ盡シテ以テ其ノ君ニ事ヘ而シテ讒人之ヲ間ス窮セリト謂ツベシ、信ニシテ疑ハレ、忠ニシテ謗ラル、能ク怨ムコト無カラシヤ、屈平ノ「離騷」ヲ作ルヤ蓋シ怨ミヨリ生ゼリ」とまことに屈原の胸に立ち入つて見るやうな適切な評であります。實に道理ある怨であります。かゝる際にかゝる怨を生ずるやうな人情であつたならば政治上の腐敗を歎するやうな時代もまゐらぬであらうと察せらるゝ程であります。司馬遷は又た「離騷」を「詩經」の國風并に小雅と比較して、「國風」ハ色ヲ好ンデ淫セズ、「小雅」ハ怨誹シテ亂レズ「離騷」ノ若キモノハ之ヲ兼ネタリト謂ツベシ」といつてゐます。司馬遷は屈原の深き知己であります。(一)

「離騷」中に言ひあらはしてあることは翻譯をお讀みになれば知れます。之に對する見解は讀者

の判斷にまかせます。併し豫め注意すべき點は比喩のたて方であります。本文の中に用てある「善い鳥」、「香ばしき草」は忠貞の徳をたとへたものであります。これは單にたとへとして引たばかりではなく叙景をも兼ねてゐるので屈原が洞庭湖の南に居たから自然にその地方の自然物を詠じながらたとへたものであります。次に反對に「悪い禽」や「香の臭き草」、などは讒佞その他の不徳にたとへたものであります。中には「善い草が悪い草になつた」とかいてあるのは悪人の反覆常なきことをあらはしたのであります。それから本文に「靈修」とか「美人」とかいふてゐるのは君にたとへたのであります。「靈修」は「徳を善く修めた人」といふ義であります。私はこれはたゞ「君」或は「我が君」と譯しておきました。次に「宓妃」とか「佚女」とか名をさした美人が出てゐます。後漢の王逸の説にはこれは「賢臣」にたとへたとありますが私はやはり「理想の人」即ち「君」を意味するものと考へます。それから「美人をねたむ」とか「蛾眉をねたむ」といつてあるところは「君」ではなく自分をたとへたものであります。これは本文をお讀みになるとき々々にお悟りになるであります。草木、禽獸、人命、等の名物はすべて原字に従つて翻譯せず、ごころ々へ王逸の註を加へておきました。文義に於ては大體王逸に従ひましたが悉く従つたわけではありませぬ。あまり附會にすぎた道德論と思はれるやうなところは省きました。(二)

本文中聖君賢王の事を述べたあたりは原文には相當に文學的の價值があるのでありますが譯しては實用的の一方に傾きさらに文學上の趣味が生じませぬ。この點は譯者の責であります。(三二)
 私は最後に又た司馬遷の語を借りて申します「離騷」は、「上、帝譽ヲ稱シ、下、齊桓ヲ道ヒ、中、湯武ヲ述ベ、以テ世事ヲ刺リ、道德ノ廣崇タル治亂ノ條貫アルヲ明ニス、畢ク見ハサルナシ。其文ハ約、其辭ハ微、其志ハ潔、其行ハ廉、其ノ文ヲ稱スルハ小ニシテ其ノ指(旨也)ハ極メテ大、類ヲ舉グルコト邇クシテ義ヲ見ハスコトハ遠シ。其ノ志潔シ、故ニ其ノ物ヲ稱スルヤ芳ヲトル、其ノ行廉ナリ、故ニ死シテ而カモ容レラレズ、濯滄汗泥ノ中ニ自ラ疎ニシ、濁穢ヨリ蟬蛻シテ以テ塵埃ノ外ニ浮遊シ、世ノ滋垢ヲ獲ズ、嶢然トシテ泥ニスルモ滓セザルモノナリ、此ノ志ヲ推スニ日月ト光ヲ争フト雖モ可ナリ。」屈原の志はかくの如きものであります。同じ投水ではありますが湘水への投身は華嚴の瀧や那智の瀧へ躍りこむのとは全く性質を異にしてゐるのであります。世間では青年の趣味が墮落し、理想が卑くなつたと慷慨いたしますが獨り青年ばかりでなく志士を以て任じ一國の政治に任ずる者までがさらに忠貞の志、廉耻の行を顧みないやうになつてきたやうであります。若し屈原の如く清廉の士が居るならばさやうのことは無い筈であります。孟子曰く、「先づ其の大なる者を立つ、小者奪ふこと能はず」。大なるところへ着眼して志を

定めるならば決して小なるものゝために志を奪はれることはない。青年が一婦女子の爲めに千金の身を土芥の如くに取りあつかひ、政治家が金錢利慾のために其の節操を二三にするといふことは所謂「大なるもの」を立てないためである。屈原の如き情操をもつてをらぬからである。(四)

四 「離騷」翻譯

「離騷」

遠つみおやをたづぬれば、

帝高陽(文那の上古の帝ナリ、又た顯瑠といふ)の御末にて

吾が父上は伯庸と、

いへる楚國の忠臣なり。

その忠臣のまな子なる、

吾屈原はくすしくも、

寅の初春寅の日に、

楚國の都にうまれたり。

めでたき文字をわらびどり、
われと吾が子にたまひたる、

字は靈均名は正則。

吾は善美を身に修め、

政治のわざにくらからず。

江離こりりの草や辟芷ひしの葉、

衣ころもにづかり秋蘭を、

腰に佩ふれどなほ足らず、

ゆく歲月のはや過ぎて、

及ばぬこともあらんかと、

あしたに岡によぢのぼり、

とるはひざん毗山の木蘭花、

ゆふべに江かはにおりたちて、

摘なかつむは中洲のときは草

されど月日にせきもり關守も、

あらねばいつか春秋と、

かたみにゆきて草も木も、

落ちちるみればあなうしや、

あたら美人びじんの考いやせん。

けかれし草を刈りとるは、

たゞ壯年の今にあり、

など吾が君のさくらざる。

千里の駒にうち乗りて、

いざ馳せたまへしるべせん。

* * * * *

むかし禹(夏の)湯(殷の)文王(周の)と、

申し、君は聖人と、

よばれしからに賢臣を、

ひろく用ゐてすてさせず。

たとへば椒樹せうじゆ菌桂も、

蕙けいし萱の草もこきませて、

ころもの袖に佩ひびしとや。

また堯舜の徳のひかり、

道をゆくごとて路を得つ。

たゞ桀紂けつちゆうの暴君は、

きぬのもすそをはらゝかし、

ちかみちすごとてゆきなやむ。

彼の黨人の姑息こそくなる、

いよ、味きにわけりて、

險阻のみちをゆきたどる。

身の殃なやほひはいとはねど、

君が御輿みこしの覆へりやせん。

御輿のさきにあとにたち、

ひじりの君のゆきしあと、

たどりたまへといのれども、

讒を信じて怒りたつ、

君がみこゝろいかにせん。

わがまごゝろはあだとなり、

身の危さは見ゆれども、

いかでかやめん吾がこゝろ。

かの九天を指して、

誓ふも君がゆるぞかし。

『たそがれどきに相見ん』と、

いひしことばはいかにせし。

道のなかばに歩をかへし、

遁れてよその路ゆくは、

あだしこゝろのできやせし。

別れてゐるはいとはねど、

うつれるこゝろいたまし。

* * * * *

百畝に植うる蕙けいし蘭、

杜衡とけいにまじる芳芷草、

留夷りうい 揭車けつしやもまた添へて、

時をば待ちて吾刈らん、

枝葉みづしく繁れかし。

しほみて枯る、日ありとも、

清きかをりのけがれされ。

* * * * *

彼の貪婪のもろびとは、

足ること知らで利を競ひ、

曲れるおのが心もて、

なほき人をおしはかり、

求めて人をいみそねむ。

この人々と相競ふ、

無用のいとまあるべしや。

次第にちかよる老の波、

君子の名こそ立てたけれ。

木蘭、露を墜すとき、

あしたに玉をうけて飲み、

菊、黄金を散らすとき、

ゆふべにはなぶさ摘みて食む、

清きころの汚れすば、

窮通、我に何かせん。

木の根をとりて藎を結び、

貫くものは何々ぞ、

これぞ薜荔の落ちし藎。

曲れる蘭桂矯め直し、

結びつけたる蕙の糸、

胡繩の草のかんばしく、

長きをむすぶも何のため。

世と異なる吾がころも、

吾は古人を法となす。

世間の人にあはずとも、

彼の彭咸殷賢大夫なり、君を諫めて聴かれず、水に投じて死せり、ぞ慕はしき。

* * * * *

あゝ人生の多艱なる、

涙のかはくひまぞなき。

吾は善美を修めつゝ、

災禍の網にほだされて、

朝に君を諫めては、

夕に君に棄てらるゝ。

かゝる運命にあふことも、

蕙藎をおびし咎どかや。

おもひさだめしことなれば、

死すともくゆることもなし。

* * * * *

離 騷

あゝ吾が君のあさましき、

彼の人情を知らさずや。

蛾眉を嫉むは衆女のころ、

我を邪淫ごたがいひし。

墨の繩をも定規をも、

棄てゝ工みのありてふは、

時世の人のいつはりぞ。

やるせかなしき我がたちゐ、

苦しき時にあへるかな。

よしや仆れて死することも、

時世のさきをなすべしや。

小鳥のむれに猛鳥の、

あらぬはふるきためしなり。

道異なれば合はざるは、

又圓水火のあはぬごと。

尤をば忍び耻を去り、

はやる心をさしおさね、

清きを守り直きに死す、

かゝる男子のあるときは、

ひじりの君はほめしとか、

かゝる男子と我ならむ。

* * * * *

あゝ我、道をあやまちぬ。

しばしとまりてやがてまた、

もと來し道にかへらなむ。

今もし車かへしなば、

迷ひしほど遠からじ。

蘭の岡べに馬を驅り、

また寄りいこふ椒の邸、

進みて君にいれられず、

とがにかゝれる我はまた、

もこのころもをよそはや。

菱荷の葉たちて衣ごなし、

蓮華の花を裳につくる、

げにかんばしき吾がこゝろ

知りたまはねばすべもなし。

峩々たる高冠頭にのせ、

うすの玉ゆらゆら〜に、

ひかりきらめく我が佩びもの、

かをれる草も身につけて、

もとより清きこのすがた、

缺けたるさまもなく〜と、

左右前後を見かへりて、

いざ天地をゆきてみむ。

繁き飾の繽紛と、

ねならぬかをりいやたかし。

たでくふむしもすき〜と、

いかであやしきすがたをば、

我のみつねによそふらむ。

五體の骨の解くるとも、

つひにやまざるこゝろかな。

* * * * *

女(屈原の姉)はさすが女なり、

しばし〜我を罵りて、

「鮫(堯の臣にして洪の水を治めし人)がふるごと汝もみよ、

直きに過ぎて身を忘れ、

離 駭

遂に羽山(地名)に死せしぞや。

汝も古人に法とりて、

善美を好むはよけれども、

などたゞひとり清節を、

守りはてんどさのみする。

悪しきにはひの蕒蕒 蕒蕒 施、

室に盈てるになどひとり、

離れてこれを佩びざるか。」

血筋をわけし姉さへも、

かくぞいふなる世のなかに、

誰かは知らん吾が心、

人、人毎に説くべきや。

世は朋黨の世なりかし、

ひとり寂しく我をおきて、

など我が説に聴かざるか。

* * * * *

前きの聖人の迹を見て、

我、中庸にかへれども、

怒り悶て安からず、

かなしき時にあへるかな。

南、沉湘(洞庭湖の南にある川の名)の川わたり、

重華(舜の名)が前に宣り申さく、

「むかし夏の啓徳すぐれ、

「九辯」「九歌」(禹の時の音、樂なり、九功の徳をうたふ)の樂ありき。

その子太康娛樂にすぎ、

兄弟五人おちぶれぬ。

また羿(古の諸侯の名)田獵をいと好み、

狐を射ごめ鳥をうち、

寒泥(羿が臣なり)に妻、奪はれぬ。

澆(寒泥の子)は力を鼻にかけ、

君(夏后相なり)を殺して慾にふけり、

つひに少康(夏后相の子)に殺されぬ、

夏の桀王の無道なる、

つひに滅亡の殃にあひ、

般の紂王の殘虐なる、

その家つひに長からず。

禹湯は嚴かにしてよく敬み、

文王道にたがふことなく、

賢才を擧げ能者を用ひ、

規律を修めて偏頗なし。

天は私愛に阿らず、

胸ふさがりて涙湧く。

蕙の柔葉(たねは)を手にとりて、

顔をおほへば血の涙、

襟もしど々にぬらすなり。

* * * * *

重華が前に衽敷きて、

心のたけをいひをはり、

中正を吾得しこゝち、

心にひかりかゝやけり。

玉の虬(みづち)に鞭うちて、

引き出ださする鳳凰車

埃(ほこり)を飛ばす天つ風、

我吹きあげて空にゆく。

蒼梧(舜の葬れし地)の野邊を朝たちて、

徳あるものに輔佐を假す。

聖人哲士の行ある、

みなよく天下に事を用う。

前後の興亡きはむれば、

治民の術も知るゝなり。

用うべきものたゞ義なり、

守るべきものたゞ善なり。」

納(な)をわらぶに孔(あな)を量(はか)らず、

忠臣むかし鹽漬にせらる。

身を危くし死に近づく、

されど心をひるがへさず。

我も初志をばかへりみて、

いさゝかくゆる色はなし。

あゝ我が時にあはぬなり。

暮にはたどる崑崙山。(この山より天にかよふといふ古傳説あり)

縣圃(崑崙山にありと想像せられたる一種の樂苑)のそのにさまよひて、

見わたす天の九重門。

玉の扉にたゝすみて、

入らんとすれば西山に、

落つる夕日をいかにせん。

「羲和(日輪の御者と想像せられたる神人)日車をゆるくせよ。

崦嵫(日の入る處と想像せられたる山)の山にちかづくな。」

ゆくての路のはてのなさ、

いで大空のまうへより、

下は大地の底までも、

ゆきて我が戀ふ人を見む。

駒に咸池(日輪の浴する池にして四方日没邊にありと想像せられたるもの)に飲ひて、

手綱をつなぐ扶桑(東方日出の地にあり桑の木雙方より出て相扶くと)の木、

若枝手折りて日を拂ひ、

こゝにしばしはさまよひつ。

さて望舒(月輪の御者と想像されたる神人)をば先驅とし、

飛廉(風の神)のやからを後となし、

鸞鳳の使、さきだて、

かの人いかにご問はすれば、

豊隆(雷神なり)曰く「しばしまて。

なほ身の仕度ごのはじ。」

よるひるわかす鳳凰を、

使にたて、天地を、

たづねしむればつむじ風、

さつと吹き来て我が伴も、

あはれちりくくばらくくに、

迎へに来るは雲や虹蜺(雲、虹蜺、は邪惡の代表)

むれくよると見るまゝに、

またたちわかれ上下に、

離れ集る定めなさ。

天の御門を仰ぎ見て、

「開きてたべや守りびと、」

いへど小門に寄りそひて、

外はづしもあねぬ黄金こがねのかぎ、

門かど、守る人のいたづらに、

我を見つむるつれなさよ。

そぼくくる、夕暮に、

蘭をむすびてしばし立つ。

濁りはては黒白あつちやくさへ、

離 騷

わもわけがたき世のすがた、

美人を嫉むならひなり。

* * * * *

空はれわたる朝まだき、

いざ白水(崑崙山にあり、これをのめば死せずといふ)の河わたり、

閼風(崑崙山上にありと稱する神山)の上に駒ごめん、

忽ち下を見かへりて、

戀ひやみがたき彼の美人、

もしやみ山のいたゞきに、

その人なくばいかにせん。

春之宮屈原、いま扶桑に在るこゝろなり、春宮は東方青帝の居る所と想像せられたる宮殿に遊びする、

我は眞玉の枝を折り、

その花ぶさの散らぬうち、

佩びて彼の女に贈らんか。

また豊隆(雷神なり、)を雲にのせ、

宓妃(神女なり)のありかを求めしむ。

吾が佩く帯を解きはなち、

結べる玉を贄として、

塞修(上古伏羲氏の賢臣の名、その人)を假るなりやりて仲に立て、

言ひよらずれば彼の叢雲、

忽ち合ひてまたわかれ、

つれ來むことも望みなし。

見れば宓妃は夕暮に、

窮石(窮水といへる)の溪にやどりして、

洧盤(崦嵫山より出づと想像されたる川)の川の朝風に、

緑の髪をあらひつゝ、

あでなる姿誇りがに、

うちたはむれて遊びゐる。

麗はしびごといはいへ、

禮を知らざるはした女よ、

いざ立去りて戀ひ人を

よそなる國にたづねばや。

あまねく四方を見めぐりて、

のこるくまなく大空を、

きはめてのちに下るべし。

かさなりたてる雲のうへ、

瑤の臺の七重八重、

かしこに見ゆるたをやめは、

かむすめなり。

これ有娥

種族の名なり、有娥氏に美女あり、これがために高臺を建て、飲食せしむといへる傳説あり、女の名は簡狄、帝嚳といへる賢王の妃となれりといふ

鳩(海ある鳥、悪人にたとふ)をたのみてなかだちに、

やりたることの愚かさよ。

鳩は歸りて報すらく、

「彼はみにくき女なり。」

妻戀ひかねてほろ／＼と、

鳴く雄鳩さへはしたなく、

おもへる我はいかにして、

自往みづかちかむ往かむとは、

おもへどやはかゆかるべき、

ためらふこゝろどつおいつ。

また鳳凰を使とし、

禮をそなへて贄をやる。

我より先きに高辛(即ち帝)が、

迎へて去らばいかにせん。

* * * * *

青空かけて飛ぶごりの、

遠くゆかむごおもへども、

宿りせん木のあらなくに、

心和ぐやとや、しばし、

御空の野邊にあそびする。

見れば有虞の姚氏が家、(姚氏は舜の後なり)

二人のむすめ秘め置きて、

まだ少康(夏后相の子なり、夏后相が澆のために殺されて後有虞に嫁せずとや、)

使をやりて求むれば、

なかだち人のつたなくて、

かためのことば結ばれず。

賢をばねたむ世のならひ、
善を蔽ひて悪をほむ。

など世のなかのにこりたる。

君が宮居の奥深く

言聞えあげんよしもなし。

さがしき君も悪人に

まかれてさとりたまはぬよ。

よしや真心いだくとも、

つひにきかれぬものならば、

このたへがたき苦しみを、

いかでさのみはつゝみおき、

いつまで耐へてあり果てむ。

* * * * *

ちがやの草をこりむすび、

竹のさえだを折るかやめ、(屈原時代の占ひの法とみゆ)

こゝに占ふ吾か運命、

靈氛(占ひの名入) 我に告げていふ、

「我うるはしく彼もまた、

うるはしからば相合はん。

いま君、たれをうるはしと、

おもひてかくは慕ふらん、

天なる下はいと廣し、

女の住むは楚のみかは。

君がうるはしき姿もて、

往かばたれかは君棄てん、

とく往きたまへ去りねかし。

かをれる草は荒き野べ、

深山の奥にも生ふぞかし、

ふるさどばかりおもふなよ。』

行く路くらくまどひたる、

あはれ世の人なさけなや、

我がよしあしはいかにして、

たれかは知らん今の世に。

好み嫌ひはあるならひ、

めづらしどにはあらねども、

黨人ばらのすることぞ、

かはりてことに見ゆるかな。

にほへる蘭をば佩びずして、

腰にむすぶは艾(芳しからぬ草、また白蒿といふとぞ)の草、

かぐはし申椒臭しといひて、

にほひ囊につちを盛る。

草をも木をもわかぬ眼に、

離 塵

いかでか見えむ石と玉。

* * * * *

靈氛が占につくべきか、

思ひはいまだ定らず。

聞くこの夕御空より

巫咸(殷の中宗の時、今之を假る)が降り來るとか。

にほへる椒としろたへの、

玉なす米を前にすゑ

うらなひたべとねぎいのる。

空より降る百つ神、

九嶷(舜の葬られしといふ山)の神もうちつどひ、

ともに迎ふる天の神、

神の靈光きらめきて、

我にのたまふ聲すなり。

『いましは天の上までも、

地の底までもへめぐりて、

同じ心の君を得よ。

むかし湯禹は明君にて、

賢き臣下を求めんと、

湯は摯(伊尹が名)を得つ禹は咎繇、

ともに陰陽調へて、

天下を安く治めたり。

まこと善美をそなへなば、

君が宮居にかよふとて、

などかなかだち要すべき。

殷の傳説(殷の高宗即ち武丁の賢臣)は傳巖(地名)にて、

路を修理せし罪(が人)が人、

武丁が夢にあらはれて、

つひに信用あつかりき。

周の呂望(太公望なり)は渭水(川名)にて、

釣を垂れたる隠君子、

文王の夢にあらはれて、

屠獸の刀を棄てたりき。

また牛飼ひの甯戚(衛の人、齊の桓公に用ゐらる)は、

牛かひ歌をよすがにて、

齊の桓公に擧げられき。』

あゝこの歳はまだ暮れじ、

君に遇ふ日のなからめや。

もしやそれとも陽炎(かげろう)の、

春よりさきに鞆(ていげき)の、

鳴き聲たてゝ百つ草、

千萬草を枯らさすや。

ゆらゝに佩ぶるうすの玉、

かの人々に蔽はるゝ、

黨人ばらのまことなき、

ねたみて玉をくだかんか。

うつるはやすき歳月に、

いつまでかくてあらるべき。

むかし植ゑにしかをりぐさ、(屈原自ら扶植せし人々をいふ)

今はかをらすなりはてぬ。

蘭芷(蘭)の若葉香はうせて、

蕭(艾)ども艾(艾)どもえわかす、

茎蕙(蕙)化して茅(茅)となる。

みなこれ君が善美をば、

好みたまはぬ故と知る。

たのめておきし蘭(人の名とするはわるからん)さへも、

離 騷

容ばかりに實はあらず、

世にありふれし芳草と、

ひとつにあらんためのみに、

かをりを棄てゝ彼につきぬ。

椒(人の名とするはわるからん)ごおもひしは佞人よ、

よこしまごぞいごおほき。

椒(ゲミ)は摘まれて香囊(かぶつ)に、

入らんとばかりあせるなり、

かをりを惜しごおもはめや。

流れに従ふ世のありさま、

うつりかはるぞ常ならむ。

椒蘭(椒)すらもかゝるさま、

江離(江離)揚車(揚車)はなほさらよ。

身にそなはりてうるはしき、

かをりを棄て、かくなるを、

よろしき姿とおもふかや、

ころもにおふるかをりぐさ、

かをるがゆるにたふときを。

あゝ我ひとり我が衣に、

腰につけたるかをりぐさ、

にほひはうせず香をこめて、

をはりはつべき時ぞなき。

かざれる花の萎えぬまに、

路ゆく足をどゝのへて、

あまねく上下をみめぐりて、

ひまにまかせて吾が戀ふる、

かのたをやめを求めなむ。

* * * * *

靈氣が言に従ひて、

いざ吉日にたびだたん。

眞玉の枝を手折りもて、

お膳にしきて白玉の、

乾しいひ盛りて糧となす。

象牙のながえ玉くさび、

車を龍にひかせつゝ、

あだしこゝろの人おきて、

遠きところに我往かむ。

高さ一萬一千里、

玉の樹生ふる崑崙の、

山のかなたを尋ねんと、

たどる長路のはるけしや。

むらがる雲霓おしなびけ、

百玉千玉さや〜に、

朝たちいづる天津（東極に在り、箕星と斗星との間に横はる天の川なり）

ゆふべに西のはてにつく。（原文に西極とあり）

龍虎の旗を背に負ひて、

左右に隨ふ鳳凰は、

青雲凌ぎ舞ひあがり、

空しづ〜と翔りゆく。

いつか流沙（崑崙山より出る河の末なり）の河わたり。

赤水（崑崙山より流る川）のあたりさすらひて、

帝少皞（四方を司る神）にことを告げ、

龍蛟（龍の神）らをさしまねき、

わたりに梁をかけたす。

おちつくさきは西海ぞ、

離 騷

きめても路の遠ければ、

たびの苦しさいかばかり、

後にしたがふとも車、

わきの小みちにしばしごめ、

我は不周（崑崙山の西北にありといふ山の名）にたちよりて、

左にまがり進みゆく。

前後につやく千乗の、

車の輪だちどどろかし、

玉のくさびをうちそろへ、

齊しく馳する天のうへ。

八つならびたる龍頭、

くびきの下にいくうねり、

天の錦かあかねさす、

豊旗雲をなびかしめ、

いそぐこゝろをさしおさへ、

ゆるくゆけば吾が心、

はるかに高く浮きあがり、

追ひつくものなきこゝち。

「九歌」(萬の)の樂をかなでつゝ、

「九韶」(舜の)の舞をたちてまひ、

下界離れし天のうへ、

ひまにまかせて神遊び。

さすがに光明かゝやける、

天には陟のぼれたちまちに、

彼のふるさを見おろせば、

なにを悲しむ吾がしもべ、

わが駒さへもうれはしく、

物思ふかやたてがみを、

左右にまげてゆきかぬる、

あがきをこめてゆきかぬる。

結びの辭、

「とても已みなむ國の内、

我を知るものさらになし、

いかでか戀ひんふるさを。

美政を爲さん友はなし、

いざたちさりて彭咸が、

水の住居すまひにともなはん。」

屈原の「九歌」

譯文

「九歌」を譯するにあたりて

屈原の製作は今傳はるもの離騷 九歌(十一

篇) 天問 九章(九篇) 遠遊 卜居 漁

父 の二十五篇あり。

九歌十一篇のうち終りの國殤 禮魂 二篇は

恐くはもと九歌中の者に非ず、單に九歌の後

に書き添へられしものなるべし。故に九歌は

九篇にして一、東皇太一 二、雲中君 三、

湘君 四、湘夫人 五、大司命 六、少司命

七、東君 八、河伯 九、山鬼 に止まれる

ならん。今舊傳の如く之に十、國殤 十一、

禮魂 を添ふと雖も、本來此の二篇は切り離して觀るべきものとす。

舊說によれば楚の南郢(郢は楚の都)沅湘地方の人民鬼神を信じ祭祀を好む。屈原その間に放逐せられて其の歌舞の樂章の鄙陋なるを惡み、此の歌を作り敬神の意を述べ、且つ托して自己の冤結の恨を詠せるものなりといふ。

余案するに屈原必ず荆巫の歌誦の聲調を採りて此の歌辭を撰せしものならむ。

歌辭の解釋に至りては諸說紛紛として適従する所を知らず。余は訓詁は務めて王逸に依り

たるも必しも盡く之に従はず。文義の脈絡、篇章の關係、に至りては朱熹及び汪瑗の説により啓發せられたる處多し。然れども亦必しも朱汪二氏に従はず。余が解の古人に合せ者は古人の説を奉せるなり、合せざる者は余一人の臆解なり。讀者其の誤あるを知らば幸に指教を惜むなからんことを。

歌辭解釋の最も困難なるは文中の自他の關係なり。之を明瞭ならしめざれば全篇盡く暗中摸索に終はらむ。故に余は歌辭の肩膀に往々之を唱る者の誰なるか、唱へられたる場合の如何なる際なるかを明記せり。又歌辭中にも之なくしては意義分明を缺く際には或る句を補足し、或は字句の位置を變換せり。神體の

性質は各篇題下に附記す。

一、東皇太一

東皇とは東方を掌る帝なり。太一とは天の尊神たる太一星なり。舊説によれば東皇に配して太一を祭り、その祠は楚の東にあり、故に東皇太一といふ。案するに祠楚の東にありといへば是は楚の都に於て祭られし神にして必しも沅湘地方屈原遷謫の郷に於ける祭神に非るなり。

【巫の叙語】

けふの吉き日の良き辰に、

つゝしみて天つ神東皇太一を指すをたのし
ませたてまつらばや。【以下叙事】

玉の鐔つばがしらまばゆき

長き劍をなでさすれば、

琳琅りんらうの玉たまさやらりさらり。

瑤たまの席みせに玉の瑱をもしおけり。

手にごるものは何々ぞ、

瓊たまの小枝さだに芳かほしき草。

蕙かきりくさもて蒸したる肉を蘭らんの藉したしきにのせ、

桂けいの酒さけと椒はしかみの漿つくりかづとを御供物みけとす。【

枹つづみを揚げて鼓つづみをうち、

節せつを緩ゆるうして安らかに歌ひ、

竽よさらのこ瑟せきをつらねておほひに倡うたふ。

屈原の『九歌』譯文

靈たまうつくしくよきぬきたり。
芳かほかんばしくして堂たかに満みたり。

五ついろの音ねさかんにしげくあつまり、

神かみの君み 巫まじの身に降りたる神かみなり にごやかに樂たのみ

康やすんじたまふ。【

二、雲中君

雲中君は豊隆とよぶ雲の神なり

【巫のいてたち】

蘭らんの湯ゆに浴ゆし花はなの芳かほに髪かみ洗あらひ、

杜若かきつを飾かざる五色ごしきの衣え。

【雲の神天より降り巫にのりうつる】

高たかき空そらよりうね〜と、

降り來くだたまふ雲くもの神かみ。

きら／＼にかゝやく神の御光

神靈の行動を示すときには
火焰をあぐるものと見ゆ

已むてふことのあらなくに。

いで玉敷の宮にやすらひ、

月日と光をたぐへなむ。

天つ御神の衣服きて

龍の引くなる車を驅り、

天翔してさまよはむ。」

【雲の神天に向ひて去る】

降りゐたまへるうつくしの神、

疾く舞ひのぼりたまふ雲のかなた。

見おろせど見きはめかぬる中つ國

四方の海まではろ／＼に

さしてゆくてのはてもなき。」

【観者の意をうたふ】

ためいきつきて君をぞこふる、

あゝうれはしの吾が心や。」

三、湘君

湘水の神なり。湘君湘夫人に關しては古來諸説あるも、單に湘水の神と其の夫人として考ふるを古義なりとすべし。堯の二女にして舜の妻たる娥皇・女英に關する説は今總て之を取らず。此の「湘君」篇と次の「湘夫人」篇とが互に連關せる作なること明の汪瑗の説く所に於て余は其説を是とす。

【男巫湘君に扮し、女巫湘夫人に扮し出て来る。男巫のぶ】

君湘君より湘夫人をさす立ち去らずためらひたまふ、

中つ洲すに誰をか待ちたまふや。

うつくしくかほよくして修飾もふさはし。」

いでや我、桂の舟に乗り、

沅湘二水の名をして波なく、

江水をしておだやかに流れしめむ。」

誰を戀ひてか参差 洞窟なりを吹く。

夫の君湘夫人をさすを望めどもいまだ來ま

さす。」

【湘君立ちゆくさま】

龍たつに舟ひかせて北に征き、

めぐりて洞庭湖の名のほとりにさま

よふ。

屈原の「九歌」譯文

薛荔まきのかつらを舟壁ふなかべにうちぬり、蕙かきりくさの綯たまものし。

蓀かきりくさの橈かきりくさ、蘭かきりくさの旌はたたて

落陽地名の遠つ浦を望み

大江に横はりて靈光ひかりを揚ぐ。

【湘君の舉動に伴ひて神火を燃えあがらしめ其の威靈あることを示す】

靈光ひかりもいまだ揚げ已まぬに、

君が侍女こしもとさへ思ひひかれて余がため

にためいきす。

吾涕なみだ潺湲せんげんと横よこさまに流れ、

君を思ひていたみいたむ。」

桂かきりくさの權かきりくさ蘭かきりくさの榘かきりくさ

氷をうちわれば積れる雪のごとし。

【補】「吾が身のうへ何にかたどへむ」

薛荔まきのかつらを水みづの中に采り、

芙蓉はらすのはなを木末こきぶに攀とらんとするに似たり。

思ふ心の異ればにや媒なかつちのみ心いため、
情愛せうあいいたらねば軽かろくしくなかたえぬ。

川の瀬せさら〜。

龍たつの翼つばさひらり〜。

交りまめやかならずして怨うらみみ長し。

期約ちやく信しんあらずして「間暇いんげなし」と告げ

たまふ。」

朝あさには江わの阜をみに馳をせかけり、

夕ゆふに節ふしを北きたの渚なづさに弭とどむ。

鳥は屋根やぐらの上にやどり、

水は堂たかやの下したをめぐる。

わが玦かけだまを江わの中に捐すて、

わが佩おびを澧水れいすいの浦うらに遺のこし、
かくはしき洲すの杜若かきつを采とり、

せめては君きみが侍女こしもとに贈たまらんとおもふ。

時ときひとたび去りては再び得えべからず、

いさゝかこゝにさまよひつゝ、
ゆたにあそばむ。」

〇四、湘夫人

【女巫湘夫人に扮す。男巫湘君に對してのぶ】

帝みかどの御子みこ 湘夫人しやうふじんより 北きたの渚なづさに降りわたたまふ。

見みはるかす目もとほ〜に吾が心を

うれひしむ。

秋の風そよぎ

木の葉おち〜り洞庭の水波だつ。」

蘋あさどの花真白ましろくながめにつらなる。

佳まきひと人ひと 湘君しやうきんを 期約ちやくせんご夕ゆふの陳設ちんせつす。

【補】「吾が心ま〜ならぬ、何にかたご

へむ】

をか鳥とりいかで蘋あさどのうちに集つどへる、

魚いさなの網あみいかで木の上に張り設けむ。

【補】

沅えんには芷しあり、澧れいには蘭らんあり、

【補】「吾が物思ものおもひもかくぞしるき」

吾が君きみ 原文げんぶん公子こうしとあり 湘君しやうきんをさす を思おもへども口には

言ことはじ。

おぼつかなく遠とほくながむれば、

水の流ながれのさゝやくを觀みるばかり。

【補】「吾が迷へるさま何にかたごへむ」
麋び鹿びのた 庭にわの中なかに來きるごも何かせむ、

蛟水きやうすいのほとりに來きるごも何かせむ。

朝あさにわが馬うまを江わの阜をみに馳をせ、

夕ゆふに西にしのみぎはにわたる。

佳人まきひと 湘君しやうきんを 子こを召よしたまふごぞ。

いざや、車くるまを馳をせて偕ともに逝ゆかん。

【以下湘夫人胸のうちのねがひ】

いゆきて、室むろを水みづの中に築たき、

荷かの蓋かきもて之これを葺ふき、

蓀かきの壁かべ、紫貝むらさきの壇だん

芳かほばしき 椒ししかみをほどこして堂たかやを成なし、

桂けいの棟むね蘭らんの寮せう

辛夷しんいの楣ひし 葯やくの房ぼう

薜荔を結びて帷となし

蕙をつんざきて連ねて戸張りとし、

白玉を席の鎮とし、

石蘭をしきて芳とし、

荷の屋を芷もて葺き、

之に杜衡をめぐらし、

百草をあはせて庭二實て

芳しき馨の廡門を建てばや。」

【九疑山の神々湘君を迎へて去る】

九疑の神みだれむらがりて來り迎へたまふ。

ふ。

神たちの來りたまふこと雲のむらがるがごとし。」

【湘夫人自語】

わが袂を江の中に捐て、

わが襟を澧水の浦に遺し、

汀洲の村若を擧り、

遠方人に贈らばや。

時ひとたび去りては再び得べからず、

いさゝかこゝにさまよひつゝ、

ゆたにあそばむ。」

五、大司命

大司命は人の壽を掌る天の星なり。

朱子曰く、天の三台上台中台のうちなる上台の二星をいふと。少

司命について朱子曰く、天の文昌

宮六星のうち第四星をいふと。或

は曰く、司命は生死を司り天を輔

けて化を行ひ惡を誅し善を護るものなりと。大・少司命は其の果し

て何の星をさすものなるや詳にせ

ざるも其の人の壽を掌る星なること

は明なり。此の篇の本文によれば

大司命は男性、少司命は女性に

屬す。此の二篇亦互に相連關して

問答體を爲すこと猶ほ「湘君」の

「湘夫人」に於けるがごとし。

【男巫大司命に扮し出て來り獨語】

我、つむじ風を先驅とし、

雨の神をして塵埃を清めしめ、

天の岩戸を推し開き、

屈原の『九歌』譯文

玄雲に乗りて今ぞいでたつ。」

君少司命をさすははや天翔りつゝ下りたまふと

や。

空桑山名の山をこわて君に従はむ。

さはなる國中

人の壽命のいかで我が手にか在る。

天翔るごもいづくにかいたらむ、

清らなる氣に乗り陰陽をあやつり、

君と疾く

天帝を迎へて天が下の

群山にゆかばや。」

天つ衣のもすそははらかし、

玉の佩まばゆく

或は晦く或は明く

【補】「ゆゑすぐるこゑ」

そを我が爲すわざと誰かは知らむ。」「
瑤たまなす麻あさの白花しらばな手折りもて、

わかれゐる人少司命におくらばや。

いつしか年のふけゆくに

君にそはすていや遠さかる。」「

龍たうの車をなりひかし、

高く馳せて天そらにいたり、

桂枝を結びてしばしたゝすむ。

あゝ思ひまさりてうれはしや。」「

あゝうれはしや、いかにせむ。

せめては今のまゝにして、

老いと別れのあらざらむ。

人の壽命いのちの定數さだめありとも

心變りをたれか爲すべし。」「

六、少司命

【女巫少司命に扮し出て來り獨語】

秋あきの蘭らんや麋蕪めんぐ

堂たかやの下したに羅つらなり生なひたり。

緑きよの葉素はき枝えだ

芳かきかんばしく予われに襲つけり。

世よのみな人もうつくしく

戀こひふる女をんなを有あつものを

なにどて君原少司命は愁しみひ苦しむ。」「

秋あきの蘭らん青青せいせいとして

緑きよの葉素はの莖こゝろあり。

堂たかやに満みてる美人びじんのうちにて

君忽ち余われと目くばせしたまふ。

【少司命愁歎す】

入るにもいひたまはず、

出づるにもいごまごひしたまはず、

つむじ風かぜに乗り雲くもの旗はたたてゝ去りたまふ。

樂たのしみしきは君きみと見識けんしりしより樂たのしみしきは

なく

悲かなしきは生なまきながら別離わかるゝより

悲かなしきはなし。」「

【大司命のさまをのぶ】

荷はらの衣きつけ薫かきの帯おびはきたまひ、

忽たちに來りてたちまちに逝いき、

夕ゆふに天帝あまのつみの城野しろのに宿とどり、

八重雲やえぐものかなたにて誰たれをか待まちちたま

ふや。」「

君きみと咸池あまのうみの名なに沐かみせんごおもへど、

君きみひとり髪かみを朝日あさひの岡おかに乾かわかしたま

ふ。

吾われがうつくしの人ひとを望のぞめども

來りたまはず、

風かぜにうちむかひて悦よろこばれて

歌うたのこゑ張ひりあぐ。

【このとき大司命劍をふるひ少司命を抱きかゝへるさます。

少司命のぶ】

孔雀くわんこの羽はの車蓋くるまがさを張ひり翠羽すいぶの旗はたたて

天あまつみそらに登のぼり

彗星すいせいをうちらはらひ、

長劍ながけんを抜きはなちあけて、

たをやめ少司命をいづく。

【少司命贊美す】

吾が君大司命こそは人の則たるにふさは

し。」

七、東君

東君は日の神なり。

【巫日の神に扮す】

いまさしのぼる初日子の影、

扶桑ひんがしの方よりおぼしを照らす。

夜もしら〜と明けはなれたり。

吾が駒かいなでいづこにか驅らむ。」

雷いかづちの車くるまに乗り、龍たつに轅なぐさを引かせつ、

雲の旗はたゆたになびかしめ、

天つみそらに上らんと

欲りせど思ひあまりては

うちなげかれて胸のうち

思ひなやみてたもとほる。」

【觀者の意をうたふ】

あ、おもしろの絲竹

おもしろの鐘鼓

うつくしの舞ひ人

觀るひとこゝにやすらひて

家路の歸りも忘れぬべし。」

【以下音樂歌舞を叙す】

琴絲をあげ張り、鼓うちかはし

簫の音にあはす懸鐘のおと、

觥こころを鳴らし竿よきらのを吹き、

すぐれてかほよきかんたす靈保の

立ち舞ふすがた輕らかに

しばうつりする翠鳥の

羽ふるさまのいとたへに、

詩のかす〜うたひいで、

舞のいくむれもろともに、

節にあはせてかなづれば、

日かげかくすまで日の神のむれ

天つそらより降り來たまふ。」

【日の神天より降る、是に於て巫と神とは合するなるべし】

青雲あそぐもの衣ころもきて白霓しろにじの裳もすそはき、

長き箭を擧げて天狼の星惡將のを射、

眞弓手まゆたばさ挟みかくれ降り、

北斗ひきよせて桂の漿つくりみつを酌み、

屈原の『九歌』譯文

轡たづなをこりて高々に馳せ翔り、

影隠りつゝ、東へぞ行く。

【右日神邪惡を除きつゝ立ち去るさま】

八、河伯

河伯は九河の神なりといひ又黄河

の神なりとも稱せらる。更に其の

名馮夷なりといはる。

【巫と河伯二にして一、一にして二、主觀的に一にして客觀的には二】

【巫】

汝いましと九河に遊べば

大風起りて水の波わきたつ。

水の車くるまに乗り、荷葉はらすばの車蓋くるまがけをかけ

二匹の龍たつに車ひかせ鱗うろこを驂ことす。」

崑崙に登りて四方を望めば

心まひあがりて大らかなり。

日暮れかゝれども家路を忘れ、

浦わのはてを寝ねすしておもふ。」

鱗もて葺ける屋根、畫龍の堂、

紫貝もて築ける門闕、朱丹ぬりの

宮。

水の中にて君何ごとをかしたまふ。」

白竜に乗り文魚を従者どす。

汝と河の渚に遊べば

氷の解け屑みだれて流れ來も。」

美人を汪濊に従ひ河伯を南浦に送り、

君と手とりかはして東に行けば

波滔滔として來り迎へ、

魚の群れつきゝに從ひ來て予を送

る。」

九、山鬼

山鬼は山中の怪神なり。

【甲の巫山鬼に扮して主人となり、乙の巫公子に扮して客となる】

【山鬼は巫自己の狀をのぶ】

山のくまわに人のけはひ、

まさきかつらの衣きて、

ねなしのかつら帯とせり。

ほそめに見やるまなざしや

笑みたゝへたる口のよろしさ。

かくうつくしき我ゆるに

君公子もや我を慕ふらむ。」

赤毛の豹にうちのりて、

虎斑の狸を従者につれ、

辛夷の車驅りいだし、

桂の枝を旗となし、

石蘭を被り杜衡を帯び、

馨れる草を折りとりて、

吾が思ふ人公子におくらばや。

【山鬼獨語す】

暗き篋にわびおして

ひねもす天もえぞ見えぬ。

たどる山路のけはしさに

後れてぞ來した一人。」

ひとり立ちたる山のいたゞき、

雲むらゝと下に湧く。

屈原の『九歌』譯文

晝さへくらき眞の闇、

東風吹きおこり雨そゝぐ。

君ひきどめてこゝにやすらはしめむ。

歳ぞくれゆく、誰か我をわかやがし

めむ。」

一どせに三たび咲くてふ瑞芝草、

山のいづこに生ふるらむ。

樹にはひかゝるつたかづら

つみかさなれる石のむらがり。

などかきまさぬ吾が戀ふる君、

家路忘れて君をうらむ。

君とて我を思ふらむ、

訪ひくる間暇のなきにやあらむ。」

我、この山に家居して

杜若の花を佩びものとし、
巖間の清水掬び飲み、

松柏の蔭にさすらひつ。

君が心のいかならむ、

まことに我を思ふとや、

さすがに我は信じかねつ。」

とやろにひやく雷の音、

をぐらく吹きしきる雨のあし。

きと叫ばふ夜の猿。

風の音ざわ／＼木の葉さや／＼。

君忘れかねてものおもひする。」

十、國殤

國殤は戦死者の神靈を祭る歌にし

て、招魂の詩の最古のものなり。

犀革の甲を被て吳の戈を操る。

車は轂を錯へ、小太刀もてちかづ

く。」

旌は日を蔽ひ敵は雲のごとし。

矢は交々墜ち壯士は先を争ふ。」

味方の陣より躍りいで己が列をふみこゆ。

左の驂は蹙れ右なるも傷つけり。」

車の兩輪を土埋めにし四馬を繫ぎどめ、

玉の袍をひきよせて鼓うちとやろか

す。

天の時我に利あらざるも稜威は奮ふ。

死にものぐるひにた／＼かひて

屍を原野にさらさむ。」

出ては入らじ、往きてはもどらじ。

野もせの廣さよ、路のはるけさよ。」

長劍を帯び秦の弓を手挟む。

かうべをたちきらるゝとも心はやま

じ。

勇ましとも勇まし、武しともたけし。

我がこのてごはさ、

やはか敵にをかさるべき。

身は死すとも神は靈灼に

魂魄は毅くして鬼の雄たらむ。」

十一、禮魂

禮魂は平和に終りを遂げたるもの
を祭る歌なり。

此篇の成禮分會鼓句下の王逸注に

祠祀九神云々の語あり、逸或は此

を以て東皇太一より山鬼に至る九

篇の亂辭と見たるか。汪瑗は此篇

を他の十篇の亂辭なりといへり。

今其の亂辭なりや否、決定すべか

らす。余は「國殤」と共に單に九篇

の後に附記せられしものならんご

おもふ。

禮を成して鼓とくうち、

香れる花もちつたへて代る／＼舞ふ。

顔よき女のわらは倡へてゆたけし。

春は蘭もち秋は菊かざし、

いつきまつらむ萬代までに。

先秦文學に見ゆる招魂

招魂を説くにつきては昔の人は魂といふものを如何に考へしかを知る要あり。魂は生死ともに之をいふももとは死者につきいふが如し。

「説文」によるに魂、陽氣也、从鬼云聲、とあり、更に鬼の字をみるに鬼人所歸爲鬼、从人、象鬼頭、从ム、鬼、陰氣賊害、故从ム、とあり。即ち鬼の形にて、人の上に鬼の頭の象形を置き其傍に利己の表號たるム(私)を附けたるなり。「尸子」には古は死人を歸人といへりといふことを記せるが、鬼即ち歸人なり。之によれば人死して害を爲すものが鬼なり。此の鬼に云を加へて魂とせるは如何。

云の聲とすれば魂の音はコンに非ずしてウンなり。魂は魂と記するを正しとすといへり段氏、此の云は單に聲を示すものなるや、意義をも伴ふものなりや。それには魄の字と併せ考ふるを要す。

同じく「説文」に魄、陰神也、从鬼白聲、とあり段玉裁注に「孝經説」を引きて、孝經説曰、魄、白也、白、明白也、魂、芸也、芸芸動也、といひ、又魂下の段注に「白虎通」を引きて、白虎通

曰、魂者云也、猶云运行不休也、といへり。之によりてみるに魂字の云も魄字の白も聲を示すと共に義を伴ふとすなり。云の字のみをみるにこれは雲のことなれば或もの、立ちのぼる義を之にて寓せしには非るか。

右は單に文字の説明なるが此字に附帶せられたる思想は先秦に於ては如何なりしか。

魂魄についての古き解釋は「左傳」昭公七年に見ゆる鄭の子産の説なるべし。その説にいふ、

人生始化曰魄、既生魄、陽曰魂、用物精多、則魂魄強、是以有精爽、至於神明、匹夫匹婦、強死、其魂魄猶能馮依於人、以爲淫厲、

と。此説及諸家の説により察するに、魄は形質其物には非るも、形質に屬するものが魄、形質によりて靈妙なる作用をなすものが魂、或は魂を氣に屬せしむるものあり、といふが如くに見ゆ。之を圖示すれば

鬼 魄 形質 陰
神 魂 氣 陽

の如きか。「易」の繫辭傳に精氣爲物、遊魂爲變、といひ次に知鬼神之狀といへり。之も略々似たる思想にてたゞ魂の範圍を人間以外にも及ぼしたる如くに思はる。

魂は天に歸し魄は地に歸すと考へられたり。禮記の郊特性に魂氣歸于天、形魄歸于地、故祭、

求諸陰陽之義也、といひ、般人先求諸陽、周人先求諸陰、といへり。檀弓に延陵の季子^{子思}が其子を哭せるを記せるには骨肉歸復于土、命也、若魂氣、則無不之也、とも見ゆ。少くも周代にはかくの如く考へられたるなり。

魂魄はまたよき意味に於ける鬼神の考と合致す。

「禮記」の祭義に宰我と孔子との問答を記し、孔子が鬼神のことを語れる條もその言辭には出入あれども趣意は前述の魂魄の考に近し。

さて魂は靈妙なる作用ありそれが死後も天に歸して滅せざるといふ考あるによりて之を招くといふことも起るなり。

招魂といふ事實は何時頃より行はれしか詳ならず。

「禮記」の禮運に孔子が言偃に禮のことを語れる中に、五帝より三王に至る間に孔疏に禮が質素より漸く文めくに至ることを話す條あり。曰く

及其死也、升屋而號、告曰臯、某復、然後飯腥而苴孰、故天望而地藏也、體魄則降、知氣在上、

と。本文「某復」下の鄭注に「招之於天」といへり。又「天望」の孔疏には謂始死、望天而招魂、とい

へり。是、招魂の文字は之なきも其の事實あるの初なるべし。當時にありては單に天に向ひて其人の名を呼ぶに止るなり。

「禮記」の此文は前後の連絡上或は前に脱文あるやも知れずと思はるゝものにして何時代のことをさしてとけるや不分明なるも可なり古くよりかゝることのありしと見て可ならん。

古代に就きて考ふるに夏も殷も鬼神を敬したり。事は「書經」に見ゆ。しかし夏殷の人は鬼神を祀りしといふことなるが是は祟をなすものとしてならん。孔子の鬼神を遠くるも此の意味に於けるものをいふならん。僞古文「伊訓」に夏の先代の有徳なりしことをのべ

百川鬼神、亦無不寧、墨子明鬼篇所引に本く

といへるは夏にて鬼神を祀りしを見る。同じく「伊訓」に殷のことをのべ

敢有恒舞于宮、酣歌于室、時謂巫風、墨子非樂上所引湯官刑有之の文、

の語あり。般には鬼神に事ふる所の巫あるを見る、巫咸等の名さへも之あり。

人間神を如何にしてよび迎へしかといふに虞書の「益稷」に夏擊鳴球、搏拊琴瑟以詠、祖考來格、とあるは有虞氏の宗廟に於て神を致すの法なり。夏殷も亦先づ音樂を以て神を致せしものに似たり。

ふことも之ありしが如し。後世唐人も之を信じたりとみえて初唐の四傑の一人楊炯の幽蘭賦に至若桃花水上、佩蘭若而續魂、竹箭山陰、坐蘭亭而開宴、の語あり。

招魂と女巫との關係は古來多くは關係ありとせらるゝもその有無は定むべからず。

「周禮」の女巫は掌歲時祓除釁浴、早暎則舞雩、とあり、鄭注に祓除は如今三月上巳、如水上之類、といひ釁浴は謂以香薰草藥沐浴、といへり。もし關係ありとすれば招魂にたづさはりしものか、釁浴するものこそせば「漆洧」の蒲・勺藥・も之に關係あるべきか、韓詩にては蒲を蘭なりとし、勺藥を離草と説く、別離に際し贈る草といへり。此等は浴に用ふるならんか。「漆洧」は鄭の厲公四紀前六七〇年代の時のものとせらる。人の行樂するとき招魂するは異様なるが如くなるも後世清明に上塚の習俗あれば必しも異とするに足らず。

屈原四紀前三〇〇年代 作る所の騷賦の中には屢々「靈」といふことあり、靈均・靈脩・皇剡剡其揚靈兮・橫大江兮揚靈・これ等はや、別義に屬するが、靈は神又は巫として用ひらるゝことあり。此の時の靈は二重人格を有す。一面は巫としてなり、一面は其の代表する神としてなり。九歌の雲中君の靈連蜷兮既留の句下の王逸の注に楚人名巫爲靈子、といへり。九歌に見ゆる靈は始は巫としての靈なるが後には神がのりうつりてからの靈にして神と同物なり、招かすして神となるなり。其の

有様は「雲中君」に最も明かなり。尸は明に祭如在の考にて人が立てたる代理者なるが靈においては餘程神秘的の考が加はりをるやうなり。

周末に近く最も明かに文學に於て招魂をいへるものは屈原及其徒なり。屈原の弟子宋玉は「招魂」を賦して屈原の魂を招く。「招魂」の中には天帝が巫なる陽といふ者に命じ「下界に人あり、その魂魄離散せんとするにより汝筮して之に與へよ」といふ。この筮するといふは筮して魂の所在を求むるなりといふ。巫陽は之に答へて「魂を招くといふことは掌鑿の官の職とる所なれば上帝の命なれども従ひがたし」とて辭す。しかし巫陽は遂に天より下りて屈原の魂を招く。「周禮」の占夢には招魂のこと見ざるも巫陽の言によれば楚にては掌鑿の官ありてそれが招魂を掌りしと察せらるゝなり。「招魂」によれば或は女巫も之に關係せしか。其の要旨は東西南北上下皆魂の居るべき地に非ず、故に速に故居なる楚の都に返れ、返れば衣食住何の不足もなく美なる快樂を極むることを得といふことをのぶ。

又屈原の弟子景差は「大招」を賦し略々同様の意味をのべたり。大招は王逸は屈原なりとし又或は景差なりとし決する能はずといへり。「招魂」・「大招」並に生者の魂を招くなり。生者の魂を招くこと唐の杜甫の詩に

は厭その
例あり、

屈原の九歌の中に「國殤」及び「禮魂」の二篇あり。後者は無事に終りを合くせし人を祭り、前者は戦死者を祭れる歌なり。是は招魂の文字は之なきも意味は明に招魂なり。後者の禮魂と題せるにても知るべし。已に歌あれば其の祠ありしことも知らる。「國殤」は戦死者を弔ふ歌としては恐らくは支那最古の、又最も雄渾悲壯なるものなり。余謂ふに周には祭祀の禮あり宗教的儀式備はれる如くなるが獨り戦死者に對する文辭について聞く所少きは何ぞや、例へば殷に克ちしときの牧野の戦死者を弔ふ歌の如きものを製するも可ならずやと。或は曰く周頌は是死者を祭る詩に非やと。然れども周頌は祖先を以て天に配し、人間を超越せるものとして祭り、たゞその徳業をたふふるのみなり。周詩の中に何の篇か人の死を人の死として哀みたるものあるか。秦人が「黃鳥」を賦せるは三良の殉死せるといふ特別の意義あるものをうたへるなり、死を死として傷めること見ざる所なり。案外に北人は死といふことについて淡泊なりしか。未知生、焉知死、の流儀なりしか。抑も偶然傳はらざりしか。獨り屈原の「國殤」に至りては實に能く戦死者の忠勇なる精神を發揮して遺す所なし。初には戦争して奮て死することあり。末段に

帶長劍兮挾秦弓

首雖離兮心不懲

誠既勇兮又以武

終剛強兮不可凌

身既死兮神以靈

冤魄毅兮爲鬼雄

とあり。死しても猶閻羅王の長となるの氣概を示せり。

「詩」の秦風「無衣」も余は義勇奉公の精神を最もよくうたへる作と考ふ、惜いかな古來多く解釋に誤らる。秦は西戎の血ある故此の種の詩あるが楚も南方の蠻ゆゑ此の如き作あるか。之を野蠻といはゞいへ、支那に於ては稀に見る所の勇武なる思想なり。

漢以後樂府に「戰城南」あるも敗亡を傷む作なり。歷代之に擬せるものはあるも忠死者を弔ふの雄篇は見ざるなり。唐の太宗に「傷遼東戰亡」あり、それには殉命有餘悲とほめてあれば死者以て瞑すべし。

我國にては「山ゆかば」の如き忠誠の歌はみゆれども忠死者を弔ふの國歌ありや否、余は國民として忠死者あるときは大に之が魂を招き之を慰すべき大雄篇の現はれんことを希望す。

司馬遷と賦

司馬遷は餘程賦を好んだ人だと思ふ。なせかといふに賈誼の傳を書て屈原を弔ふ賦を載せたり鴉の賦を載せたりしてゐる。弔屈の方は屈原と合傳といふ關係もあるから無理でないとしても鴉の方は如何なものであらうか。「漢書」の賈誼傳には治安策は全部掲げてあるが賦は一つも録してない。又た「史記」の司馬相如の傳には子虛、上林、哀二世、大人等の諸賦が載せてある。そのうへ同傳には論巴蜀檄、諫獵書、封禪頌なども見えてゐる。まるで相如の文鈔からできてゐる。こんなことは歴史の體裁論から言へば不都合極まるものであらう。併し司馬遷といふ人がひどく文學好きの人で賦は固より其他の文章も名文章となるどころも棄てにくいので記載の不自由な當時の代にどうか其を後代までのこしたいといふ婆心があつてしたものと思れば穴勝ち體裁の一方からのみ責め立てなくてもよからうかと思はれる。三王世家の策文なども彼が愛文の一例と見られる。該世家の本文は缺けたさうであるが「太史公曰」の處に文辭爛然甚可觀也とあるから褚先生が録した通り遷自身も斯の策文は必ず収録したに相違ない。漢書藝文志を見ると司馬遷賦八篇とあるから彼は他人の賦を愛したばかりでなく自身でも作つたものとみねる。遷以外にも陸賈、賈

誼、董仲舒、劉向等は皆、賦を兼ね善くした文章家である。してみれば西漢の大文章家は大抵散文を善くすると同時に亦た賦をも善くした者であると言ふことができる。

司馬遷、賈誼等は賦を善くしたけれども叙事、議論の文章では句を散することを主としたから謂はゆる西漢の「古文」が起つた。司馬相如、揚雄になると賦を善くして飽くまで賦の形式を利用して句を對せしむることを主としたから謂はゆる「駢體文」が起つた。引續いて東漢では駢體流が勝を占め降て六朝の四六體とまで變遷した。古文家の方では之を文章の墮落衰頹と言ふのであるが其は一の議論に屬する。ともかく溯つて考へると古文家として神の如く崇めらるゝ司馬遷も賦家であり、賦をも賦家の文章をも深く愛したものである。

鄙見を以てすれば古文駢文は互に扶くべきもので仇敵視すべきものではない。否、一步進んで眞の古文を善くするには駢文及び賦を學ぶことが必要だと考へる。自分は固より駢文から古文が出たとは思はず寧ろ逆に古文が進化して賦となり駢文となつたと思ふが、其の裝飾と實用の點だけを比較すれば駢文は或は篆隸の如く古文は楷書の如きものかと思ふ。楷書ばかりかいてゐても楷書はできるけれども善く之をかくには篆隸を學ばねばならぬ。駢古の關係もそんな者でないかと考へる。韓柳歐陽の文章を學ぶにも其の句法の散じた部分のみを學ぶから韓柳歐陽の様な文章

ができぬではなからうか。司馬遷の文章の豪宕なるは天性と不平の氣とが然らしめたものであらうが其莽蒼歴落といふやうな趣は單に散句法を用いた處から來たものではなくして或は彼が賦家幽奥の文致を善く會得してゐた處から來たものがあるのではあるまいか。藪睨みの誹りは免れまいが思ひしまゝを述べて高明の教を俟つ次第である。

第二卷 詞曲類

詞源

一

「詞」なるものは何時より起りしや、是詞なるもの、性質を定めたる後に説明しうべきことなり。後世謂ふ所の詞なるもの、形式に合するものは中唐以來始て之ありとせざる可らず。然れども詞の形式に近きものは頗る早く起りしものに似たり。清の毛奇齡は六朝の宋の鮑照の「梅花落」已に古詞といふも不可なしとの説をなせり。按ずるに「梅花落」なるものも笛の曲なり。其辭に曰く

梅花落

宋 鮑 照

中庭雜樹多、偏爲梅杏嗟、問君何獨然、念其霜中能作花、露中能作實、搖蕩春風媚春日、
念爾零落逐寒風、徒有霜華無霜質、

と、是固より五言七言の雜言の體なり。此の如きを擧げば寧ろ照の「夜坐吟」を擧ぐるの適當なる

詞源

を信するなり。「夜坐吟」に曰く

冬夜沈沈夜坐吟、含聲未發已知心、霜入幕、風度林、朱燈滅、朱顏尋、體君歌、逐君音、不貴聲、貴意深、

と、是却て詞の體に近し。

毛氏は又古詞とも稱すべきものとして梁代の諸家を擧ぐ。曰く武帝の「江南弄」諸樂、陶宏景の「寒夜怨」、徐勉の「迎客」、「送客」、王筠の「楚妃吟」、簡文帝の「春情」、是なり。其辭左の如し。
毛氏皆本辭を載せざれども今便宜の爲め盡く之を録す、

江南弄

梁武帝

衆花雜色滿山一作上林、舒芳耀綠垂輕陰、連手蹙蹙舞春心、舞春心、臨歲腴、中人望、獨踟躕、

寒夜怨

陶宏景

夜雲生、夜鴻驚、悽切嘹唳傷夜情、空山霜滿高煙平、松華沈照帳孤明、寒日微、寒風緊、愁心絕、愁淚盡、情人不勝怨、思來誰能忍、

迎客曲

徐勉

絲管列、舞席陳、含聲未奏待嘉賓、羅絲管、舒舞席、斂袖嘿屏迎上客、

送客曲

徐勉

袖繽紛、聲委咽、餘曲未終高駕別、爵無算、景已流、空紆長袖客不留、

春情

簡文帝

蝶黃花紫燕相追、楊低柳合路塵飛、已見垂鈎挂綠樹、誠知淇水霑羅衣、兩童夾車問不已、五馬城南猶未歸、黑啼春欲駛、無爲空掩扉、

楚妃吟

王筠

窓中曙、花早飛、林中明、鳥早歸、庭前楊作中日、暖春閨、香氣亦霏霏、香氣漂楊作飄、當軒清唱調、獨顧慕、含怨復含嬌、蝶飛蘭復熏、裊裊輕風入翠裙、春可遊、歌聲梁上浮、春遊方有樂、沈沈下羅幕、

毛氏の説は大抵明の楊慎の説に本づく。(楊慎は簡文の「春情」を論じて曰く、此詩似七言律、而末句又用五言、玉無功亦有此體、又唐律之祖、而唐辭瑞鷓鴣格韻似之、と、「楚妃吟」辭中の黒圈を附したる字句は楊慎の増す所なり。)上引「江南弄」以下の諸作は三五七等の雜言にして其の氣味誠に詞に近きものあり。

毛氏は次に徐陵の「長相思」を擧ぐ、其辭二首あり、曰く

長相思

徐陵

長相思、望歸難、傳聞奉詔戍阜蘭、龍城遠、雁門寒、愁來瘦轉劇、衣帶自然寬、念君今不見、誰爲抱腰看、

同

同

長相思、好奉或作春節、夢裡恒啼悲不洩、帳中起、窗前鬢揚慎詞品作咽柳絮飛還聚、遊絲斷復結、欲見洛陽花、如君隴頭雪、

是亦詞調に近し、陵の作は梁代に成りしなるべし、梁の張率にも已に此體あればなり。

隋に於て毛氏は煬帝の「夜飲朝眠曲」並に「望江南」を擧げたり。按ずるに楊慎が「詞品」に夜飲朝眠曲としてあぐる所は左の二首なり、

憶睡時、待來剛不來、卸妝仍索伴、解佩更相催、博山思結夢、沈水未成灰、

憶起時、投籤初報曉、被慙香黛殘、枕隱金釵裏、笑動林中鳥、除却司晨鳥、

集を按ずるに此詩は效劉孝綽雜憶詩二首と題せり。馮惟訥が「古詩紀」に載する所も同題なり。

「古詩紀」は更に之に注して他の諸詩をも兼ねて「雜言○已上並見隋遺錄」と記せり、梁の沈約に

「六憶」の詩あり、その形全く此詩と同じ。之を夜飲朝眠曲といふは何の據る所なるやを知らず。

望江南は其の體後世の詞體と同じく其の調名亦同じきを以て詞家多く此調を以て隋に始まることなす。而してその事は唐の韓偓撰として傳へらるゝ小説「海山記」に見ゆ。記によるに煬帝は宮苑に

五湖を鑿つ、東なるを翠光湖といふ、帝は多く東湖に泛びたり、因て湖上の曲、「望江南」八闋を製せりといふ。八闋並に記中に載す。湖上月、湖上柳、湖上雪、湖上草、湖上花、湖上女、湖上

酒、湖上水、是なり。其の形式は次の如く、

- (一) 三字
- (二) 五字調
- (三) 七字
- (四) 七字調
- (五) 五字調
- (六) 三字
- (七) 五字調
- (八) 七字
- (九) 七字調
- (十) 五字調

三五七七五を二回くりかへしたる十句より成り、第二、四、五、七、九、十、の各句に押韻したるものなり。今「湖上月」を録す、

湖上月

湖上月、徧照列仙家、木浸寒光鋪枕簟、浪搖晴影走金蛇、徧稱泛靈槎、光景好、輕彩望中斜、清露冷侵銀兔影、西風吹落桂枝花、開宴思無涯、

他皆之と同じ。然るに唐の段安節の「樂府雜錄」によれば曰く、望江南、始自朱案當作珠 擘李太尉

鎮湖日、爲亡妓謝秋娘所撰、本名謝秋娘、後改此名、亦曰夢江南、と、徐鉉の「詞苑叢談」に「青瑣高議」を引き李太尉を李德裕なりとせり。故に此に據れば望江南の調は中唐に生せしものといふべく煬帝之を創むといふは小説家の假托なるを知るべきなり。楊慎亦曰く、傳奇有煬帝望江南數首、不類六朝人語、傳疑可也、と。乃ち隋代と雖も後世の謂はゆる詞ありと言ふことを得ざるなり。

一一

唐の初期に於ては中宗の景龍中四紀七〇七至七〇九に「回波樂」なる曲辭あり。中宗侍臣を宴し酒酣にして各々回波樂を爲くらしむ、衆皆諂佞の辭を爲し、及び自ら榮位を要めんとす、次で諫議大夫李景伯に至りしに景伯曰く、

回波爾時酒卮、微臣職在箴規、侍宴既過三爵、誼譁竊恐非儀、
と、時に沈佺期罪を以て嶺表に流され恩を被りて歸朝せしが未だ朱紱に復せず、因て亦た回波樂辭を歌ひ意を見はす、曰く、

回波爾時佺期、流向嶺外生歸、身名已蒙齒錄、袍笏未復牙緋、

と、中宗乃ち緋魚を以て之に賜ふと。又「本事詩」に同時御史大夫裴談の妻悍妬にして談之を畏るること嚴君の如くなりしに中宗も亦漸く皇后韋氏を恐れしかば優人回波詞を唱ふ、曰く、

回波爾時栲栳、怕婦也是大好、外邊祗有裴談、內裏無過李老、

と。沈佺期、並見本事詩嘲戲第七、蓋し酒宴中の戲言なり。是より先き北周の王褒に「高句麗曲」あり、六言六句にして歌舞の樂みと日の過ぎ易きを畏るゝことをいひ、陳の陸瓊に「還臺樂」ありて同じく六言六句にして燕樂の樂しきことをいへり。回波の如き亦必ず其餘風にしてたゞ句數の四句となりたるものなるべし。

高句麗

北周 王 褒

蕭蕭易水生波、燕趙佳人自多、傾杯覆盃灌灌、垂手奮袖娑娑、不惜黃金散盡、只畏白日蹉跎、

還臺樂

陳 陸 瓊

葡萄四時芳醇、瑤瑤千鍾舊賓、夜飲舞遲銷燭、朝醒絃促催人、春風秋月恒好、曠醉日月言新、

三

盛唐に至り玄宗の朝、張說作る所の「舞馬詞」亦た六言四句なり、今傳はるもの六首、その二首をあぐべし、曰く、

舞馬詞

張說

萬王朝宗風展、千金率領龍媒、舐鼓凝驕蹀躞、聽歌弄影徘徊、
聖君出震應籙、神馬浮河獻圖、足躡天庭鼓舞、心將帝樂踟躕、

と。玄宗の千秋節に諸伎を催す、中に舞馬あり、連榻を設け馬をして其上に舞はしむ、馬は統綺を衣て鈴鐸を被り、首を驪げ鬣を奮ひ、趾を擧げ尾を翹げ、態を變じ容を動かし、皆音律に中る津陽門と。其の狀想ふべし。此詞は即ち所謂音律に和してうたふものなるを見るなり。此等は詞として取扱はるゝも、尙其萌芽に過ぎず。其形は六言詩のみ。

盛唐に至り詩の五、七言絶句は皆音樂に合はせて歌はれたるが此等は燕樂に用ひられたり。燕樂とは雅樂に對するものにして隋以來の沿革あり。隋は開皇五八一至六〇〇の初七部の樂を置きしが大業六〇五至六一六中に至りて九部とす。唐の武德六一八至六二六の初隋の舊制に因り九部の樂を用ひしが太宗

は高昌樂を増し又た燕樂を造りて禮畢を去り合に著はすもの十部、曰く、一、燕樂、二、清商、三、西涼、四、天竺、五、高麗、六、龜茲、七、安國、八、疎勒、九、高昌、十、康國、而して總て之を燕樂といへり。燕樂の諸曲は武德、貞觀六二七至六四九に始まりて開元七一三至七四一天寶七四二至七五五に盛なり。上記十部の第三西涼以下は盡く外國の樂にして其の盛なること察するに足れり。彼の涼州、伊州、等の支那西北部の州名を冠したる曲はいづれも外來の曲に合はせたるもの、如く王維の渭城曲陽關三疊の如きも蓋し同様のものなるべし。

樂曲の長さものに至りては多くの部分を別ち、各部に絶句をあてはめ之を組み合はせてうたひたり。其の狀態の今日見るを得べきものは「樂府詩集」卷七十九に載する所の「水調歌」、「涼州歌」、「大和」、「伊州歌」、「陸州歌」、等是なり。此等はいづれも五言又は七言の絶句を順次に排列してうたふものなり。例を擧げんに「水調歌」商調に於ては、第一、歌、七言絶句、第二、歌、七言絶句、第三、歌、七言絶句、第四、歌、七言絶句、第五、歌、五言絶句、次に「入破」といふ部ありてその第一、七絶、第二、七絶、第三、七絶、第四、七絶、第五、七絶、次に第六にあたる處の部分を「徹」といひ、第六、徹、五言絶句、なり。組み合はせ以上の如し。附記にいふ、唐曲凡十一疊、前五疊爲歌、後六疊爲入破、其歌第五疊五言、調聲最爲怨切、と。「涼州歌」宮調の組合

詞源

はせは第一、第二、歌、七絶、第三、歌、五絶、次に「排遍」といふ部分ありてその第一、第二、七絶を用ふ。「大和」羽調の組合はせは第一、第二、第三、第四、歌、七絶、第五、徹、七絶、「伊州歌」商調の組合はせは第一、二、歌、七絶、第三、四、五、歌、五絶、入破第一、二、三、七絶、第四、五、五絶、「陸州歌」の組合はせは第一、二、三、歌、五絶、排遍、第一、二、三、四、五絶、を用ふ。入破、排遍、徹、は樂の音調の緩急前後を示す部分の名なり。(余は此に絶句を組み合はすといへるもそは通例然りといふなり。或は絶句以外の詩形の詩なりともその中四句を截り取りて絶句の如くなして用ふることあり。樂府詩集の例を見るに涼州歌の第三、歌、五絶、の處には開篋淚霑襟、見君前日書、夜臺空寂突、猶見紫雲車、を用ふ。是は高適が作五言古詩、「哭單父梁九少府」の起頭の四句なり。適が原作には襦を臆に作り、紫雲車を子雲居に作れり。陸州歌の第一、歌、五絶、の處には分野中峰變、陰晴衆壑殊、欲投人處宿、隔浦問樵夫、を用ふ。是は著名なる王維が「終南山」の五言律詩の後半なり。原作は浦を水に作る。以て類推すべし)。

又た或る樂曲名ありてそれに用ふる歌辭如何と見るに著名なる絶句なりといふ場合あり。例へば「葢羅縫」といふ曲あり、それには何をうたふやといふに王昌齡の七絶從軍行、「秦時明月漢時

關」をうたふなり。「崑崙子」といふ曲あり、その歌辭は王維の五言律詩「從岐王過楊氏別業」の前半なり。「戎渾」といふ曲あり、その歌辭は同じく王維の五言律詩「觀獵」起句云、風勁角弓鳴の前半なり。此等によりて之を見れば或る曲ありてそれに合はすには曲の長短によらず絶句をそれにあてうたひたるなり。

四

此に詩と詞との關係につきて考ふべきことあり。そは詞を「詩餘」など稱する如く詞は果して詩より生じたるものなるや否やといふことなり。之に關し二様の考へ方あり。一は「詞は詩より生じたり」とするものにして他の一は「詞は詩と並存す」といふもの是なり。二説は其の意味する所によりていづれも道理あるものとなり又た道理なきものとなる。前説に就きて見んに森氏槐南は其の「詞曲概論」に左の意味を説かれたり。

唐人の絶句皆歌ふべくして其の千篇一律厭倦を生ずるに至るや和聲原注、問の起り、和聲如何によりて同一の絶句も節奏長短の別を生ず、長短別れて工拙生じ、工拙生じて他にまさらんと欲して新聲繁く興る、而して詩を作る詩人と聲を司る伶工樂師とは或は同一人に求

む可らず、伶工樂師亡ぶれば歌法も亦亡ぶるに至る、

「是に於て已むことなく此に一あり、即ち文字なき聲に填するに文字を以てするに在り、七言四句の外聲の長短參差なるに隨ひ填するに實字を以てし本詩と相聯絡すれば後人但々其字數によりて之を尋釋し樂工の譜亡ぶと雖も猶髣髴其曲調を萬世の下に得べし、是填詞倚聲の學の始て興る所以なり、填といひ倚といふは之に因りて以て其濫觴を悟る可し」

此項原文

と。是、「詞は詩のうたひ方より起る」といふ説にして、「詩の本辭をうたふ際に意味なき音聲を附け加ふ、その意味なき音聲の部分にも皆有意味の文字を填してその歌法を遺したるものが填詞なり」となすなり。此説たるや支那の人も言ふ所にして「全唐詩」の編者は詞に關して

唐人樂府、元用律絕等詩、雜和聲歌之、其并和聲、作實字、長短其句、以就曲拍者、爲填詞、和聲のことは後に説くべし

と言へり。森氏の説全く之と同じ。古くは宋の朱子已に此説をなせり。曰く

古樂府只是詩、中間却添許多泛聲、後來人怕失了那泛聲、逐一聲添個實字、遂成長短句、今曲子便是、朱子語類卷百四十、論詩

と。是は詞が詩より生じたりとなすものと謂つて可なるべし。

詩詞並存の説は清の汪森に於て之を見る。其言に曰く

自有詩、而長短句卽寓焉、中略、以下周頌、漢郊祀歌、饗歌、も長短句なりといひ、六朝の江南採蓮諸句も倚聲に近しといひ、次に曰く 自古詩變爲近體、而五七言絕句、傳于伶官樂部、長短句無所依、則不得不更爲詞、當開元盛日、王之渙、高適、王昌齡、詩句流播旗亭、而李白菩薩蠻等詞、亦被之歌曲、古詩之於樂府、近體之於詞、分雖並馳、非有先後、謂詩降爲詞、以詞爲詩之餘、殆非通論矣、汪森、朱竹垞

詞綜序

と。汪森の議論の過程は少しく曖昧なるも詩詞同時に存すといふ考なり。苟も長短句の形式ならば直にそれが詞なりとは言ふ可らざるも、節奏により歌曲に被らすべきものを詞となすならば詩詞並存をいふも不可なきに似たり。二説いづれも理あり。たゞ余は詞なるものを單に詩の歌ひ方より誘き出されしものとせずして廣く「樂曲及聲曲そのものを寫したるもの」と考へんと欲す。此の樂曲聲曲といふ中には固より(一)詩律絶に合はせてうたふものあり(二)詩に和聲の加はりものあり(三)節面白きうたひ聲のみのものあり(四)詩辭は無くとも面白き樂曲のみなるものもあり、とするなり。之に就きて之を前人に求むるに清の張惠言の説先づ我意を獲たり、惠言曰く

詞者、蓋出于唐之詩人、採樂府之音、以制新律、因繫其詞、故曰詞、張惠言詞選序。即ち樂府の音を採り新しき律を制しその律に意味ある文字を填めたるものが詞なりとするなり。余は更に制と限らず依とか用とか言ひても可なりと考ふるなり。

此の如く詞を觀察し來るときは詞は詩と關係しても關係せずとも考ふことを得るなり。

五

再び盛唐時のことに立ち戻りて説かん、

玄宗は躬自ら音樂家なり、尤も羯鼓玉笛を愛し、之を八音の領袖にして無かる可らざるものとせり。晚唐南卓の「羯鼓錄」に玄宗自製の「春光好」の曲を奏すれば時ならざるに杏花坼き、「秋風高」を奏すれば秋葉之が爲めに下るといへり。又いふ、諸曲調、如太簇曲・色俱騰・乞婆婆・耀日光・等、九十二曲名、玄宗所製、と。而して卷末に諸宮曲を擧ぐ、中にて太簇宮に屬するものには色俱騰・耀日光・乞婆婆・等共二十曲、中に春光好あり。太簇商に屬するものには蘇羅・棊利梵・大借席・等共四十九曲、中に波羅門、秋風高、回婆樂、等あり。太簇角に屬するものには火蕪頼耶・大春楊柳・大東祇羅等共十六曲、火は大かを擧げ、其餘徵・羽調曲、皆與胡部同、故不載、といへり。此外又た諸佛曲調として九仙道曲等

九曲、中に御製三元道曲あり。食曲として雲居曲等三十三曲を掲ぐ。此等の中にて玄宗の作九十二といふはその大部分を占むるを見る。九十二曲は或は單に鼓笛を中心とせる樂曲に止まらざらんか。崔令欽の「教坊記」に至ては唐の盛時東西二京の各左右教坊に關することを記したるが、中に「曲名」と題する部分あり、獻天花・和風柳・以下凡三百二十四種の曲名を録せり。此等の曲盡くは盛唐時のものに非ずその前なるものも後なるものをも混すべしと雖も、盛唐時新樂の盛なりしこと以て察すべし。是に於て余は詞が由て起るべき樂曲・聲曲は充分盛唐に存したりと信するなり。

余は此に詞が詩のうたひ方より誘出されたるものなるに止らず、聲曲樂曲の音譜代りに有意味の文字を填することによりても生じたるものなることを證するため一二の例を擧げん。「長命女」なる曲あり、此曲起自開元前、太曆間、樂工加減節奏、宜春苑女張紅紅、又正一聲、王灼碧雞漫志。「樂府詩集」に載せたる其の歌辭は岑參が、五律の前半なり。「何滿子」なる曲あり、開元中滄州の歌者の刑に臨みて進むる所の曲なり、亦舞曲となる。唐の玄宗の時宮人沈翹翹なる者の曲をうたふ、中に「浮雲蔽白日」の句ありしと、是恐くは「古詩」の一部を截り取りてこの調に合はせてうたへるものならん。後人何滿子詞を作る、三十六字なるあり三十七字なるあり、七十四字なるあり。「羅噴曲」なるものあり、陳の後主以來の曲なり、中唐越州の妓劉采春能く之を歌

ふ、歌ふ所は五言絶句なり。是亦五言絶句をその原曲の節に合はせてうたへるなり。此例尙多し。余因て謂ふに、凡そ某某の曲とありて其辭を見るに五七言絶句に過ぎざるものは其皆絶句をばその曲に合はせてうたひたりといふことにて其の絶句がその曲の音節を示すものには非ずと。大曲即ち多くの曲を組み合はせてうたふものに「霓裳羽衣曲」あり。此、本は婆羅門曲より出づ。其の曲凡十二遍、白居易に従へば前六遍を散序とし拍なし、第七遍以下を中序として始て拍あり、故に第七を拍序ともいふと。宋詞に霓裳中序第一といふものあり、毛先舒之を解して曰く填詞、名以中序第一者、蓋中分十二疊、以第七疊、爲中序第一、至此乃舞、と。此の曲は玄宗の時に始まり元和に至り白居易之を聴覽し、五代の李後主其の譜を得、昭惠后之を改め、宋の宣和の時王平なるもの自ら言ふ辨則霓裳羽衣譜を得たり、と。詞の霓裳中序第一は即ち原曲の第七遍の聲を寫したるものなることを知るなり。此等皆聲曲樂曲の詞に於ける關係を徴するに足れり。

六

盛唐時代李白に菩薩蠻及び憶秦娥の二詞ありとは一般に傳ふる所なるも傳來確かならず。初、

「鼎州の滄水驛樓上に寫しありしものにして、宋の魏泰道輔之を愛す、後、長沙に至り古風集を曾子宣曾蒙が弟布内翰の家にて得て乃ち李白の撰する所なるを知る」宋釋文登湘山野錄といふ。かゝる傳説は遽に信じ難し。明の胡應麟は之を疑ひ、蓋し李白の詩集が草堂集と稱せられ且つ宋人の編せる草堂詞なる詞集あるにより後人唐の無名氏の作たる二詞を見て之を白の作なりとなせるならん莊嚴委譚下といひ更に之を晩唐の温飛卿が輩の作なるべしといへり。蘇鶚の杜陽雜編卷下を按ずるに、大中八四七至八五九初、女蠻國、貢雙龍犀、有二龍、鱗鬣爪角悉備、明霞錦、云、鍊水香麻以爲之也、光耀芬馥著人、五色相間、而美麗於中國之錦、其國人危髻金冠、瓔珞被體、故謂之菩薩蠻、當時倡優、遂製菩薩蠻曲、文士亦往往聲其詞、とあり。之に依れば菩薩蠻なるものは宣宗の大中の初に女蠻國人の狀貌を寫したるものにして歌曲も同時に起りしものと見ざる可らず、然らば李白が此詞を作らざること明かなり。二詞の外、李白に清平樂令、桂殿秋ありとせらるれども是亦遽に信じ難し。

盛唐末、肅宗七五六至七六二の時張志和あり、漁父歌を作る。其辭に曰く、西塞山前白鷺飛、桃花流水鱖魚肥、青箬笠、綠蓑衣、斜風細雨不須歸、と。もと七絶に近きも七絶の第三句にあたる部分を折て三言二句となせり。志和在ては是自然に發したる漁父の歌のみ。後人此調を用ひて漁歌

子を造る。

七

中唐に至り三臺と稱する體あり、六言四句より成る。韋應物・王建之が作あり。又、調笑令一名調笑、一名轉應曲といふものあり、二語を重ねたる四言句にて起り六字にて承け次に六字句二あり、其次には第四句の末二字を顛倒しそれを重ねたる四字句を用ひ、最後に又その四字句と韻をあはせる六字句を用ふ、總て六句より成る。韋應物・王建・戴叔倫・皆其辭あり。例、

三 臺

王 建

池北池南草綠、殿前殿後花紅、天子千秋萬歲、未央明月清風

調笑令

韋 應 物

河漢河漢、曉挂秋城漫漫、愁人起望相思、塞北江南別離、離別離別、河漢雖同路絕、

蓋し此調はたとひ其の辭意は悲みを帶ぶとも同音の反覆曲折する間に滑稽の趣を生ずるものに似たり。是、調笑の名ある所以なるべし。

此外に中唐に於ては白居易・劉禹錫ありて詞の體備れり。白に花非花、憶江南、長相思、劉に

春去也、瀟湘神、あり。韓翃が章臺柳全く劉の瀟湘神と類せり。

八

晚唐に入り詞は全く備れり。調名も此時よりして多し。作者としては温庭筠、皇甫松、等あり、温に至りて「握蘭」、「金荃」、等の詞の專集ありしといふも今佚せり。温の詞、「花間集」に收むるもの六十六首、其の體亦十八調の多きに達せり。調名を擧ぐれば、菩薩蠻、更漏子、歸國遙、酒泉子、定西番、楊柳枝、南歌子、河瀆神、女冠子、玉蝴蝶、清平樂、遐方怨、訴衷情、思帝鄉、夢江南、河傳、蕃女怨、荷葉盃、是なり。菩薩蠻は十四首あり、孫光憲の「北夢瑣言」に宣宗愛唱菩薩蠻詞、令狐丞相名綽、大中年同平章事假飛卿新撰密進之、戒以勿泄、而遽言于人、由是疎之、飛卿は庭筠が字、といへり。此に据るも菩薩蠻は此頃より行はれたるものなるを見る。

皇甫松は韓愈の門下皇甫湜が子なり。彼の詞亦「花間集」に存す。總て六體十一首あり。彼の採蓮子には珍らしくも「和聲」の例を存せり。其の形式は七言絶句に等しく第一句第三句の終りに各々「舉棹」、第二句第四句の終りに各々「年少」の字を添ふ。是、此詞は採蓮子の調子にて本文をうたひ其の間に「ハヤシ」として「舉棹」、又は「年少」の二語を挿むなり。棹と少とは押韻の字なり。例、

探蓮子

皇甫松

四七八

蘭若香連十頃陂舉棹 小姑貪戲探蓮遲年少
晚來弄水船頭濕舉棹 更脫紅裙裹鴨兒年少

現存の和聲の例としては此外に五代孫光憲の作と稱する竹枝あり。和聲として「竹枝」、「女兒」の二語を用ひ七言各句の第四字下に「竹枝」、第七字下に「女兒」を添へたり。枝と、兒と韻をなす、例

竹枝

孫光憲

門前春水竹枝 白蘋花女兒 岸上無人竹枝 小艇斜女兒
商女經過竹枝 江欲暮女兒 散拋殘食竹枝 飼神鴉女兒

前人多くいふ、詩をうたふ際にかゝる和聲あり又本文をうたふ際の聲音の長短節奏が加はりたるものをその調子の如く有意味の文字をあてはめしが詞となりしなりと。但し此く説くは詞の由て生ずる原因の一部分なりと謂はざる可らず。

以上説く所により詞は中唐晩唐の際に起り來りしことを知るべし。

是よりして五代十國となりては詞は益々盛に君臣共に之に耽り並に作者あり。就中、蜀及南唐に於ては前後に比類なき隆盛を來したり。宋詞又其後を承く。

女詞人 李易安

如夢令 譯文

如夢令 原文

昨夜雨疎に風驟ニハカに、
濃睡のうちに酒ぞのこれる。
「春やいかに」と籬を捲く人に問へば、
おぞや「海棠の花はそのまゝ」といふ。
知るや知らずや、
知るや知らずや、
今はよ、緑(葉)肥え紅(花)瘦せつらむ。

昨夜雨疎風驟
濃睡不消殘酒
試問捲籬人
卻道海棠依舊
知否
知否
應是綠肥紅瘦

一翦梅 譯文

一翦梅 原文

蓮の香のなほ消えやらぬ竹むしろの秋。
羅の裳をそと解きて獨りぞ上る木蘭の舟。

紅藕香殘玉簾秋
輕解羅裳

女詞人 李易安

四七九

雲のそらより、たが玉づさを寄せて來む、
文字かく雁のかへるとき、月さえわたる西のたかどの。

おちゝるは花、流るゝは水。

おなじ思ひにこゝかしこ、

所へだつるあだおもひ、

此の情かきはらふすべもあらくに、

はつかに眉根より下るとみれば(或云、眉をおろせば)早くも上る心のうへ。

獨上蘭舟。
雲中誰寄錦書來
雁字回時月滿西樓
花自飄零水自流
一種相思
兩處閒愁
此情無計可消除
才下眉頭
卻上心頭

醉花陰 譯文

霧うすく雲こく晝の永きに愁ひ、
金獸の爐に香腦をくゆらしゝに、
いつしか重陽の節となり、

醉花陰 原文
薄霧濃雲愁水晝
瑞腦消金獸
佳節又重陽

玉の枕べ紗のとばり、
夜半にしみとほる秋のすゞしさ。

玉枕紗厨
半夜涼初透

黄昏のち酒を東籬に把れば、

袖に盈ちくるくらがりの香。

我、魂消たじとたれかいふ、

秋風に捲く簾のもと。

人は黄菊の花よりも瘦せたり。

東籬把酒黃昏後
有暗香盈袖
莫道不消魂
簾捲西風
人比黃花瘦

聲聲慢 譯文

尋ぬる人やいつこ、
もどむる人やいつこ。
あな冷かさよ、
あなつめたさよ、

聲聲慢 原文
尋尋覓覓
冷冷清清
淒淒慘慘戚戚
乍暖還寒

もの。が。な。し。さ。
み。じ。め。さ。
う。れ。は。し。さ。

ふとあたゝかくまた寒く、
養生にかたき時節かな。

二杯三杯の淡酒をくむとも、いかで夕風の急なるに敵はむ。
雁の過ぐるをみて正に心を傷ましむるも、亦これ舊時の相識なり。

堆く積もれる満地の菊花、

やつれはてぬる今は誰かは摘むに堪へむ。

窓のべを立ち去らず、

ひとり居ていかで天のくるゝに待ちいたらむとおもふに、

梧桐の葉に細雨さへふりしきりて、
たそがれどきにポタリくとしたたる。

時候最難將息

三杯兩盞淡酒

怎敵他晚來風急

雁過也

正傷心卻是

舊時相識

滿地黃花堆積

憔悴損如今

有誰堪摘

守著窓兒

獨自怎生得黑

梧桐更兼細雨

このうつりゆきをば

いかで一箇の「愁」の字もて帳消しとなし得むや。

武陵春 原文

風は塵香を住めて花已に盡く、

日晚れて頭を梳るに倦む。

物は是なるも人非にして事事休す。

語らんと欲して涙先づ流る。

うち聞けば雙溪の春尙好しといふ、
泛べまほしき小舟かな。

さはさりながら雙溪の舴艋舟

さはなるわがこの愁を

載せなばやはか動き得む。

女詞人 李易安

到黃昏。點。點。滴。滴。
這次第。
怎一個愁字了得。

武陵春 原文

風住塵香花已盡

日晚倦梳頭

物是人非事事休

欲語淚先流

聞說雙溪春尙好

也擬汎輕舟

只恐雙溪舴艋舟

載不。動。許。多。愁。

右の原詞五闕は宋の女詞人李易安が作なり。易安名を清照といふ、易安居士はその號なり。山東濟南の人。彼の「洛陽名園記」を以て名ある李格非の女にして「金石錄」の著者趙明誠が妻なり。神宗の元豐五年西紀一〇八二生れ哲宗の元符二年一〇九九十八歳にして趙明誠に嫁し夫を助けて「金石錄」を成さしむ。晩年亂離艱苦に遭ふ。靖康、建炎より紹興二年に至るまでの事は彼女の「金石錄後序」に詳なり。紹興三年彼女に韓肖胃に上る五言古詩あり。四年一四三打馬圖及び賦を作る、時に年五十三なり。爾後の事分明ならず、或は曰く弟李迥に依りて金華に老すと。彼女が明誠の死後張汝舟なるものに嫁し夫妻間に争訟を起せしこの事、李心傳の「建炎以來繫年要錄」に見え、遂に此の詞才の貞操の上に疑雲を集めたるも、清の李慈銘等は彼女に再嫁の事なきを辨せり。

彼女の事迹に關するもの、清の俞正燮の易安居士事輯、陸心源の易安事輯書後、李慈銘の書陸剛甫觀察儀順堂題跋後、等あり。彼女の詞集には「漱玉集」あり。王鵬運之を刻してその四印齋所刻詞の中に入れたり。俞、陸、以下の諸篇亦集の附録に在り。今、易安の傳に關しては此等の篇に譲りてこゝに贅せず、たゞその人品を想望すべきもの一二を記せん。

彼女夫妻の生活趣味の如何なるものなりしやは次の文に於て窺ふことを得、曰く

明誠後屏居鄉里十年。衣食有餘。及起知青萊二州。皆政簡。日事鉛槧。易安與其校勘。作金石錄。考證精鑿。多足正史書之失。每獲一書。即校勘整集籤題。得書畫彝鼎。摩玩舒卷。指摘疵病。夜盡一燭爲率。所藏紙札精緻。字畫完整。冠諸收書家。易安性強記。每飯罷。與明誠坐歸來堂。烹茶。指堆積書史。言某事在某書幾卷幾葉幾行。以中否決勝負。爲飲茶先後。中、即舉杯。往往大笑。茶傾覆懷中。反不得飲而起。其收藏既富。歸來堂起書庫。大廚簿甲乙。置書冊。當講讀。即請論上簿關出。卷帙或少損汗。必懲責。措完塗改。又置副本。便緝討。書史百家。字不刊。本不誤謬者。常兼三四本。皆精絕。家傳周易左氏春秋兩家文籍尤備。几案羅列枕藉。意會心謀。目注神授。樂在聲色狗馬之上。俞氏事輯

と、如何に校勘讀書を樂みとせしやを知るべし。「金石錄後序」は彼女の自叙傳なり。之を讀めば彼女が其の夫の事業に對して如何に力を盡せしか、又其の艱難流離の際にも夫の愛藏を如何に護持せしかの有様を見るべく、人をして慘悽の情にたへざらしむ。

此の如き婦人にして改嫁の事ありとは常情を以てして信する能はざる所なるが、已に更に諸家の考證ありて改嫁の事實なきこと明白なれば事の當然なるも余輩は常に心に之を快とす。

易安詩に長せり。其の五言古詩「曉夢」、「上簽書樞密院事韓肖胄詩」、「七言古詩」上工部尙書胡松年詩、「和張文潛浯溪中興頌碑詩」等は並に誦すべく後二篇の如きは鬚髯男子を壓倒するに足れり。其の「春殘」と題せる七言絕句に曰く

春殘何事苦思鄉。病裡梳頭恨髮長。梁燕語多終日在。薔薇風細一簾香。

と纖艶愛すべし。又佳句に富む。曰く

南來猶怯吳江冷。北狩應知易水寒。

曰く

南渡衣冠思王導。北來消息少劉琨。

と。忠憤の氣見るべし。又、應舉の進士を誹れる句に曰く

露花倒影柳三變。桂子飄香張九成。

と、應舉の者その工對に服し傳誦して而かも之を惡みしといふ。

易安詞論家として有力なる地位を占む。北宋の詞論家を求むれば蓋し男子にては晁無咎女子にて易安を推さざる能はず。易安の五代を論するや曰く

五代干戈、四海瓜分豆剖、斯文道熄、獨江南李氏君臣尙文雅、故有「小樓吹徹玉笙寒」吹

皺一池春水」之詞、語雖奇甚、所謂「亡國之音哀以思」也、

是、李後主、馮延巳輩を足れりとせざるなり。宋の諸家を論じて曰く

逮至本朝、禮樂文武大備、又涵養百餘年、始有柳屯田永者、變舊聲、作新聲、出「樂章集」、大得聲稱于世、雖協音律、而辭語塵下、

是、柳永を誹るなり。又曰く

又有張子野・宋子京兄弟・沈唐・元絳・晁次膺輩繼出、雖時時有妙語、而破碎、何足名家、是張宋諸人に満たざるなり。又曰く

至晏元獻・歐陽永叔・蘇子瞻、學際天人、作爲小歌詞、直如酌蠶水於大海、然皆句讀不葺之詩耳、又往往不協音律、

と。歐蘇諸大家にも足れりとせざるなり。而して其の音律に協はざる理由を説きて曰く

蓋詩文分平側、而歌詞分五音、又分五聲、又分六律、又分清濁輕重、且如近世所謂聲聲慢・雨中花・喜遷鶯、既押平聲韻、又押入聲韻、玉樓春本押平聲韻、又押上・去聲、又押入聲、其本押仄聲韻者、如押上聲則協、如押入聲、則不可歌矣、

と。是は同じ側聲中にも區別すべきものと然らざる者とあるをいふなり。此理を知らざる者の

例として易安は王介甫、曾子固、を擧げて曰く

王介甫・曾子固、文章似西漢、若作一小歌詞、則人必絶倒、不可讀也、乃知詞別是一家、知之者少、

と。次で晏、賀、秦、黄、を評して曰く

後晏叔原・賀方回・秦少游・黄魯直出、始能知之、而晏苦無補叙、賀苦少典重、秦即專主情致、而少故實、譬如貧家美女、雖極妍麗丰逸、而終乏富貴態、黄即尚故實、而多疵病、譬如良玉有瑕、價自減半矣、

と。皆要所に中れり。或は曰く易安諸家を歴評し、皆其短を指摘し一も免るゝものなし、其の意は蓋し自ら能く其の長を擅にし樂府を以て家に名ありと謂ふなりと。

蓋し易安は必しも諸家を貶して因て自己を揚げんとする者に非ず、唯だ善く詞を解するを以て諸家の短所を發見して之を筆にせるならんのみ。是偶まその詞に於て一隻眼を具するを證するに足る。

易安が作詞に至ては余輩の拙譯原作の風神を減損する甚しと雖も幾分其の面目を認むるに足らん。獨り造語の巧なるのみならずその神氣沈着にしてしみくゝとその境に引き入れらるゝが如き

感あるは之を彼女の作の特色とす。醉花陰聲慢は其の代表的なるものにして前者の簾捲西風。人比黄花瘦。の句は彼女の人品と詞品とを併せて示すものといふべし。傳へいふ、易安此詞を以て明誠に函致す、明誠之に勝らんことを思ひ一切客を謝し寢を廢し食を忘るゝこと三日夜、五十餘閱を得、易安が作に雜えて之を友人陸德夫に示す、德夫玩誦する再三にして曰く三句の乃ち絶佳なるありと、明誠之を詰る、曰く、莫道不消魂。簾捲西風。人比黄花瘦。なりと、正に易安が作なり。三句實に凄艶の致を極む。聲聲慢は則ち十四個の疊字を連用し尙又四個の疊字を用ゐ、その他修辭の妙を以て稱せらる。拙譯の首七句は即ち原文に於ける

尋尋覓覓。冷冷清清。悽悽慘慘戚戚。

に對せるものなり。又後段の牕邊に梧桐の雨をきくの條は原文にては

守著牕兒。獨自怎生得黑。梧桐更兼細雨。到黄昏、點點滴滴。這次第、怎一個、愁字了得。とあるものなり。張端義此詞を評して曰く、秋詞聲聲慢は此乃ち公孫大娘劍を舞はすの手なり、本朝詞を能くするの士無きに非ず、未だ曾て一たび十四字の疊字を下せるものあらず、後疊に又云ふ、「到黄昏、點點滴滴。」と又疊字を使ひて俱に斧鑿の痕なし。「怎生得黑」の「黑」の字は第二人の押するを許さず。婦人にして此の奇筆あるは殆ど間氣なり、と。此の黒は天黒の義なり。押

韻の簡所なり。拙譯は單に「いかで天のくるゝに待ちいたらむとおもふに」と言へるに過ぎず、原文の妙は傳ふるに難し。

此他に「湫玉集」を繙かば短調長調に於て容易に佳製を見出しうべし。

古來支那の女流文學者として知らるゝもの兩漢六朝に於て賦家に班婕妤、班昭、詩人に蔡琰、左芬、鮑令暉、唐に上官氏、宋氏、薛濤、魚玄機、花蕊夫人費氏、の輩世々其人に乏しからざるも多くは字句の修飾に走りて自らの體驗を讀者をして同様に體驗する如く感せしむるものはいと稀なり。然るに李氏は此上に於て能く他の追隨を許さざる特長を發揮せり。作に於ても、論に於ても、宋詞を究め來るとき彼女は決して見逃かす可らざる詞人なり。彼女と殆ど同時に「斷腸詞」の作者朱淑真も亦女詞人なるも二者の優劣は日を同じくして論すべからず。

口語を使用せる填詞

支那の文學に於て純粹に口語を使用せるもの古代に於て之なし。「詩經」、「楚辭」の如き多少の方言を雜ゆるものは之あらんも全く口語を用ひたるものは之あらず。余の知る所を以てすれば戰國の頃に楚の莊辛といへる者の引きたる越の舟人の歌ひたる歌なるものが全篇越の方言を以て記されたるもの「說苑」の善說篇に載せあるを以て殆ど唯一のものとなす。其辭に曰く

濫兮并草濫予昌椹澤予昌州州馱州馱平秦胥胥縵予乎昭潭秦踰滲悞隨河湖

と。其意全く解しがたし。此の歌當時の人すら解する能はず之を楚の歌に譯せよとて譯したりといふ。其の譯したる楚歌は同じ篇中に載せあるが故に其意始て明かなり。降て六朝晉宋の頃には「子夜四時歌」ありて其中には多く俗語を用ふ、たとひ全篇俗語を使用せざるも其の語氣は殆ど俗語の語氣なり。俗語の二三の例をあぐれば、代名詞にては、儂カク、歡カクノゴトキ、情人を指す、うれし。女、その情カク、底カク、那カク、ナカク、ンカク、等、動詞の覓カク、モカク、トムカク、副詞の轉カク、ウカク、タカク、等、唐突カク、ダカク、シカク、メカク、ケカク、ニカク、等、此等の語は屢々使用せらる。

唐の詩に於ては時々俗語を使用す。例へば生憎張額繡孤鸞、好取開簾帖雙燕、盧照鄰長安古意、祗

今惟有西江月、曾照吳王宮裡人、衛萬吳宮怨、酒後留君待明月、還將明月送君回、路賓王餘杭醉歌贈吳山人、眉黛奪將萱草色、紅裙妬殺石榴花、萬楚五日觀妓、只言啼鳥堪求侶、無那春風欲送行、高適夜別韋司士、の如き皆是にして此外一々例を掲ぐるまでもなきことなり。文章家が文中に詩語を用ふるを嫌ふは詩語が俗意を帯び易くたどひ、俗語を其まゝ使用せずとも既に多く文の品格を害はんことを恐るればなり。それだけ詩は俗に近しいふべし。

しかし詩は猶は古雅めかしきものにして俗語とは大なる懸隔あり。「詞」出づるに及びて漸く俗語は文學と關係深くなり來れり。

「詞」は中唐以後に盛となりたるが温庭筠の作中には已に可なり多く口語を用ふるものあり。左の詞はその後段は全く口語を使用せり。

更漏子

唐温庭筠

玉闌干 金甃井 月照碧梧桐影 獨自箇 立多時 露華濃濕衣 一向凝情望 待得不
成模樣 雖耐耐 又尋思 怎生眠得伊

然れども唐及五代に於ては詞の品致優雅にして口語はたゞ間々之を使用して精神を煥發するの用に供せらるゝのみ、未だ口語を本體となせるものあらず。其の之あるは實に宋代に於てす。宋

詞に就ては余は汲古閣刻の諸家の集を材料とせり。宋詞中口語を使用するものにも(一)殆ど全篇之を使用するもの、(二)比較的多く使用するもの(三)少しく使用するもの、等に分るべし。(二)に屬するものは宋詞全體としては其作者及び作物の數は多からず。作者は北宋に於ては秦觀少游、黃庭堅山谷、趙長卿、呂渭老、周邦彥美成、南宋に於て辛棄疾稼軒、劉過改之、楊无咎、楊炎、石孝友、蔣捷竹山、等を主なる者とす。數よりいへば黃山谷最も多くして十三閱、之に次ぐものは石孝友の六閱にして他は四五閱以内にある。(二)に屬するものは北宋にては柳永屯田、蘇軾東坡、晁補之无咎、毛滂、南宋に於ては、曾覲、沈端節、等を主なるものとす。(三)に屬するものは詞家の大多數みな是なり。余は假りに三種とせるも多少は程度の差なれば或は殆ど全篇に口語を使用するものと多少之を雜へて使用するものとの二種とするも可ならん。

次に口語を使用したる詞の價值につき言はん。殆ど全篇に口語を使用せるものは遺憾ながら價値あるもの少し。それには理由あり。何ぞや。全篇口語を使用するものは作者之を作るときに眞面目ならず(雅語を本體とする詞を作る場合に比して)概して滑稽、鄙褻なることをいふごきに製作せられたるを以てなり。しかし戀愛に關するもの、如きは甚だ露骨なりと雖も眞情あるもの亦之あり。たゞ全篇口語なるものは今日其の意義を解するに苦むものあり、又意義を解しうるとし

ても餘りに鄙褻なるものは此に之を論ずるを得ず。

此に黃山谷の二三の作を例示すべし。小令には卜算子、少年心、長調に沁園春あり。

卜算子

黃庭堅

要見不得見 要近不得近 試問得君多少憐 管不解多於恨 禁止不得淚 忍管不得悶 天上人間有底愁 向箇裡都請盡

〔右意譯〕見やうとしても見ることができず、近づかうとしても近づくことができぬ。試みに問ふ、わたしはあなたからどれだけの憐みをうけましたか、よもやその憐みがわたしの恨みよりも多いとはおもはれませぬ。涙はせきどめかね、悶へはたへきれぬ。天上人間にどのやうな愁ひがあるかは今の身のうへからすつかりわかりました。

少年心

對景惹起愁悶 染相思病成方寸 是阿誰先有意 阿誰薄倖 斗頓恁少喜多嘆 合下休傳音問 你有我我無你分 似合歡桃核 真堪人恨 心兒裡有兩個人人

〔譯〕我と我が影にうちむかへば愁ひ悶へのこゝろをひきおこす。こひの物おもひにそみて

胸のうちに病ができあがつた。そもだれが先きに氣があつて、だれが先きに薄情になつて、にはかにかくも喜びは少く嘆ることのみ多くなるやうになつたか。

いつそたよりは聞かしてくださるな。あなたは私の愛をうける運命をおもちでせうが私はあなたの愛をうける運命はもちませぬ。あなたはほんにうらめしくも二子の桃の核の様なもので、その心には兩個の人(仁)と人と同音なれば引きかけていふをもつてゐます。

沁園春

把我身心 爲伊煩惱 算天便知 恨一回相見 百方做計 未能假倚 早覓東西 鏡裡拈花 水中捉月 戲著無由得近伊 添憔悴 鎮花銷翠減 玉瘦香肌 奴兒又有行期 你去即無妨我共誰 向眼前常見 心猶未足 怎生禁得真箇分離 地角天涯 我隨君去 堀井爲盟無改移 君須是做些兒相度 莫待臨時

〔譯〕我が身も心もこのひとの爲めにうちなやむは天も御承知あらん。一ト目見てよりいろ／＼手だてをつくせどもおそばによることもかなはぬに早くもわきへゆきたまはんどす。たとへば鏡の中で花をひねり、水の中で月をさらへんとするやうなもの、ながめるばかりでちかづくことができぬ。日にましやつれいやまして花やかさはきえ翠は減じ、玉の肌も

口語を使用せる填詞

やせるばかり。

私もよそへゆく日がきまつてゐる。あなたはよそへゆかれてもおさしつかひはありますまいが、このわたくしはだれと一緒にくらしませう。いつも目のまへに見てゐてさへ足らぬとおもうてゐるのに、どうしてほんこのわかれがこらへられませう。いかなうらばのはてまでも私はあなたにおともいたしたい。神かけてこの心に決してかはりありませぬ。いざわかれの時をまつまでもなく今からすこしはこの心をお察しなされて下さいませ。

次に更に周邦彦の紅窗迴と楊无咎の玉抱肚をあぐべし。

紅窗迴

周邦彦

幾日來 眞箇醉 不知道窗外 亂紅已深半指 花影被風搖碎
擁春醒乍起 有箇人人生得濟楚 來向耳畔 問道今朝醒末 情性兒慢騰騰地 惱得人又醉

〔譯〕二三日このかた全く酔うてしまった。いつのまにか窓の外では花影が風に吹きゆるがされ、落花が指半分ほどの深さにちりしいた。

春の酔ひどれながらに起きんとすれば、あのきれいな人が耳のはたで「けさはお酔ひがさめましたかどうですか」とたづねる。それを聞くごまたうとくとした心地になつてまた

く自分を酔ひのなやみにひきいれる。

玉抱肚

楊无咎

同行同座 同攜同臥 正朝朝暮暮同歡 怎知終有拋擲 記江阜惜別 那堪被流水無情送
輕舸 有愁萬種 恨未說破、知重見甚時可 見也渾閒 堪嗟處山遙水遠 音書也無箇
這眉頭強展依然鎖 這淚珠強收依然墮 我平生不識相思 爲伊煩惱忒大 你還知麼 你
知後 我也甘心受摧挫 又只恐你 背盟誓似風過 共別人忘著我 把洋瀾左 都卷
盡與 殺不得這心頭火

〔譯〕共にあるき共にすはり共に手をひき共に臥し、眞にあさなゆなたのしみを共にせしに意外にもすてらるゝことになつた。あのかはべりのをかて別れを惜んだとき無情の川水に舟を送りさられてしまつた。そのときさまさまの愁ひがありながら言ひきることができなかつたが残念だ。こんどまた逢ふのはいつのことやら。

逢ふたところがむだぢや。あゝなげかはしや山はゝるかに水は遠くたよりはすこしもない。この眉根はのばさんどすればやつぱりよりあひ、この涙はおしかたづけんどすればやつぱりおつる。これまでは戀といふことを知らなかつたわたしもこの人のためにはどれば口語を使用せる填詞

どなやむか。あなたはそれを知つてゐますか。あなたが知つてゐるならわたしはどんなめにあふてもがまんします。いや心配なはあなたが風の吹きながすやうに誓にそむき、あだし人と共にわたしを忘れてしまひ(把洋瀾左都卷盡與の二句未詳)わたしのこの胸の火の勢がそがれずにもえはすまいか。

前掲諸作は見るべき點なきに非るも雅語を用ふるものに比して作者が眞面目に此方面に努力せしにあらす偶然にかゝるものを作りしといふに止まる。若し山谷の徒をして眞に眞面目に之に努力せしめしならば其の結果は更に知るべからざるものありしならん。

通例詞の名篇と稱せらるゝものは雅語を本體とせるものに在りて多く、口語を使用せるものに少し。柳永が作として有名なる「曉風殘月」の如き實に然り。此等の殆ど全篇口語を使用するものとの中間に位する所の雅語六分、口語四分、といふ程度のものには宋詞に佳作尠からず。一例をいはゞ柳永の慢卷紉紉は袖の誤なり 紉は袖の誤なり 柳永の如き是なり。永が詞は當時非常に流行し西夏の方面まで苟も井を掘て水を飲むの地にはうたはれたりといふは其の情致と用語とが宛も普通人に適當せるがためなりしなるべし。

雅語を本體としつゝ、要處に適當に口語を點綴したるものは、此最も佳篇多し。此例は一々列舉

するにたへず。

此の情勢は曲に就てもいひうべし。元曲はいかに名作と稱せらるゝもそれは單に口語俗語を使用せるが爲めに名作となりしに非ず。雅言を兼用し萬已む能はざる要處々々に口語を用ひ生きたる精神を吹き込みし處に名作たる價值を生ぜしなり。明清人が爲す如く元人の用ふる俗語を借り來りて使用するは是已に擬古なり口語の死用なり。之によりて名作となりうる理は之なきなり。次に余は詞と曲との用語上の關係につき一言せん。

詩より詞となり、詞より曲となりしことは多く人の言ふ所なり。清の萬紅友は趙長卿の有有令を評して此等伴詞、爲北曲之先聲矣といへり。必しも此の一詞をさへすとも詞に口語を多く雜用するは已に從來の典雅なる文學とは異なる方向を取れるなり、之に詞體を用ひての敘事、或は驅括は一步々々曲に近からしめしなり。まして敘情敘景に止まるものはその曲調に於てこそ曲との別あらんも外形にては詞も曲も殆ど區別するに難きものあり。又その内容よりいへば、詩の本句ありて詞は之を敷衍して利用したるもの多くあると同様に、曲文は又た詞の或る句を取り之を敷衍して作りたるもの乏しからず。是、詞を知るには詩が必要にして曲を知るには詞が必要なる所以なり。

此には單に用語の或ものに就ていはん。語の終りに語氣をあらはす語に也囉、則個、等の語あり、これは元明人の曲文に屢々見るものなるが已に宋詞中に之あり。咱、伊、等の代名詞亦宋詞中にあり。咱行の行（後には娘行、爹行、等の行）伊家の家、の如き用法も已に之あり。比、比似、倍、倍增、……價（例、許多時價、曉夜價、鎮日價、經年價、の類）……地（騰騰地、冷清清地、忪忪地の類）等の價地、の用法も已にあり。同時にかく三字も四字もつらねて副詞を造ることも存するを見るなり。不能の義をあらはす所の不能句、又は不能得句、も已に用ひらる。不能句は已に「漢書」匈奴傳に出づといはる、が此語は元曲には非常に多し。由他、不由他、の由、してせしむるの義を爲し、古文の「使」字、俗語の「教」に相當する交の字、副詞たる除非、斗、陡、タチマチ較ヤ、などもあり、目なれぬ字にては攔就ムリニヒツク、四附記にみゆ、僂僂、ワルクチスル、琵琶記にみゆなどの類も宋詞已に屢々之あり。俗字にして義の知り難きものも少からず、例へば尿磨、啞、啞、啞の如き是なり。

此にあげたるは一端に過ぎざるが猶種々なる語が宋以來存することを知るに足れり。「語録」の外に宋詞は亦俗語の一の彙集を成す。

王氏の曲録及び戲曲攷原

曲録六卷、戲曲攷原一卷は清の宣統元年（我が朝明治四十二年）五月清國杭州府海寧縣の人王國維氏の撰する所にして支那の戲曲に關する著述なり、晨風閣叢書本にて戲曲攷原は一巻一冊、曲録は六卷三冊あり、曲録の卷頭に著者の自序あり、聞く著者は少壯有爲の學者にして彼の羅振玉氏等と調を同じくし、嘗ては我邦にも來遊せしことある人なりと、氏の自序に「國維、雅と聲詩を好み粗ば流別を諳す、往籍の日に喪するを痛み來者の徵する無からんことを懼る、是を用て博く故簡を稽へ撰びて總目を爲くる」云々とあり、更に「國粹學報」上に最近に發表されたる氏の論撰には宋大曲考、優語錄、等あり、蓋し平生深く此の方面に興味を有し研究をつげられつゝあるもの、如し。

曲録は名の如く曲の目録なり、分ちて六卷とす、第一卷には宋金時代の雜劇、院本に關する目録、第二卷には元代の雜劇、第三卷には明、清の雜劇、第四卷には元明の傳奇、第五卷に清朝の傳奇の目録を載す、最後の第六卷には雜劇傳奇の總集の目録、曲譜書の目録、及び曲に關する目録書の目録を載す、今此書の第六卷を見るときは支那の雜劇傳奇について元代以來清朝までに凡そ

如何なる著書ありやの大要を瞥見するを得べく、第一卷より第五卷までに於ては各作者につきて凡そ如何なる著作物あるかを知りうべし、著者の據りたる典籍は主として宋金時代に關しては陶宗儀の輟耕錄、錢曾の也是園書目、元以下に關しては元の鍾嗣成の錄鬼簿、明の寧獻王の太和正音譜、臧懋循の元曲選、陳與郊の古名家雜劇、息機子の元人雜劇選、清の李玉の北詞廣正譜、明末某氏の盛明雜劇、毛晉の六十種曲、清の焦循の曲考、李斗の揚州畫舫錄、無名氏の傳奇彙考、高奕の新傳奇品、等其他なるが、著者は單に此等の書より作者と作物とを選びて時代及作者の順に之を排到し一目瞭然たらしめしのみならず、時々作者の傳記逸事をも附記し又は考證をさへ附け加へたり、例せば卷一、宋金雜劇院本の部に輟耕錄より「蔡伯喈一本」を引き其の下に注し其の高則誠の「琵琶記」の祖本なるべきをいひ、之を證するには陸游の詩の「斜陽古柳趙家莊、負鼓盲翁正作場、死後是非誰管得、滿村聽唱蔡中郎、」を以てし南宋時代既に夕陽老柳の邊り田舎の盲目翁が蔡中郎に扮して、戲を演ずるものありしをいへり。又或は卷二、元の雜劇を説く處には武漢臣の「散家財天賜老生兒一本」を元曲選本より録し其下に注しては「德人叔本華意志及寫象之世界第三冊詩論中、述英人大關曾譯此本於千八百十七年、在倫敦出版、迄今九十餘年矣、」といへり、按ずるに叔本華はショーペンハワーなり、意志及寫象之世界は Die Welt als wille und vorst-

ellung. なり、大關は Davis デーギスなり、此書の題名略して單に老生兒 Iaou-seng-urh ヲコフ、西歷千八百十七年英國人ジェー・エフ・デギース氏之を譯し An Heir in his old age といひ千八百十九年には A. Bruguère de Sorsum によりて更に佛蘭西文に轉譯されたり、王氏が大關をも引きたるは偶ま以て氏の涉獵の益廣からんとするを見る、以上は僅に一端に過ぎず、他に有益なる註多し、序ながら附記す、デーギースの譯には元曲中「老生兒」の外に「漢宮秋」Han-Koong saw (The sorrows of Han) あり、一般に元曲は早くより西洋人の注目する所となれり、其の西譯されたるもの、名目をあぐれば既記の外に金錢記、鴛鴦被、賺蒯通、合汗衫、來生債、薛仁貴、鐵拐李、秋胡戲妻、倩女離魂、黃梁夢、昊天塔、忍字記、灰闌記、傷梅香、誤入桃源、趙氏孤兒、抱妝盒、竇娥冤、連環計、看錢奴、貨郎旦、等あり、一種にして數種類の譯あるもあり、「趙氏孤兒」は既に千七百三十一年(清の雍正九年)に R. P. de Prémare の譯 L'Orphelin de la maison de Tchao あり、此譯は實に彼の第十八世紀佛蘭西の大文豪ヴォルテアが千七百五十五年の八月二十日其の悲劇「支那の孤兒」(L'Orphelin de la Chine) を始めて開演するにあたりて大なる影響を與へたる所の者なりと傳ふ、將來支那の文人學士は此等西人の著書をも他山の石として調査する必要あるべし、邦人にとては直接手近き原文につきて翫賞せば或はヴォルテア以上の利用を爲

し得ずとも限らざるべし。

戲曲攷原は實は卷數を記されず總計廿六枚半に亘れる論文なり、名の如く支那戲曲の起原を論せり、それ支那の劇は西洋の學者は之を元代に至り突如として發生せる如くに考へ英人ジャイルス氏の如き之を中央亞細亞よりの輸入物なりといふに至る、支那の樂器并に音曲は餘程古代より外國との交渉ありしことは疑なかるべきも劇そのものが直ちに輸入されし物には非ることは少しく支那の事情を究むれば略察しうべし、王氏の言はあだかも此等一部の論者に對して辨せんとするかの如し、曰く「楚詞の作には滄浪、風兮、の二歌之に先だち、詩餘の興るには齊梁の小樂府之に先だつ、獨り戲曲の一體は金元の間には崛起す、是に於て其の異域より出でて此より前の文學とは關係なきか疑ふものあり、此又た然らず昔て其の變遷の跡を攷ふるに皆、有宋一代に在り、金元人音樂上の嗜好に因りて日に益々發達せるに過ぎざるのみ」と、即ち既に宋以來之ありてそれが漸次金元をへて益々發達せるものとなすなり。

著者は「歌舞を以て故事を演ずる」ものを戲曲なりとし、早く唐代に其起原を求め彼の大面(或は代面)、撥頭、踏搖娘、等の戲を之に擬せり、大面は人の知る如く一に蘭陵王入陣曲といひ北齊時代に起る、踏搖娘は醉夫が妻を撃ち妻怨苦するの狀を寫す、撥頭は胡人猛獸のために其子を嚙

まれ獸を得て之を殺す狀を寫す、その何時に起るや不明なり、然れども三者いづれも唐以前より傳はりしものなり、唐代の劇としては著者は宋の陳暘の樂書を引き昭宗の光化中(西紀九〇〇年頃)に孫德昭の徒が劉季述を及せしとき始て「樊噲排闥劇」を作れることを説き「唐時の戲曲攷ふべき者は僅に此のみ」といへり、(按するに文献通考の樂考十九の内、排闥戲の條下に唐昭宗光化中、孫德昭之徒、刀劉季述、帝反正、命樂工、作樊噲排闥戲、以樂焉とあり)、次に北宋に入りては祥符、天禧、中に(西紀一〇〇八一—一〇二二)楊億、等が唐の李義山の詩風を模せしとき優人が李義山に扮し之を嘲けるために敗裂したる衣服をつけ吾は館閣諸公のためにかくの體裁となれりといへること、及び孔道輔が契丹に使せしとき(西紀一〇三二)酒宴にあたり契丹の優人が孔子に扮して戲を爲すや道輔が怫然として席より出でし、こと等をあげ、此等を一の雜劇なりとし更に進みて徽宗時代(西紀一一〇一—一一二五)春秋聖節三大宴における隊舞(小兒及女兒の隊伍をなせる舞)及び雜劇に説及せり、この宴にのぞみ樂工ののぶるめでたき歌あり、之を致辭又は口號といふ、又た隊舞の舞者を場に引き入れ(之を勾といふ)まかり去らしむる(之を放といふ)にもそれ〳〵歌辭あり、小兒若くは女童が天子の御前に進むや各々四六調のめでたき文句を朗誦す、之を致語といふ、之を引きくるめて廣く樂語といふ、又或は之を致語、念語、ともいふ、民間に於

ても婚嫁、宴享、落成、等にあたりては樂語を用ひ、更に實際に舞を爲すときには舞に適應すべき目的を以て舞詞を作れり、之を轉踏と稱せり、王氏は轉踏の作者の例としては秦觀、晁無咎、毛滂、鄭僅、等をあげたり、其詞の長さは或は七閔、八閔、より十三閔に及ぶあり、かく多數の曲に分つものも各の曲に於て各一つの事を詠ず、然るに此に曲は數多より成るも事からは首尾を通し一人一事について詠するものあり。

數閔を以て一事を詠する者の始は石曼卿の拂霓裳轉踏なり、王氏は宋の王灼の碧雞漫志によりて其の開元天寶遺事を詠せるものなること、而して其辭の今は傳はらざることをいへり、次には趙德麟の商調蝶戀花あり、今趙の著「侯鯖錄」中に存す、(按するに趙德麟は名は令時、蝶戀花は詞の一定の體の名目、商調とはその詞の屬する調の種類の名) 是は凡そ十閔より成り唐の元稹の「會真記」の事實を詠したり、清の毛奇齡の「詞話」以後我邦の元曲を言ふもの皆之を以て「西廂記」の源となす、王氏亦た之を擧げて「後世戲曲の格律に見るに體を具して微なるに幾し」といへり、而して趙德麟の作は十閔より成るとはいへ十閔盡く蝶戀花の調の外に出でず、是にては餘りに單調なり、幸にも宋人は唐以來の水調歌なるものに法とりて更に大曲なるものを用ひたり、こは各段異なりたる調子のものを數多くみあはせて一篇を構成するものなり、此等大曲作家の例として

王氏は曾布、董穎、をあげたり、又その作例をも示せり、董は南宋紹興年間の人なり、北宋より南宋の初に至る曲文の考ふべきもの凡そ以上の如し、然るに曾董の作も亦たなほ叙事體にして所演の人物が自ら言ふの體にあらず、(王氏之を代言體といへり) その自ら言ふの體を用ふるは楊誠齋の歸去來辭引に始まる、王氏その全文をか、げ且ついふ「之を要するに曾、董、の大曲は董解元の先を開き、此曲(歸去來辭引をさす)は則ち元人套數雜劇の祖たり」、又いふ、「故に戲曲の金元に始まらずして有宋一代の中に於て變化せることは余の能く信する所なり」と。

之を約言すれば唐以來多少の劇に類せるあり、北宋に至りて眞に雜劇の名目出で、朝廷民間の樂語、舞詞亦た出で、石曼卿、趙德麟、曾布、董穎、楊誠齋、等をへて殆ど完全に金元曲の體を具するに至りたりとなすなり。

それ支那詞曲の研究は我邦に於ては(一)先輩のそれを除く外)尙ほ極めて草昧に屬せり、本邦傳來の文献の稀少なるがうへに之が階梯たるべき書類亦多からず、或は時に詞曲話の類ありと雖も一字一句の修辭上の談を主とするもの、み、之を通して記述せるものはあらず、況んや溯りて之が源を尋ぬるをや、此の時此際王氏の此著を得るは空谷登音の感なくんばあらず、曲録は一々本書を得る能はざる本邦人に取りては誠に便利なる目錄なり、其數や實に「目たる三千有奇」と稱

す、曲原は又た金元以前傳記行事が歌舞に伴はれたる状況を見るには簡要を得たること既記の如し、二者を通覧するときは略々曲なるもの、大勢を察しうべし。此書に對して議論を挿まんとらば戯曲は果して「歌舞を以て故事を演ずるもの」なりや、其の起原は果して唐代の（或は寧ろ北齊、隋等の）大面等より始て新なる注意をなすべきものなりや、既にその根底に於ても疑なき能はず。然れども支那の士人には比較的閒卻されざる戯曲に向ひ、又は之を演ずる所の優伶は河原乞食どころの沙汰に非ず、士農工商四階級以外に置かれ又たその子孫は三代までも公の試験に應ずるを得ずといふ如き社會状態に於て新たに熱心なる研究を此に進められしことは實に喜ぶべきことなり、著者が更に「三朝の志の敢て言はざる所を補ひ一家の書を成すは請ふ異日を俟たん」といへる抱負に見るときは將來更に有益なる著述の出づべきこと必せり、余輩刮目して之を待つ、本書を讀みて聊か梗概をのべ且つ愚感を記すること爾り。（明治四三、七、四、記）

毛奇齡の擬連廂詞

毛奇齡の詞話卷二 西河合集本、六枚 裏より八枚表 に左の文あり

古歌舞不相合。歌者不舞。舞者不歌。即舞曲中詞。亦不必與舞者搬演照應。自唐人作柘枝詞・蓮花鏡歌。則舞者所執。與歌者所措詞。稍稍相應。然無事實也。

宋末 虎曰く北宋の誤なり 有安定郡王趙令時者。始作商調鼓子詞。 虎曰く即ち蝶戀花の詞 譜西廂傳奇。則純以事實。譜詞曲間。然猶無演白也。

至金章宗朝。董解元不知何人。實作西廂搗彈詞。則有白有曲。專以一人搗彈。並念唱之。嗣後。金作清樂。仿遼時大樂之製。有所謂連廂詞者。則帶唱帶演。以司唱一人。琵琶一人。笙一人。笛一人。列坐唱詞。而復以男名末泥。女名旦兒者。並雜色人等。入勾欄扮

演。隨唱詞作舉止。如參了菩薩。則末泥祇揖。只將花笑燃。則旦兒燃花類。 虎曰く參了菩薩及び只將花笑燃の二語は北西廂第一齣佛殿奇逢に見ゆ 北人至今謂之連廂。曰打連廂。唱連廂。又曰連廂搬演。大抵連四廂舞人而演其曲。故云。然舞者不唱。唱者不舞。與古人舞法。無以異也。

至元人造曲。則歌者舞者。合作一人。使勾欄舞者自司歌唱。而第設笙笛琵琶。以和其曲。

毎入場以四折爲度。謂之雜劇。其有連數雜劇。而通譜一事。或一劇。或二劇。或三四五劇。名爲院本。西廂者。合五劇而譜一事者也。虎曰。一劇二劇とは雜劇となりたる者を一つ或は二つといふこと然其時。司唱猶屬一人。仿連廂之法。不能遽變。往先司馬。虎曰。奇齡の先世司馬の官たりし人、其人未詳從寧庶人處。虎曰。奇齡の兄の子毛遠宗の撰せる擬連廂詞の跋文に先汀州司馬得之于寧庶人所傳樂譜中の語あり、寧庶人とは明の宸濠をいふか、宸濠は曲とは關係多き寧庶王權の後なり、所傳といふときは或は該樂譜は寧庶王權より傳へしものか、宸濠得連廂詞例。謂司唱一人。代勾欄舞人執唱。其曰代唱。卽已逗勾欄舞人自唱之意。但唱者祇二人。末泥主男唱。且兒主女唱。他若雜色入場。第有白無唱。謂之賓白。賓與主對。以說白在賓。而唱者自有主也。

少時觀西廂記。見每一劇。末必有絡絲娘煞尾一曲。于扮演人下場後。復唱且復念。正名四句。此是誰唱念。至末劇。扮演人唱清江引曲。齊下場後。復有隨煞一曲。正名四句。總目四句。俱不能解唱者念者之人。及得連廂詞例。則司唱者在坐間。不在場上。故雖變雜劇。猶存坐間代唱之意。此種移蹤換跡。以漸轉變。雖詞曲小數。然亦考古家所當識者。故先教諭曰。世人不讀書。雖念詞曲亦不可。況其他也。(以上毛奇齡詞話卷二)

引く所長しと雖も學者請ふ仔細に之を讀め。宋遼金元の際に於ける詞曲の推移は一目瞭然たる者あらん。

唐の元稹一び「會真記」を撰して張琪崔鶯鶯の情事を傳へてより宋の趙令時之を蝶戀花の詞を以て敍し金の章宗の朝董解元更に之を搗彈詞となす。謂はゆる「董西廂」なり。金の通俗的文學は董西廂を主なるものとす。彼の雜劇の著名なる作家關漢卿は金末に存せしも其の金代に於て如何なる製作ありしやは詳ならず。而して董西廂は毛氏の言の如く「白あり曲あり専ら一人を以て搗彈し並に之を念唱する」ものにして純然たる語り物なり白あるも科なく又た折を分たす。其狀を想像するに宛も琵琶法師にして本文を語り時に對話をまじゆるものとみば大差なからん。(附言す董西廂は或は之を疑ふもの無きに非りしが金代の板本存せりといへば確信して可ならん)之を科即ち演技を加へて劇とならしめし元の雜劇に比するに其の未だ雜劇とならざるや間一髮といふべきなり。此の間一髮を補ふ可きもの卽ち此處に説かんとする所の連廂詞なり。

金代に果して連廂詞なるものありしや否やは現在にては毛奇齡其人を信すると否とに係る。或はいふ奇齡は異説を立つるを喜ぶ人なれば其言必しも信するに足らずと。溯りて其の源を求るに毛氏の先世司馬の官たりし人が寧庶人の處より得たる連廂詞例といふ者こそ其の説の根據なれ。連廂詞例を得しといふこと烏有の事なりとすれば毛説は探るに足らず。若し其事烏有ならずとすれば暫く毛氏に従はざるを得ず。(異日奇連によりて支那本土に猶ほ詞例を存して之に觀ふこと

を得ば幸なり。余は毛奇齡を信じ又た其兄子毛遠宗の「先汀州司馬得之于寧庶人所傳樂譜中」なる跋文を信じ奇齡の説必ず據あるべしとなすなり。

奇齡已に連廂詞例に據り説を爲していふ。金は遼の時の大樂の製に仿ひて清樂を作せり清樂の中に連廂詞なるものあり連廂詞には「唱」あり多少の「演」もあり其の役人の組織には司唱一人 琵琶一人 笙一人 笛一人 坐を列ね詞を唱ふ 詞を唱ふるは司唱なり、復た末泥と稱する男役、且兒と稱する女役、及び雜色人等ありて勾欄(舞臺)に入りて扮演す、司唱は勾欄の舞人(演技者)にかはりて代唱す代唱すといふは己に舞人が自唱することある意を含む、但し勾欄にての唱者は二人のみ即ち末泥は男の唱を主り且兒は女の唱を主る、雜色人等は場に入るも白をなすのみにて唱をなすことなし、奇齡はこの白を又た「賓白」といふといひ「賓白」と呼ぶ理由として、唱者には自ら主ありこの主に對して白を説くは賓に在るを以てなり、と説明せり虎曰く賓白の語義果して此の司唱の位置は坐間に在りといへば蓋し樂人と同列に在り而して場の上にならず、樂器の位置は場の右に在りといふ、樂器場右のことは毛遠宗の跋文に見ゆ察するに看客よりいはゞ場(勾欄)に面して向て左方ならん舞人(演技者)は固より場内に在り此の如くして演技者は唱に隨て動作を爲す例へば若し「參了菩薩」と唱ふれば末泥は祇揖(恭しく御辭儀する)し「只將花笑燃」と唱ふれば且兒は

花を燃るの類の如し 此くして唱を爲し又た多少の演技を爲すことを北方にて「連廂」といひ又た「打連廂」「唱連廂」「連廂搬演」と稱す。奇齡の文を余は以上の如くに考ふ。

連廂の名は如何にして命せられしか。奇齡曰く、大抵連四廂舞人。而演其曲。故云。と。四廂の言余未だ正解を得ず。按ずるに周以來天子は宮縣とて宮の四面東西南北に鐘磬の如き樂器を懸くることあり是より一面を廂といひ後世「四廂の樂を正す」などいへることあり。然れども四廂は後世果して其實ありしものなるや空名を稱へしに止るや疑なき能はず、晉宋の樂歌を閱するに四廂樂歌あり晉には東西二廂のこと見え他廂のこと詳ならず宋には四廂といふこと見え其中に黃鍾廂 太簇廂 姑洗廂等が某々の歌曲を奏するの記事あるも他の一廂を詳にせず。若し又た晉宋の四廂明に知りうることも金代の四廂は果して其と等しきや否や。毛氏果して金代四廂の制を詳にせるか抑も天子なればとて漫に「四廂舞人」と題せるか。こは異日の講究を俟つ。正解を有したまふ諸賢あらば幸に賜教を垂れられんことを。

金代に連廂詞として如何なる者が存せしや明ならず。毛奇齡は其の得たる連廂詞例に據りて作れりと稱して二種の連廂詞の擬作を試みたり。其一を「賣嫁連廂」といひ其二を「放偷連廂」といふ。此の二詞固より毛氏の擬作にして即ち金代の作には非れども連廂詞の如何なるものなるやの

面目を傳ふる者と謂て可ならん。二詞の全文載せて
西河合集に在り

連廂詞が從來の趙令時の詞。董西廂。等と異なる所は趙詞にては樂工と歌者と別々に演奏せり。董詞にては歌者樂工を兼ねたり。而して連廂にては樂工と歌者は別々にして且つ並に數人より成る。連廂には新に演技者(舞人)ありこの演技者は技を演ずるのみならず唱をもなす(歌者を兼ね)即ち歌舞が同一人によりて行はるゝは從來無き所なり。又た司唱といふ者ありて技藝全體の進行を計り時としては登場の演技者に代りて唱白を爲し時としては樂工に對して指揮を爲す。是亦た連廂特有のものなり。

毛奇齡の擬作二詞は前に已に略々同じ事實を敍したる元劇あるものゝ如く奇齡其の事實を改制し又た元以前即ち金の詞を以て之を正せるなり。毛遠宗が「賣嫁連廂」の後に跋せるに曰く。按宋人松漠紀聞一書。大抵載汴河以北遼金遺事。有元人小說家。曾取其二事。編作兩劇。而其文不全。且事本紀聞。然間雜以子虛亡是汗漫不經之言。君子惡之。家公虎曰く少年時。曾改其劇。謂小說家語。敗倫傷化。既事在元前。思以前元詞正之。云々。と。宋の洪皓の「松漠紀聞」を按ずるに「嗚、熱者國最小」の條下に契丹貴族の間に男女自媒の風俗あることを記せり。又た「金國治盜甚嚴」の條下には正月十六日縱盜の風俗あることを記せり。是蓋し二詞の本く所なり。今二詞の事

實の概略を記する左の如し。

「賣嫁連廂」は金の時、小木蘭河の女子「利哥」なるものゝ「不賣嫁」の故事を詠せり。當時の風俗として上流の家にては女兒は幼時より許嫁の夫あり。男女生長の後は先づ男子を女の家に迎へ然る後男子は女を娶り去る。貧家にありては許嫁の夫なく女子十六歳を過ぐれば自ら其の本籍、系統、生年月、技藝、容色等を一個の歌曲によみこみ身なりをつくろひて途すがらうたひもてゆき意に稱へる男よとみれば我が歌ふ所をきかせて彼の我を取るにまかす。之を「賣嫁」といふ。利哥は例ならば賣嫁を爲すべきなるに之を爲さずして其の老いたる兩親の膝下にありて孝養を盡さんとせるものなり。此の事件は金の天會年間のこととして記されたり。

「放偷連廂」は遼の耶律忽論なるものゝ「不放偷」の故事を詠せり。耶律忽論は遼の太祖の八世の庶孫にして初の名を斫石といふ。遼亡び金に降り姓を木葉と改む。東京留守に任せられ渤海の寨子を守る。當時の習慣として正月十六日には盜を爲すこと勝手たるべしとせられたり。是即ち「放偷」なり。然るに忽論は人となり方正にして之を嚴禁せり。此に忽論の妻に五骨倫といふ者ありしが騒亂の際に見失はれ今は金の皇統六年金の西北招討司監・統渤海譯史・擦八なるものゝ妻たり。忽論未だ之を知らず。忽論の兄に耶律大石あり大石の子に傜篋あり。二代の間に起兒漫の里に據り

西遼皇帝と號し勢盛なり。是に於て金の朝廷より擦八を経て忽論に命じ僞竄を諭して來朝せしめんとす時恰も正月十五日にて擦八は黑水府に募參りに往き妻なる五骨倫をして命を忽論に傳へしむ。五骨倫は正式に命を傳へし後ち忽論を見て其の舊夫なるを悟り事情を探聞して其の然るを確めたり。因て忽論に勸め翌日は放倫の故事に依りて我身を盗み去れといひ且つ場合によりては擦八が十七日の朝には西遼へ使として赴かしむる送別の宴に事よせて忽論を暗殺するやも知れずといふ密謀をも告げたり。而して忽論は之を肯せず我は斷じて放倫をなさすといふ。五骨倫は一時途方にくれしが擦八が歸り來るや一切の顛末を之に物語りたり。擦八は平生忽論を重せしが之を聞くや愈々其人と爲りに感じ遂に潔く忽論に五骨倫を送り還し又た忽論をして無事に西遼へ使せしめたり。

奇齡の作につきて連廂詞の形式を見るに「賣嫁連廂」に於て先づ、

〔司唱一人。司笙笛琵琶三人。先演吹彈。畢。司唱者云。〕

とありて司唱と樂人をろひ、一わたり吹彈ありてのち、司唱は

已過亂離日。難禁老病身。堪憐小兒女。不嫁奉雙親。

といふ詩をうたひ、次に

試問看官每。〔每は「門」に古文の「等」〕 偏道這四句詩。說在那里。云々

と此詩の意味より此作の筋の概略を物語り利哥の志節を説き詩句を引用して

正是。幾番濁浪相推去。惟有清泉不共流。

と賞め、續いて

説話間。備看。里頗夫婦利哥の兩親。與利哥三人。早上來也。

とて三人の役者の登場せることを告げ知らす。それより

〔扮里頗夫婦。拄杖。利哥扶持上。分立。雜演吹彈畢。司唱云。〕

里頗開口。便向老婆説。……

と司唱が里頗の言ふべきことを言ふ。其間には司唱の話と應じたる利哥の「科」あり。又た司唱が「里頗は詞を唱へますよ」「利哥は唱へますよ」といへばそれに應じて里頗利哥は詞を唱ふるなり。

「放倫連廂」の中に五骨倫と耶律忽論とが役所に於て始て相見てびつくりせしことを司唱が説明し而る後ち司唱又た語を續きていふ

看官每聽者。這一回。是五骨倫且兒寶白。忽論末泥主唱。請撻笙笛。助我俚詞。

と。是、司唱は登場演技者に代りて唱白を爲すことあれども此度は且兒 末泥 自身が之を爲すものなることを看官に告ぐるなり。是よりつゞきて末泥 且兒 間の唱白あり。司唱が樂工に命ずる態度も亦た上文によりて之れを推知するを得べし。

蔣士銓の冬青樹

一

「冬青樹」は支那南宋の忠臣文天祥、謝枋得、其の他の仁人義士烈婦等の傳記逸事を本として織だした一篇の史劇である。その作者は清の蔣士銓といふ人である。この人は字を心餘といひ、又の字は蒼生、號は清容、江西省鉛山縣の人、乾隆五十年に六十一歳でなくなつた。享保十年(天明五年)四曆一七二五士銓は乾隆二十二年に進士になりはなつたが官途には重く用ひられなかつた。しかし詩では名高く清の高宗が彭元瑞と共に之を江西の兩名士といつた位である。又汪軫、楊奐、趙由儀と共に四子と呼ばれた。王昶といふ人の書いた士銓の墓誌銘によると「士銓の人品はすつきりしたもので今様の人物ではない、ゆつたりしてをるがじやうだんもいふ、身分はわるくともわらゐものは之を賞揚する、特に忠義なものはひどくほめる、まあ、むかしの烈士とかいふ風の人である。それで學問はひろく古文辭もできる填詞聲曲にもわたり、いづれもそれに長じてをる」といつてあるが詩ばかりでなく色々の長所をもつてをつた人である。著述には忠雅堂文集十二卷(或十六卷)、

詩集二十七卷(或三十卷)銅絃詞二卷、填詞九種があるといふことであるが詩の方は我邦でも相當に崇拜者を持つてをる。詞の方は李調元といふ人の言に十五種曲あつてまだ刊行せられぬといつてあるのを見るに九種には限らぬものと見ゆる。普通行はるゝは紅雪樓九種曲で其の名は冬青樹、桂林霜、一片石、第二碑、雪中人、空谷香、香祖樓、臨川夢、四絃秋である。この中冬青樹はそれ等のうちやゝおそくできたもので即ち乾隆四十六年天明元年一七八一の八月にできた。士銓は全篇三十八齣を三日間でこしらへたのである。敏捷の才も驚くべきものである。

余は嘗て文天祥の幕僚であつた宋の謝翺の西臺慟哭記を読み、また周密の癸辛雜識、陶宗儀の輟耕錄などにのつてをる元の番僧、楊璉真伽なるものが南宋の諸陵を發掘し金銀を奪ひしとき唐珙、林景熙といふ義士が竊に陵骨を改葬したといふ史實を見て非常に感動したことがある。いつかその事迹をかきつゝりたいたいものだと思つてをつたに、この「冬青樹」を讀んでみるにそれらのことはもとより網羅されてをり、そのうへ文天祥、謝枋得の如き大局に關係ある人をはじめ、琴師汪大有、宮女王清惠、朱夫人にいたるまで鬚髯の男子も紅粉の美人も苟くもその餘芳遺烈を發揮すべきものは盡く此に集められてをる。ましてそれが士銓の悽婉哀麗なる筆致を借りてをるに於てをやだ。余は此の曲の極々の概略を叙して處々抄譯を試みやうと思ふ。本文に入る前に宋の時

代の概略を申しのべる。

二

宋の世は太祖太宗から始め眞、仁二宗いづれも明君で學問も盛に人物も輩出したが神宗の時に王安石の新法さわぎが有つてからは内には朋黨の争ひ外には西夏とか遼とかの外患が絶えなくなつた。北宋の末に徽宗皇帝といふ藝術家の天子が出て其の方面ではすばらしいものであつたが政治の方面はさつぱりだめであつた。宋も百六十七年ばかりつゝいた時に、運命とはいひながら、遼について起つた北狄、金人の侵入を受け、徽宗並に其の子欽宗皇帝は其の都たる大梁(開封)を攻めおとされ捕虜として北方へ運び去らるゝことになつた。(今から七百七十四年前、我が白河法皇時代)。しまひに二帝は五國城(今の吉林省三姓)で餓死せられた。

徹夜西風撼破扉。蕭條孤館一燈微。家山回首三千里。目斷天南無雁飛。

是は徽宗が北方へ送らるゝ途中の詩と傳へられてゐる。怪しげな宿所で消ぬぬばかりの燈の前に坐つてゐると風ががたがた破れ扉をおしたゝく。空をながめても故郷に向つて飛ぶ雁もないと嘆息したのである。

紇干山頭凍死雀。何不飛去生處樂。

是は欽宗の作だといふことであるが凍死の雀に自分をたとへたのである。苟くも萬乘天子の身を以てかやうの目に出逢はれるといふは實に憐れ至極なことである。

天子が金に奪ひ去られたから宋では高宗といふ天子を推したて、揚子江をわたり初め南京で位に即いたが後に臨安(浙江杭州府)に都を移した。是より後を南宋と稱へる、南宋は元に亡されるまで百五十三年ばかりつゝいた。臨安といふ處は名高い彼の西湖などといふ處があつて非常に風景がよい。宋に柳永(字は耆卿、柳屯田として知らる)といふ詞人が有つて「望海潮」といふ調子の詞を作つた。それは杭州の繁華なところや風景のよいことをうたふたもので大變に綺麗な詞である。是はそのころ評判の歌妓楚々といへるものうたはせたといふことで随分はやつた詞と見ゆるが、その中に「三秋桂子、十里荷花」といふ句がある。金の海陵(名は亮)は北に在て遙に其詞を傳へきいて、そんないゝ處なら一番奪ひ取つてやりたいものだといふ江南侵略の大野心を起し、遂に彼の何人も知つてゐる所の「題軟屏」詩なる「移兵百萬西湖上、立馬吳山第一峰」といふ壯快な語を吐出したといはれてゐる。

杭州はそんないゝ處であるから遊ぶにもつてこいの地である。そのうへ南渡早々宋の政權を握

つた連中がいづれも善くない者どもである。先づ黃潛善、汪伯彥などから始め秦檜、王倫の徒、韓侂胄、史彌遠、賈似道、盡く奸臣佞物である、北では金は宋を併呑することが出来ぬうち宋の南渡後百七年許りで蒙古(元)に亡された。で宋の北方の敵は元となつた。元が金を滅して非常な勢ひで壓迫を加へ来るに彼等奸臣は天子にすゝめて歌舞宴樂にふけり、(爲に芝居は發達したが)贅澤三昧に其の日を送り、朝野の間に沸きつゝある和、守、戰の三論の如きは物の數もしなかつた。李綱とか張浚とか岳飛とか虞允文とかいふ名臣忠將が出たにしても漫々たる惰氣を以て覆はれたる大勢には抵抗することができなかつた。

宋の度宗の咸淳九年に元と宋との大關門たる襄陽が元に攻め陥された。翌年元の世祖忽必烈の左丞相、伯顔は大舉して揚子江を渡つた。それより一舉して都の臨安を陥れやうといふ計畫である。此時の宋の宰相は賈似道で襄陽が圍まれて今にも陥るかといふときに葛嶺に樓閣を立て、官女でも娼女でも尼でも美しきものは取つて妾とし勝負ごとをするとか、きりくすを聞はせるとか甚だしきふるまひである、それで表向は襄陽の援ひに自分をやつてもらひたいと天子に上奏しながら蔭では他のものに言ひふくめて自分を諫めてやらさぬやうにするといふやうな狡猾なことをする。こんな宰相では其の國が亡びるのも無理はない。此人しまひに雪隠で殺されるといふめ

にあつた。これに繼いだ宰相は劉忠齋で後に元に降つて留夢炎といつた人である。こんな風で中央政府は亂脈至極であるが一方には文天祥、謝枋得、張世傑、陸秀夫のやうな大忠臣豪傑もあらはれた。

三

宋の度宗は咸淳十年(襄陽が陥つた翌年)になくなつて其子恭帝(名は曩)が位についた。翌年即ち徳祐元年元兵は三道より進んで直に臨安に迫つた。その翌年(元では至元十三年)伯顔は城外の皇亭山に陣取つて宋の宮廷政府と降服を議した。此の時恭帝はたつた六歳であるから何もわからぬ頭はなき子供である。其の後見には度宗の皇后で帝のおつかさんたる全氏があり、またその上には度宗の義の母にあたり理宗の皇后たる謝太后がをる。宰相には陳宜中といふ者が居つたが是は危険と見てとつて夜逃げをしてしまつた。仕方なく謝太后、全氏、恭帝は降表をたてまつつて元に捕はれの身となつた。此の時琴師で謝后に事へてをつた汪大有(元量)といふ人が有つた。(劇中の一人なり)。この人は琴師ではあるが慷慨國を憂ふる士で且非常に詩を善くした。詩集に水雲集といふがあり、其の中に三宮(謝氏、全氏、恭帝)降參の模様や女官一行が元の大都(北京)へ